

家庭教師

S E C R E T L E S S O N

Novel / 雜破 業

Illustration / A10



KSS
NOVELS

How do you spend your days? Fine? Lonely? Satisfied? To your heart,
our KSS Novels want to send "powerful and heartfelt" feelings little
more than yesterday through our book... "Hang on everybody!!"



9784877095420



1920293009056

ISBN4-87709-542-X

C0293 ¥905E

発行 株式会社ケイエスエス

定価 本体 905円 +税

冴子はナイスバディの女子大生。高額のパイト代につられて家庭教師を引き受けたものの、生徒の明生はとんでもない劣等生だった。そんな明生にやる気を起こさせるため、冴子は自分の身体を《ご褒美》に、秘密の授業を開始した。最初は、自慢の巨乳を見せるだけのはずだったのに、明生の要求はどんどんエスカレートして、ついには……。

明生の妹の梢と母親の千春も巻き込んで展開される、淫らな禁断の宴。連続する濃厚なエロシーンの果てに訪れるのは？



KSS

SECRET LESSON

[PROFILE]

Novel 雑破 業 Go Zappa

八月三日生まれ。埼玉県在住。お約束を心から愛する関西人。趣味は、テレビにツッコミを入れること。近著に「なばかり少年探偵団 雨のちカゼ」（富士見ミステリー文庫）がある。

Illustration A10

いるのかいないのか、本人もピンと来ない器用貧乏漫画描き。むこうの太陽が透けて見えるほど影が薄い。肉は厚い。忘れかけたところになにか描くのが得意。BLOS様の「カラフル萬福星」に、切られてなければまだいるはず……。

Cover Illustration A10
Cover Design Hiroyuki Matsuura
(TASK FORCE)



家庭教師

SECRET LESSON



家庭教師

SECRET LESSON





電撃を浴びたように明生の細腰が撥ね、
それと同時に尿道口からジェル状の
白濁液が撃ち出された。

出てる。お兄ちゃんが、梢の中で射精してる。



千春は明生の足元にひざまずくと、雨の日、外から帰ってきた子供の泥で汚れた足の裏をふいてやるような気軽さで、息子の牡器官に舌を伸ばした。



家庭教師

S E C R E T L E S S O N

Novel 雜破 業

Illustration A10

Lesson 1
取引



「勉強するから、そのかわり……」

「えッ、家庭教師？」

榊原^{さかきばら}冴子^{さえこ}が同じ大学に通う仲田^{なかつた}良美^{よしみ}からバイトの話を持ちかけられたのは、学生食堂で少し遅い昼食をとっているときだった。

「そ、相手はウチの近所のコなんだけど、どう？ あんた、今、バイト探してるんでしょ？」

「ん、まあ、そうだけど……」

冴子は口の中にすすりこんだ味噌ラーメンを、あまり噛まずに呑み下してから曖昧^{あいまい}になずいた。彼女は今、大学の三回生で、単位取得がそのまま順調に行けば、まず留年の心配はない。となると、来年は卒論や就職活動で忙しくなる。つまり、ゆつくり遊べるのも今年いっぱいということだ。だから、学生生活最後の思い出にと、この夏は南の島へのバカンスを計画していた。行き先はありきたりだがハワイかグアム。おニユーの水着でビーチの華になり、旅先でいい男を引っかけて、ひと夏のアバンチュールとしゃれこむつもりだ。もつとも、そのためには先立つものが必要で、夏休みまでに資金調達をしようと、わりのいいアルバイトを探していたのだ。

「カテキョーかあ……」

割り箸^{わし}片手^{ぱし}に冴子が小首をかしげると、顎^{あご}のラインで切り揃^{そろ}えたクセのない黒髪がサラ

りと揺れた。細かい傷がいつぱいついたプラスチックのグラスに入った水をひと口飲んでから、形のいい眉まゆを軽く寄せ、

「ガキの相手はあんま好きじゃないのよねえ」

「教職とつてる人間がなに言ってるの」

スレンダーな体軀たいくをジーンズとポロシャツに包んだ良美があきれたように言う。

「いや、まあ、それはそうなんだけど」

良美の言うとおりに、冴子は教職課程を選択していた。だがそれは、就職が決まらなかったときの保険みたいなもので、本気で教師になるつもりはさらさらない。いわゆる《でも・しか教師》の予備軍というわけだ。

「ま、やるかどうかは条件次第ね」

良美にくわしく話を聞くと、一回二時間程度の授業に対し報酬ほうしゅうは最低でも一万円。それが週三回ほどで、テストの点数が上がればボーナスもあるという。

「ね、どう？ 悪いハナシじゃないと思うんだけど」

悪いハナシどころか、またとない好条件だ。これを上回る稼かせぎがあるのは、フリーゾクか新薬の被験者ぐらいだろう。

「ホントだったら、あたしがやりたいとこなんだけど、今やってるレンタル屋のバイトが

カレシと一緒にさあ」

なるほど、カネよりオトコというわけね。

澄^すましているといささか冷たい印象を与えるほど整った冴子の顔に、おもしろくなさそうな表情が浮かぶ。どういうわけかボーイフレンドと長^{なが}続^つきしない、恋人万年募集中の彼女としては、彼氏と仲睦^{なかむつ}まじいところを匂^{にお}わされると、苦^{にが}々しい気持ちにならざるをえない。だが、実^み入^いりのいいアルバイトを探していた身にすれば、良美が恋にうつつを抜かしてくれるのは好都合だ。

「で、どうする？ やる？」

「やるやる！ やらせていただきます！」

と、高額のバイト代につられて引き受けたものの、実のところ冴子には家庭教師の経験はまったくなかった。教職課程をとっていたので必然的に教育実習は済ませていたが、それは「ガキ」という生き物の扱いづらさを思い知らされただけで、勉強を教えるノウハウと呼べるようなものはぜんぜん身につけていない。それに、冴子が教えることになる少年——高瀬^{たかせあきお}明生はさ来年に大学受験を控えているらしく、頭ごなしに言うことを聞かせられる年頃ではない。とりあえず家庭教師の経験がある友人にアドバイスを求め、付け焼き刃を用意しているうちに一回目の授業の日がやってきた。

高瀬家は、いわゆる山の手の一角にある高級住宅街に建っていた。計算高い女性なら誰しも、いいオトコを引っかけて、こうしたところの若奥様におさまりたいと思わせる瀟洒しょうしゃな一戸建だ。約束の時間より五分ばかり早く到着した冴子が、柄がらにもなく少し緊張しながらチャームを押すと、すぐに中からいらえがあつた。ひよつとしてお手伝いさんでも出てくるのでは思ったが、ドアを開けて彼女を中に請しょうじ入れてくれたのは、明生の母の千春ちはるだつた。

趣味のいい応接セットを配したりリビングルームに通され、やわらかなソファに腰を降ろすと、「おかまいなく」と言う暇もなくお茶が出てくる。どうやら、冴子がくる頃合いを見計らつて用意してしてくれたらしい。落として割つたら一回分の授業料が吹っ飛びそうなティーカップを口元に運ぶと、香りのいい湯気が鼻腔びこうを満たす。味と香りを損なわないよう、砂糖もミルクも入れていない紅茶をひと口飲むと、ようやく気持ちちが落ち着いてきた。

天板がガラスの背の低いテーブルをはさんで冴子の正面に腰を降ろした千春は、黒いニットのプルオーバーに臍すねのなかばまである上品なシルエットのスカートを合わせている。たしか明生の下にもうひとり娘がいると聞いていたが、ふたりの子供を生んだにしては、身体の線はそれほどくずれていない。もちろん肌の張りは二十代に差しかかったばかりの

冴子に及ぶべくもないが、年齢を重ねることが老化ではなく成熟として作用した結果、肌^き理^めの細かい肌は上質なシルクのようななめらかさを獲得していた。それを目の当^またりにする^と、冴子は若さで張り詰めた自分の皮膚^{ひふ}がビニールのように味気ないものに思えてくる。

「榊原さん、でしたわね？」

少し鼻にかかった千春の声は、口元にホクロをひとつあしらった艶^{つや}っぽい唇から出るのにふさわしい大人の女のものだった。結^ゆい上げられた黒髪は洗ったばかりのようにしつとりとして、それが鮮やかなルージュの赤と相俟^{あいま}って肌の白さを引き立てている。

全身から女っぽさが自然とにじむ千春の前だと、冴子はふだんからことさらヒールの高い靴^{くつ}を履^はき、いいオンナをきどっていた自分がひどく子供に思えてしまう。紺のカットソーに揃^{ひざたけ}いの膝丈のスカートで大人っぽくキメたつもりになっていたが、そうした背伸びぶりが恥ずかしい。だが、今さら着替えに戻るわけにもいかず、女としての気後れを感じつつも型どおりのあいさつを交わし、授業料の額や授業を行う曜日など具体的なとり決めをする。それが済むと、千春は手元に置いてあった角形の封筒の中から数枚の答案用紙をとり出した。

「とりあえず、これを見ていただけますかしら」
うわちゃあ、これはひどいわね。

テーブルの上に並べられた採点済みの答案用紙を見て、冴子は心の中でため息をついた。現代国語が四十二点で、かろうじて赤点をまぬがれているほかは軒並み二十点前後と、惨憺たる点数のオンパレードだ。さらに数学に至っては、七点と二ケタを切っている。一学期の中間考査からこの成績では、親が家庭教師を雇いたくなるのも無理からぬことと言えよう。

こりゃあ、苦勞しそうね。

冴子の顔にチラリと浮かんだ表情で、その内心を読みとったのか、千春はわずかに首をかしげると片方の頬に手を当てて、

「中学のときはそれなりにできるコで成績も上のほうだったんですけど、今の学校に入ってから急に思わしくなくなつて……」

なるほど、よくあるパターンだ。おそらく、志望校に合格したとたん、気抜けしてしまふ《燃え尽き症候群》というヤツだろう。本来なら、入試というふるいにかけられて自分と同レベルの学力を持つ者が集まっている中、スタートラインに戻って一から出直さなければならぬのだが、そうした気持ちの切り替えができなかったに違いない。そして、今まではさして努力せずに上位の成績を保っていただけに、いったん下に落ちると、そこからどうやって這い上がればいいのかわからないのだろう。

家庭教師をつけようというのだから、成績がいいはずはないと思っていたが、ここまでひどいとは予想していなかった。わりのいいバイト代にボーナスと、少しハナシがうますぎると思ったが、こういうわけだったのか。冴子も特に訊きはしなかったが、このアルバイトを世話してくれた良美は、明生がこんな劣等生だとはひとことも言っていなかった。だが考えてみれば、八十点の平均点を九十点に押し上げるのに較べると、赤点の生徒を全体の平均に追いつかせるほうがまだ簡単はずだ。それに、スタート地点が低いほうが上げ幅が大きくなる可能性が高いので、ボーナスをもらえるチャンスも大きいだろう。

バイト代……ボーナス……豪華な海外旅行……。

もうボーナスをもらった気になったのか、冴子の脳裏にこの夏に予定しているバカンスのイメージがひろがった。

青い空、それよりももっと青い海、そして白い砂浜。自慢の巨乳を引き立てる最新モードの水着を身にまとい、高級ホテル群を背景にするビーチを闊歩して、燦々と降り注ぐ太陽の光とものほしそうな男たちの視線にめりはりのあるボディを惜しみなくさらす。マツチヨなガイジン、いかにも軽そうなナンパ男から現地の物売りの少年まで、浜辺のオトコはよりどりみどり。

さあーて、ひと夏のアバンチュールの相手は、だ・れ・に・し・よお・か・な？

「榊原さん」

いつの間にか妄想の世界に浸りこんでいた冴子ひたを、千春の声が現実ひたに引き戻した。

「お紅茶、もう一杯いかが？」

「あ、はい、いただきます」

千春はテーブルの上のティーポットをとり上げ、カラに近くなっていた冴子のカップに紅茶を注いだ。その物腰はどこか気怠けだるげで、冴子はほとんど死語の「有閑マダムゆうかん」という言葉おもむきを思い浮かべた。御近所の奥様方からなんと呼ばれているのかは知らないが、イメージとしては「高瀬さんの奥さん」ではなく「高瀬夫人」といった趣がある。こうしてお茶をいれるぐらいならまだしも、エプロンを着けて家事をしている姿はちよつと想像できない。

二杯目の紅茶で喉のどを潤うるおしながら、冴子はさつきからずっと気になっていたことを訊いてみた。

「あの、ところで明生くんは？」

「それが……」

と千春は言いよどみ、もうしわけなさそうに目を伏せた。そうしたなにげない所作しよさにも、同性の冴子が見てもドキリとするような大人の色気がにじんでいて、こうしてふたりつき

りで向き合っていると妙な息苦しさを感じるほどだ。

最初、リビングルームに通されたとき、冴子は明生とはここで顔合わせをするのだろうと思っていた。だが、そこに肝心の教え子の姿はなく、たがいのあいさつが済んでも、千春が自分の息子を呼ぶ気配はない。ひよつとして、授業料の話などが出ることを考えて、わざと席を外させたのだろうか。

「今さらこんなことを言うのもなんですが、じつはあのコ、家庭教師の先生がくることにあまりに賛成してくれなくて」

「はあ」

まったくもって、今さらそんなことを言われても困る。

「お恥ずかしいことですが、主人が家を空けがちなもので、つい甘やかしてしまつて」

良美から聞いたところによると、千春の夫の慎一しんいちは、さる一流商社に勤めていて、去年の秋口からずっと仙台の支社に単身赴任しているらしい。

「反抗期……なんでしようか、わたしの言うことなんてぜんぜん聞いてくれなくて」

有閑マダムのイメージに似つかわしくない、普通の母親らしい愚痴ぐちが千春の口からこぼれる。

「あ、でも、とにかく一度お会いしてみなさいと、今日は学校から帰ったら部屋にいるよ

うに言っておりますから」

そう言いながら、千春は視線を天井のほうに走らせた。どうやら明生は二階の自分の部屋にいらっしゃるらしい。

「あのお、会ってみて、それでもヤダってことになったら、どうなるんでしょうか？」
「えッ、まあ、それは……」

と千春は言葉を濁し、その場をとりつくろうように、

「大丈夫、榊原さんのようにすてきな方なら、あのコも気に入るに決まっていますわ」

なんだか急に雲行きが怪しくなってきた。千春のいかにも社交辞令めいた言葉が、かえって不安を誘う。明生に会って気に入られなければ、その場でクビということもありそうだ。冴子はすてきな夏のバカンスが、早くも危機にさらされるのを感じた。

「それじゃあ、今から二階のほうへ」

千春が巨乳自慢の冴子にも劣らない豊かな胸のふくらみを、ユサリと揺らせて立ち上がった。骨格の存在を疑わせるような、すらりとしたうしろ姿のあとについて、冴子は二階へと向かう。階段をのぼりきったところから、フロアリングの廊下がまっすぐに伸びていて、その両側に三つずつドアが並んでいた。千春は手前からふたつ目の右側のドアをノックして、

「明生ちゃん、家庭教師の先生がお見えになったわよ」

部屋の中から母親の呼びかけに応える声はない。千春はもう一度、さっきより幾分強くドアを叩いた。

「どうしたの？ 家庭教師の先生がいらっしゃってるのよ」

返事がないのに焦れたのか、千春はノブに手をかけると、

「いい？ 入るわよ？」

と、ことわってからドアを開け、部屋の中に足を踏み入れる。冴子は夏のバカンスがまた一歩遠のいてゆくを感じながら、そのあとにつづいた。部屋は八畳相当の洋間で、ドアを入ってすぐのところにはフローリングの床に円形のカーペットが敷いてあり、その近くにAVセットや本棚が配置されている。入り口から見て左手の奥に机が、その反対の壁際に接してベッドが置かれていた。千春がまめに掃除しているのか、男のこの部屋にしては、わりとかたづいていそうだろう。

冴子は部屋をぐるりと見まわして、それが自分の住む賃貸マンションのワンルームよりあきらかに広いことを確認すると、「明生ちゃん」に対する印象が、さらに悪いほうへ傾いた。それに拍車をかけるように、明生は千春と冴子が部屋に入ってきたにもかかわらず、ベッドに仰向けに寝転んだまま、顔の上にかざすようにしてマンガ雑誌を読んでいる。

「明生ちゃん、家庭教師の榊原先生よ。ちゃんとごあいさつなさい」

母親にそう言われて、ようやく明生はマンガ雑誌を枕元に置くと、ベッドの上で身を起こした。

あら、けっこうかわいいじゃない。

明生の顔を見たたん、冴子の中で「わがまま息子」へのイメージが少し持ち直した。今までの態度から、どんな憎たらしいガキかと思っていたが、意外にかわいい顔をしている。鼻筋の通り切らない顔立ちは少年から大人へ半歩踏み出したばかりといった感じで、アーモンド型の目は瞳が大きく、子供臭さを多分に残していた。長袖のTシャツにジーンズという格好で、クセのある黒髪を少し長めに伸ばしている。

明生はベッドの端に腰かけたまま、千春の背後に立つ冴子をチラリと見上げ、

「家庭教師なんかいらなくて言っただろ」

母親に向かって唇をとがらせる仕草しぐさがとても子供っぽくて、たつぷりと甘やかされて育ったことをうかがわせる。

「なにを言うの、明生ちゃん。せっかく来てくださったんだから、ちゃんとお勉強を見ていただくなさい」

「勉強なんか見てもらわなくってもいいよ」

「いいわけないでしょ。このあいだのテストみたいな点、またとったらどうするの？」

惨憺たる中間考査の結果を持ち出されると、明生はさすがにグツと詰まって、いまいましげに「わかったよ」とつぶやいてから立ち上がる。背はそんなに高くないが、体毛の薄い手足はスラリとして、モデル並にスタイルはいい。心中の憤りいきどおを表すように、机の前の回転椅子いすにドサリと腰を落とす。

「それじゃあ、明生ちゃん。先生の言うこと、ちゃんと聞くのよ。いいわね」
「うん」

と答えた明生の顔は、とてもちゃんと言うことを聞きそうにない仏頂面おうちようづらだ。

「先生、あとはよろしくお願いします」

そう言つて冴子に頭を下げると、千春は息子の部屋を出た。ドアが閉まり、階段を降りる足音が遠ざかると、明生が回転椅子から立ち上がり、ふたたびベッドに身を投げ出して、マンガ雑誌に手を伸ばす。

「ちよつと、どうゆーつもり？　これから勉強するんでしょ？」

自分がそばにいることをまったく無視した態度に、冴子の語気が荒くなる。
ベッドでうつぶせになった明生は雑誌のページをめくりながら、

「勉強だったら自分でするからいいよ」

自分でしないから家庭教師を呼ばれるんでしょーがッ！

喉まで出かかった言葉を、冴子はグツと呑みこんだ。ここで明生と正面から衝突したら、あとで「あの家庭教師は絶対イヤだ。他の人と代えてくれ」と言われるのは目に見えていゝ。今までの様子からすると、千春は息子にベタ甘のようだ。困った顔をしながらも、明生のわがままを通してしまう恐れは充分にある。

せっつかくつかみかけた儲け口^{もう}をふいにするのは、いったん口に入れた飴^{あめ}を無理やり吐き出させられるようで、なんとも惜しい。とにかく雇ってもらえさえすれば、そんなに成績が上がらなくてもバイト代はもらえるはずだ。ここはひとつ、多少のことは我慢して、明生とうまくやっていく道を探るほうが利口だろう。

まがりなりにも教職課程を終えた人間の考えることとは思えないが、冴子は頭の中ですばやくソロバンをはじくと、無理に作った笑顔を明生に向けて、

「まあたしかに、家庭教師までつけられて、無理やり勉強させられたくないって気持ちはいくわかるわよ。あたしも高校生のころはあんま勉強好きじゃなかったし」
「へえー、そんな昔のことよく覚えてるね」

雑誌のページに目を落としたままの明生にさらりと言われ、冴子の片方の眉がヒクツと撥^はねる。

二十歳すぎの乙女をつかまえて、なんちゅーことを……。

しかし、ここで怒ってはいけない。「バイト代、ボーナス、バカンス」と気持ちを静める呪文を心の中で唱となえると、口元を怒りでひくつかせつつ、

「なんだかんだ言っても、けっきょくあなたも大学行くつもりなんでしょ。だったら、早いうちからコツコツ勉強しつこくしといたほうがいいわよ。あとで後悔しても遅いんだから。ほら、『少年老い易く学成り難し』ってゆーでしょ」

「うっさいなー。そんなオバン臭い説教聞きたかないよ」

お、オバン臭い……。

逆鱗げきりんを亀の子だわしでこすられて、冴子の顔が赤くなる。マンガだったら頭から湯気が出ているところだ。だが、金の力とは恐ろしいもので、冴子はいぞ発揮したことのない驚異的な克己こつき心で、爆発寸前の怒りを抑えこむ。

「いいこと、あたしはあなたのためを思っ……」

「なに言っただよ。どーせバイト代が目当てのクセに」

本音をズバリと言い当てられて、冴子は一瞬言葉に詰まる。

それを横目で見ながら、明生は涼しい顔で、

「ま、どうしても勉強してほしいってんなら、それなりの条件を出してもらわないとね」

「条件？ なにがどうなら、勉強してくれるワケ？」

「そうだなあ……ちゃんと勉強したらご褒美^{ほうび}が出る、なんてのはどう？」

「ご褒美？ ご褒美ってどんな？」

「たとえば、ほら、センスとさせてくれるとかさ」

「……って、なにを？」

面と向かって聞き返されると、明生は少し口ごもってから、

「だから、その、セックス」

「なッ！」

今日はよく言葉に詰まる日だが、冴子は今度は本当に絶句した。明生はベッドから跳^はね起きると、そばに立つ冴子を青い欲望をあらわにした目で見上げる。

「ね、いいだろ？ エッチがダメなら、胸さわらせてくれるだけでもいいからさ」

「な……なにバカなコト言ってるのッ。そんな約束できるわけないでしょ！」

冴子に厳しく撥ねつけられると、明生はムツとした表情を顔に浮かべ、ベッドにひつきかえる。

「それじゃあ、もう、絶対勉強しない」

このガキィ。

冴子は心の中で齒ぎしりしながら、必死に「落ち着け、落ち着け」と自分自身に言い聞かせる。ここで怒るのは簡単だ。だがそれは、自分の手で夏のバカンスをぶち壊すことになる。

「別にいいじゃん。胸ぐらいバーンとさわらせてやんなさいよ。そんでお金もらえるんならいいじゃない」

冴子の耳元で彼女と同じ顔をした手のひらサイズの悪魔がささやいた。すると今度は反対の耳のそばで、これまた冴子と同じ顔の手のひらサイズの天使が言う。

「ダメよ、そんなの。いくらお金のためでも、そんな破廉恥はれんちなことしちやいけないわ」「なに言ってるのよ。こんない儲け話、もうないわよ。夏のバカンス、ダメになっちゃてもいいの？」

「誘惑に負けちゃダメ。いくらお金のためでも、していいことと悪いことがあるはずよ」うーん、たしかにそおねえ……。

黒い領域と白い領域の境目に置かれた冴子の心の中の天秤てんびんが、白いほうへと傾いた。そこで天使は、あとひと息とばかりに、

「そうよ。部屋の掃除はあんまりしないし、ダイエットは毎回三日坊主だし、酒癖は悪いし、お高くとまってるわりにはオトコ好きで、調子に乗ると手がつけられないほど淫乱な

あなただけど、人間として最低限のプライドは保たなきゃ」

「ちよつと、それ、どーゆーコトよッ！」

天使のあまりな言いように、キレた冴子が噛みついた。

天使は額に冷や汗を浮かべながら、

「え、いや、別に悪気があつてのことじゃ……」

「もういい。あんたのゆーコトなんか聞かない」

心の中でそう言い切ると、冴子はそこから天使の姿を締め出した。

そうだ、こんなチャンス逃す手はない。リッチでゴージャスな夏のバカンスを実現させるためなら、多少のことは許されるはずだ。

いつの間にか、肩にちよこんと腰かけた悪魔が「イケイケ！ ゴーゴー！」と腕を突き上げる。

たしかにさわらせるのはマズイけど、見せるだけならいいわよね。胸なんて見せたって別に減るモンじゃなし、それに、こちら、少しぐらい減ったってかまわないほどのボリウムがあるんだもの。

自分の気持ちに決着をつけた冴子は、頭の下で手を組んでふてくされたように天井を見上げている明生に向かって、

「わかったわ。その条件呑むわ」

「ホント？」

現金にも明生は顔を輝かせ、ベッドから跳び起きた。

その勢いに気圧けおされて、冴子は少しあせりつつ、

「ただし、見るだけでさわっちゃダメよ」

「うん、それでもいい」

「それじゃあ……」

冴子は小脇に抱えていたクリアケースからプリントを一枚とり出した。それは、数冊の英語の問題集から抜粋ぼつすいした問題文をコピーして切り貼りしたものだった。とりあえず、明生の学力を見るために作ってきたのだが、字体が不統一で問題文のブロックが少し斜めになっているところが、いかにも間に合わせっぽい。

「このプリントをやってみて。制限時間は六十分。それで、もし七十点以上とれたら、胸、見せてあげるわ」

「オッケー」

明生は冴子の手からプリントを引つたみると、回転椅子に座って机に向かう。スタンドを点けると、シャープペンシルを右手で握り、さっきまでのやる気のなさが嘘うそのような熱

心さで英語の問題にとり組みはじめた。

おーおー、現金なこと……。

巨乳という餌^{えさ}を鼻先にぶら下げたとたん、急にやる気を出した明生の態度に、冴子はあきれてしまう。だがその一方で、一心に問題にとり組む姿を見てみると、ひよつとして、こちらの出した条件をクリアするのでは……という不安が胸にこみ上げてきた。一度は、胸ぐらい見せてもいいと心を決めた冴子だが、やはり見せなくてすむならそれに越したことはない。だから、七十点という少し高めの合格ラインを設定したのだが、それで充分だったのか、だんだん心配になってきた。

ま、大丈夫よね。

リビングルームで千春が見せてくれた中間考査の結果から考えて、まず半分もできればいいところだろう。七十点以上なんてとれっこない。

自分自身にそう言い聞かせながら、冴子はベッドの端に腰を降ろして、落ち着かない時間すごした。問題を解くのに熱中しているのか、少し前屈^{まえかが}みになった明生の背中に目をやりながら、ときおり、左手首の内側にある腕時計の文字盤を見る。

「そろそろ時間よ」

冴子が制限時間が迫ってきたことを告げると、明生がそれを待ちかねていたように、

「できたあッ！」

突然の大声に、冴子は揃えた膝に置いていたクリアケースを落としそうになる。明生は手にしていたシャーペンシルを机の上に転がすと、プリントをそこに置いたまま回転椅子から立ち上がった。

「ね、ね、早く採点してよ」

冴子は明生と入れ替わるように回転椅子に腰を降ろすと、赤のボールペンを握って机に向かう。

一問目、正解。二問目も正解。三問目は……。

そうやって答え合わせをしているうちに、冴子の顔がだんだん強^{こわ}ばってきた。

まさか……。

○×をつけ終わると、さっそく、個々の得点を足して合計を出す。導き出された結果を信じたくなって、冴子はもう一度点数を数え直したが、やはり結果は変わらない。

「どうだった？」

ベッドの端に腰を降ろして待っていた明生が、期待に満ちた顔で訊く。

冴子は回転椅子をまわして身体ごと明生のほうに向くと、儼然^{ぶぜん}とした表情で、

「七十六点」

の目は見たくて見たくてたまらなかった異性の胸への期待に満ち満ちていて、許しを請うたところで、とても「うん」とは言いそうにない。

しょうがない。これも、リッチでゴージャスなバカンスのためよ。

そう自分に言い聞かせると、冴子はブラジャーのフロントホックに指をかけた。最近また少しきつさを感じるようになった下着のせいで、ひととき強調された深い谷間を見つめる明生が生唾なまつばを呑む。

緊張しているためか、冴子はブラジャーのホックを外すという、いつもなら無意識のうちに行えることに妙に手間どってしまった。まるで、自分のものではないようにうまく動かない指でホックを外すと、窮屈きゅうくつそうなカップが左右に割れて、大きな乳房がまろび出る。千春ほどではないにしろ、どちらかと言えば色白の冴子の双球は、日に当たる機会が乏しとぼい分だけ、他の部分の肌よりなお白く、強く揉めば薄赤い指の跡がつきそうだ。下着の締めつけから解放されても、中に満たされた若さがたっぷりとしたふくらみを支え、全体を形よく前に突き出させている。

あらわにされた巨乳を、明生は身を乗り出して喰い入るように見ていた。そうやって熱い視線を注がれると、淡いピンクの乳暈にゅううんがムズムズしてくる。人前に乳房をさらすことに恥ずかしさを感じないわけではないが、年下の少年にもものほしげな目で見つめられること

は、正直言つて、そんなに悪い気分のものではない。さっきまで生意気な態度をとつていた明生が、背の届かないところにほしくてたまらないオモチャを見つけた幼児のような顔をしているのを見ると、ちよつと意地悪をしてやりたくなるほどかわいく思えてしまう。

「本物見るの初めてなの？」

「う、うん」

興奮のためか、明生は声がわずかにうわずっている。

「カノジョとかいないんだ？」

「え、まあ、今んとこ……」

と答えてから、明生は拗ねたようにつけ加える。

「どうでもいいだろ、そんなこと」

家の中ではわがままな王子様のようにふるまっている明生だが、案外、外だと好きな女のコには声もかけられないタイプなのかもしれない。

「ブラジャーの前、もっとひろげてよ」

そう言われて、冴子はまるみの一部を隠していたブラジャーのカップを両手でさらに大きく開いた。こうすると、積極的にバストを見せびらかしているようで、自分がひどく淫（みだ）らな女になった気がする。

魅力的なまるみに吸い寄せられるように片手を持ち上げかけた明生は、その手を宙に浮かせたまま、上目づかいに冴子の表情をうかがった。

「やっぱ、さわっちゃダメ？」

「ダメよ。見るだけって約束でしょ」

「そうだけど、でも、六点もよけいにとったんだから、少しぐらいオマケしてよ」

筋が通っているような通っていないような言い分に、冴子はとまどいの表情を浮かべた。それを見て、交渉の余地があると感じたのか、明生はさらにおねだりをする。

「じゃあ、胸さわるかわりにパンティ見せて」

「なに言ってるの。ダメよ、そんなの」

「いいじゃん、それぐらい。六点オーバーした分、サービスしてよ」

「ンもお、しかたないわね」

冴子は明生の餌をねだる仔犬のような目に負けて、閉じ合わせていた膝をゆるめた。膝丈のタイトスカートは布地に余裕がないため、腿が開くのに合わせて裾がずり上がり、かなり奥のほうまで覗ける状態になる。

「パンストは脱いでくれないの？」

「そこまでサービスはできません」



「チエツ」

と舌打ちしてから、明生はベッドから降りると冴子の足元にひざまずき、薄暗いスカートの中に目を向けた。

「ちよ、ちよつと、そんなに覗きこまないでよ」

「でも、こうしないとパンティ見えないんだから、しょうがないじゃん」

「いったい、どうしてこんなことになってしまったのだろう？」

冴子の脳裏を、浮かんで当然の疑問がかすめる。

自分は家庭教師としてこの家に来たはずなのに、どういうわけか教え子の前で胸をあらわにし、股を開いて下着を見せている。もちろん、これはバイト代のためにやっていることだ。リッチでゴージャスな夏のバカンスを手に入れるため、しかたなくしていることなのだ。だが、性的好奇心旺盛な年下の少年に剥き出しの乳房を見られ、スカートの奥を覗きこまれると、強い羞恥しゆうちを感じると同時に、見られることの快感で気持ちが高たかぶぶってくる。

「ね……ねえ、センセ」

「なあに？」

妙にかすれた明生の声で、冴子はあらぬほうを見ていた目を少年の顔に向けた。それとは逆に、明生は冴子の顔から目をそらし、

「センセの見ながら、していいかな」

「……って、なにを？」

さっきこの問を発したときは、とんでもない答えが返ってきたが、今回の返答も冴子を驚愕きょうがくさせるものだった。

「お、オナニー」

「ええッ！」

「なんか、もう我慢がまんできなくて。だから、いいでしょ？」

なるほど、明生の股間に目をやると、そこはもうジーンズのアスナーを弾はじき飛ばしそうなほど隆起している。

ヤダ、もう、あんなになってる。

ジーンズの厚い布地にしっかりと輪郭を浮き上がらせた勃起ぼつきの激しさに、冴子はハッと目を見開いた。

「いいよね？　していいよね？」

と強引に許可を求めつつ、明生は腰を浮かせると、正座と膝立ちの中間のような姿勢をとり、アスナーの金具を指でつまんだ。

「えッ？　あ、ちよつと……」

冴子が止める間もなく、明生はジーンズのファスナーを降ろし、トランクスの前開きから勃起したペニスをはっきり出出した。それは、きれいなピンク色をしていて、窮屈な下着の戒めから解放されたことを喜ぶように、すつくとそり立つ。日々のオナニーの成果か、先端は八割方露出していて、少しだけ余った包皮が雁首にかぶさっていた。明生は自分が仮性包茎なのを恥じるように、シャフトに右手の指をからめると、表皮を根元のほうに引き寄せて、鋭角的に張り出した力をすばやく剥き出しにする。

勃起したペニスを見せられたからといって、悲鳴をあげたり、顔を覆ったりするほど冴子はウブではないが、やりたい盛りの少年がとった見境のない行動には息を吞まざるをえない。サイズはそれほどでもないが、明生の勃起は元氣いっぱい、二回や三回の射精は屁でもないといったその佇まいは、見ているだけで秘裂の奥がきゅうんと疼く。

しゅにしゅにしゅに……。

冴子があっけにとられているうちに、明生はさっさと自分の分身をしごきはじめた。谷間に顔を埋めたら窒息しそうな巨乳と、ストッキング越しに見えるショーツが生々しいエロスを醸し出す股間、どちらをオカズにしようかと、目線を忙しく上下させる。そして、それに倍する速度で筒状にされた右手が、血管の浮いたシャフトを上下していた。摩擦されて血の色を濃くしたこわばりは、これでもかばかりにそり返り、肉茎にからむ静脈が

プクツとふくれ上がる。

服を着たまま胸をあらわにし、誘うように股を開いた女子大生。そして、その足元にひざまずき、一心に勃起をこすりたてる少年。

こうした変則的なシチュエーションが、ノーマルなセックスよりも冴子をはるかに興奮させる。自分の姿を見ながら自慰行為に耽られることは、エロ本と同じ「ズリネタ」に貶められた屈辱感があった。しかしそれと同時に、妄想力豊かな冴子の脳裏には今の自分の状況が、奴隷の少年に浅ましい行為を強いる女王様のようにも映り、不思議と気分を昂揚させる。

あたしの胸見て、あのコ、チンポ、ビンビンにしちやってる。それを、あんなに一生懸命シコシコしてる。

考えてみれば、男のオナニーを見るのは、それなりに男性経験のある冴子も初めてだった。それがどんなものか頭では知っていたが、実際に間近で見みると、どこか滑稽でありながら、なぜだか胸を切なくさせる。とりわけ、やっているのが年下の少年だけに、快楽に向かつて突き進むひたむきな姿には、ある種の健気さすら感じてしまう。

「はあ、はあ、はあ……」

中途半端な姿勢でペニスをしごきたてる明生の息が、だんだん荒くなってきた。新鮮な

肉色の亀頭きとうはパンパンに張り詰め、鈴口すずぐちから前触れのしずくがにじむ。手の動きに合わせて上下する余った包皮の縁ふちで、垂れてきた透明な粘液が亀頭の下半分にまで塗りひろげられると、勃起をしごきたてる音がチュクチュクという粘ねばっこい音に変化した。とめどなく分泌されるカウパー腺液せんえきはさらに垂たれてきて、忙しく動く手指をも濡ぬらす。

もう、あんなにチンポ濡らしてる。

いつしか冴子さこは事態の異常さも忘れて、淫猥いんわいさを増した少年のオナニー・ショーに見入っていた。鬱血うっけつした牡器官おすきかんは痛々しいほど強ばっていて、きつと、熱気で蒸むれた下着の中では付属のふくろが堅く引きしぼられているに違いない。

ああーん、あのコのつてば、とっても硬そう。

あんなカチカチの勃起を挿入されたらと思っただけで、秘裂の奥からねつとりとした愛液がにじみ出してきた。牝臭めすくさいシロップが、ショーツの股布を静かに濡らすのが感じられる。

そういえば、ここしばらく、本物のペニスにはとんとごぶさただった。疲れを知らぬバイブレーターで気を失うまで自分の秘裂をえぐるのもいいが、ぴったりと肌を接し、汗と体液を混じらせてたがいの身体を貪むさぼり合うのには、なにものにも代えがたい悦よろこびがある。

あ、ヤダ。チンポ、すつごくほしくなってきた。

料理の匂いを嗅いで初めて、自分がどんなに空腹だったかを知るように、しごきたてられる勃起を目の前にして、冴子は自分が《ナマのオトコ》にひどく飢えていたことに気づいた。ツルツルの亀頭はいかにも舌ざわりがよさそうで、唇を誘うみたいに先汁でぬめ光っている。冴子は、今にも無駄に射精しようとしているペニスにむしゃぶりつきたい衝動に駆られた。口に含んだとき舌の上にひろがる独特の青臭い味や、生き物ならではの体温とひくつき。それらを想像しただけで、口の中いっぱいにスペルマをぶちまけられるときの感覚が甦る。

もしここで、あたしがチンポしゃぶってあげるって言ったら、どうなるかしら？ ううん、それより、いつそのこと、望みどおりオ○コさせてあげるって言ったら……。

冴子は、目に見えないしっぽをふりながら、飢えた野良犬のような目つきで自分にのしかかってくる明生の姿を夢想して、さらに秘裂を潤ませた。

チンポほしい。硬いの奥までぶちこまれない。

ダメよ、そんなの。今だって充分マズイのに、これ以上マズイことになったらどうするの？

いいじゃん別に。せっかく勃ってるチンポがあるんだから、おいしくいただくかなくちや。バカなこと言わないの。そんなのダメに決まってるじゃない。

じゃあ、フェラだけならいいでしょ？ チンポしゃぶつて、セーエキ呑むだけなら……。ダメッたら、ダメ！

心の中で、身体の奥から這い出してきた牝の部分と理性がせめぎ合う。今のところ、かろうじて理性のほう優勢だが、ちよつとしたきっかけでその状況は容易にひっくり返りそう。冴子の頬は湯上がりのようにほんのりピンクに染まり、重たげなふくらみの下や、下着の中で蒸れた恥丘ちきゅうはじつとりと汗ばんでいた。

脳裏に渦巻く淫らな妄想に刺激されたのか、とろけるようにやわらかな乳暈の中になかば埋もれていた乳首がムクツと身を起こす。それは一指もふれられていないのに、少年の勃起に負けまいとするように、ツンとその身をとがらせた。

あ、勃たっちゃダメ！

冴子は心の中で、節操せつそうのない乳首を叱ったが、こればかりは自分の意志ではどうにもならない。明生がオナニーに没頭ぼつとうしていて、あまりにもあきらかな欲情の証に気づかないことを祈るばかりだ。

さいわいなことに、極上のオカズを前にしてのオナニーに励はげむ明生はすでに、冴子の身体が淫らなサインを発していることを指摘できるような状態ではなくなっていた。

「センセ、もう……」

切羽詰まった声で放出のときが近いことを告げると、右手の動きが狂ったように速くなる。勃起度一二〇パーセントのペニスはゆですぎたソーセージのようで、今にも先端の薄皮がプチンと弾けて中身がはみ出しそうだ。

もうすぐ……もうすぐ出るのね。あたしの恥ずかしいところ見て、ビンビンにおっ立てたチンポの先から、セーエキ出しちゃうのね。

射精の瞬間を見逃すまいと、冴子の視線が先汁まみれの亀頭に釘づけになる。

早く……早く出して。チンポからセーエキいっぱい出るとこ、あたしに見せてッ！

「あ……あ……出るッ！」

明生は悲痛な叫びをあげると、冴子の無言のリクエストに応えるように、ふくらみきつた亀頭からスペルマをほとばしらせた。煮詰めたように濃い白濁液はくだくえきが、尿道口を内側から突き破って噴出するのを見たたん、冴子の背筋に電流が走り、ブラジャーのカップを押さえていた手と内腿のつけ根にギュツと力がこもる。

びゅちゃッ！

勢いよく飛んだ第一弾は冴子の足元にまで届き、ストッキングに包まれた爪先を汚した。立てつづけにぶちまけられる白い飛沫しぶきの勢いに目を奪われながら、それを口で受け止めた、顔面に浴びたい、秘裂の奥で感じたいという欲求が胸にこみ上げてくる。

びゆるッ！　びゆるるッ！　びゆくびゆくッ！

ふだんからこうなのか、それとも、初めて見た《ナマチチ》のせいなのか、明生の射精は体内に蓄積された性欲の強さをうかがわせるように激しいものだった。連射される白濁液で、フローリングの床は瞬^{またた}く間に、そこでコンデンスミルクのチューブを踏んづけたような有り様になる。勃起から撃^うち出されるスペルマは徐々に勢いを失い、ついにはまったく飛ばなくなって、鈴口から垂れた粘液がシャフトを握る明生の手指をねっとり汚した。最後に身体を大きく痙^{けい}攣^{れん}させると、分身と同じく硬直していた少年の全身から力が抜ける。終わっ……た、のね……。

体内にひそむ牝の本性との闘いに辛くも勝利した冴子は、呪縛^{じゆばく}が解^とけたようにため息をついたが、それは身内の火照^{ほて}りを表すみたいに熱いものだった。

床に腰を落とした明生はぐったりとして、肩で息をしている。あんなにたくさん出したというのに若いペニスは萎^なえる気配もなく、激しい摩擦で真っ赤になったシャフトをそそり立たせていた。鈴口からは白い濁^{にご}りを浮かべたカウパー腺液が垂れ、床の液だまりからは生々しいスペルマの匂^{たぐよ}いが漂^{ただよ}ってくる。床に這いつくばって、それを舐めとりたいなどという浅ましい欲望が生じないうちにと、冴子は努^{つと}めて冷静さを装^{よそお}った口調で、

「もう、胸、しまってもいいわね？」

射精後の虚脱感きよだつかんの中で明生がぼんやりうなずくと、冴子はうつすらと汗ばむ巨乳をしま
い、カットソーすーツのボタンを留めて、スカートの裾をなおす。一方明生も、自分の後
始末をするため床に落ちていたティッシュの箱を引き寄せた。

「あ……」

手やペニスについたスpermをぬぐい終え、次に床にぶちまけた分をふこうとして、明
生はようやく自分の粗相そそうに気づいた。

「ごめん、足にかかっちゃった」

まだ完全に硬直を解いてはいない勃起を剥き出しにしたまま、汚れた冴子の爪先にティ
ッシュを持った手を伸ばす。ジェル状のspermは目の細かいストッキングに染みこむこ
ともなく、かぶせたティッシュの上からつまむようにすると、簡単にぬぐい取ることがで
きた。親指の爪あたりにナメクジが這ったような跡あとが残ったが、それはよく見ないとわか
らない程度のものだ。

冴子は明生が自分の爪先をぬぐい終わると、それを待っていたように立ち上がり、ドア
のほうへと向かう。

「どこ行くの？」

「ちよつとトイレ」

「だったら、階段降りたところだから」

そう言われて冴子は初めて、自分がこの家のトイレの場所を知らないことに気がついた。部屋を出ると、教えられたとおり階段の上がり口のそばにあるトイレに入る。洋式の便器に腰を降ろすと、冴子はスカートをたくし上げ、ストッキングごとショーツをずり降ろした。

やっぱり、こんなに濡れちゃってる。

冴子の秘裂は粘度の低い愛液をにじませ、ショーツの股布には楕円形だえんけいのシミができていた。パンティストッキングを穿はいていたからいいようなものの、もしそうでなかったら、熱心にスカートの中を覗きこむ明生に恥ずかしいシミを見つけられていたかもしれない。いや、ひよつとして明生は、ショーツのシミに気づいていたのではないだろうか。そして、新任の家庭教師が自分のオナニーを見て下着を濡らしているのを知り、さらに気持ちを昂らせていたのではと思うと、今さらのように頬が熱くなる。

冴子はトイレトーパーに必要な分だけちぎりとり、淫らなぬめりをぬぐおうと、それをわれめにあてがった。そつとふれただけなのに背筋を甘い痺しびれが走り、吐息まじりの声が出る。

「あーん」

イヤだわ。すごく敏感になってる。

無用の刺激を与えぬように、冴子はよだれを垂らすわれめをやさしくふいた。だが、いくらふいても、愛液があとからあとからにじみ出してくる。ふれるかふれないかというソフトなタッチがかえって逆効果だったのか、しっかりと繁^{しげ}った恥毛^{ちもう}に彩^{いろど}られたスリットは異物の挿入を誘うようにほころんでいた。こうなると、軽くでもいいから一度イッておかないと気持ちがおさまりそうもない。

しょうがないわ。あんなの見せられたら、いやらしい気持ちになって当然よ。

冴子は言いわけめいた言葉を口の中でつぶやくと、透明な蜜^{みつ}を吸ってグッシヨリと濡れたトイレットペーパーを便器の中に落とした。秘裂に指をくぐらせる本格的なオナニーに耽^{かた}る時間はもちろんないし、それが許される場所でもない。冴子は手とりばやくエクスタシーに達するため、ぬかるみをメチャクチャに掻^かきまわしたいのをグツとこらえて、充血してフード状の包皮の下から半分だけ顔を出したクリトリスに指を這わせた。慣れた手付きで包皮を剥くと、シエルピンクの真珠^{しんじゆ}が姿を現す。中指の腹ですつとひと撫^なでしただけで、快樂のパルスが中枢^{ちゆうすう}神経を走った。

「んッ！」

意外に大きな声が出て、冴子はあわてて口を閉じる。忘れてはいけない。ここは他人の

家のトイレなのだ。自分の部屋でオナニーをしているときのよう、派手なよがり声をあげるなどもつてのほかだ。

冴子は手のひらの大きさに畳んだハンカチをさらに半分折って、長いほうの辺の真ん中を口に咥えた。そうやって漏れ出る声を抑える手段を講じておいてから、ふたたびクリトリスに指を伸ばす。

あたしってば、ホント、なにやってんだろ？

初めて訪れた家のトイレでオナニーに耽るなんて、ひとに知られたら、変態女と罵られてもしかたのない異常な行為だ。しかしその異常さが、かえって興奮を掻き立てる。冴子が中指の腹で、プクツと膨れた突起をいじめるようにこすりたてると、秘裂からあふれた愛液のしずくが便器の底に溜まった水に波紋をひろげた。

こうして狭い個室で淫らな指戯に耽っていると、高校時代、授業中にどうにも我慢できなくなつて、教室を抜け出して学校のトイレで秘裂に指を這わせたことが思い出される。あたしって、我慢できないタチなのよね。

これでは、『ナマチチ』を見て興奮したあげく、いきなり勃起をしごきはじめて明生を咎めることはできない。

あたしのオナツてるところを見せてやったら、あのコどうするかしら？



放出後も明生のペニスは勃起したままだった。あれなら、つづけてもう一度射精するこ
とはたやすいだろう。見たくてたまらないはずの秘裂を剥き出しにして、クリトリスをい
じるところを見せてやれば、許可を与えると同時にオナニーをしはじめるに違いない。

目を皿のようにして、必死にシャフトをしごく明生の姿が、冴子の頭に浮かぶ。

そうよ、それでいいわ。そうやってチンポしごいて、さっきみたいにセーエキいっぱい
出さない。

妄想の世界に没頭する冴子の脳裏に、ビクビクとおののく勃起からこつてりとしたスペ
ルマがほとばしるさまが甦^{よみがえ}る。

あのコのセーエキ、とつても濃かったわ。量も多かったし、すっごく飛んであたしの足
に……。

ストッキングに包まれた爪先を汚す白濁液のビジュアルと、床にぶちまけられたスペル
マから漂う青臭い匂いの記憶が結びつく。

そうだ。ストッキングの爪先には、さっきのセーエキの匂いが残っているかも……。

冴子は脱いだストッキングを鼻に押し当て、そこに付着したスペルマの残り香を嗅^かぎた
い衝動に駆られた。それは想像するだに浅ましい行為だが、また、それだけに魅力的でも
あった。しかし、さいわいにも言うべきか、そんな変態じみた真似を実行に移す間もな

く、女体は絶頂を迎えようとしていた。クリトリスを責める指の動きが速くなり、口に咥えたハンカチにきつく歯が立てられる。

「ンッ、ンッ、んー」

はしたないあえぎを苦しげなうめきに変えて、冴子は便座の上で淫らに身をくねらせた。クリトリスを刺激しながら、あいているほうの手で服の上から乳房をわしづかみにし、ブラジャーのカップの内側に勃起した乳首をこすりつける。性急な愛撫を受けるクリトリスを羨むように、そのすぐ下の秘裂はものほしげにひくつき、牝の匂いがするシロップをあふれさせていた。

あ、イク。もうすぐイッちゃう。あとちよつとで……あッ、あッ、ああッ！

不意に目の奥でフラッシュが焚かれ、一瞬意識が飛んだ。切なげに身悶えしていた肢体がピンと硬直し、一拍置いてから張り詰めた糸が切れたように力が抜ける。給水タンクに背を預け、エクスタシーの余韻に身を浸す冴子の口から、ルージュの跡がついたハンカチがポトリと落ちた。

Lesson2
転落



「どうして、こんなことに？」

「ね、どう？ 今日は何点？」

ベッドの端に腰かけた明生が、もう待ちきれないともいうように、パステルピンクのニットを着た冴子の背中に向けて訊いてくる。

「ちよつと待って。今、合計してるから」

机の前の回転椅子に座った新米家庭教師は煩わし^{わずら}そうに返事をする、右手に持った赤のボールペンを動かした。

今日は冴子が高瀬家を初めて訪れた月曜日から、あいだに一日置いた水曜日。予定の間より十分ほど早く着いた彼女は、上品な千春の笑顔に迎えられ、すぐに明生の部屋に通された。家庭教師を案内してきた母親の姿が階下に消えるなり、明生は「今日もテストあるんでしょ？」と小テストの実施をねだってきた。もちろん、今までの自分を反省して急に勉強好きになったのではなく、合格点をとったときのご褒美がお目当てなのは言うまでもない。

そうした明生のおねだりにあつらえたように、冴子が小脇に抱えてきたクリアケースの中には、数学の問題集のコピーを切り貼りしたプリントが入っていた。ことの意外ななりゆきで一昨日は出しそびれてしまったが、本当はこれと英語のプリントで、自分の初めての教え子の実力を測ろうと思っていたのだ。

冴子は数学の小テストを実施する前に、合格ラインは七十点で、ご褒美はバストを見せるだけと、このあいだと同じ条件を出した。しかし、それじゃあつまらないと、明生が提案したのは小テストの点が七十点以上ならバストタッチ、八十点以上なら冴子が明生のペニスをさわる、そして九十点以上ならフェラチオというものだった。

一昨日のこともあり、胸を見せるぐらいのことは覚悟していた冴子だが、いくら高額バイト代のためとは言え、こんな条件はとて受入れられるものではない。本当なら、図に乗るのもたいがにしろと、頭をはたいてやりたいところだが、脳裏にチラつくリッチでゴージャスな夏のバカンスのイメージが、かろうじてそれを思いとどまらせる。

用意してきたプリントは、今現在の学力を知るのが目的なので、基礎的な問題をセレクトしてあり、難易度はそう高いものではないはずだ。だが、中間考査の数学で思いっきり赤点をとっていた明生に合格ラインがクリアできるとは思えない。せいぜい半分も正解すればいいとこだろう。

手の届かない高みに見事なぶどうをぶらさげて、身のほど知らずのキツネを悔し^{くや}がらせるのもいいかと考えて、冴子は明生の出した条件を呑むことにした。だが、制限時間の一時間をへて提出された答案の採点を進めるにつれ、余裕に満ちていた表情がだんだんと強^{こお}ばってくる。

な……なんで、こんなに正解してんのよ？

冴子は裏帳簿に目を通す税務署員のように血眼ちまなこになって、答えを出す過程に誤りを見つけようとした。だが、そうやって目いっぱい減点しても、明生の得点は合格ラインをゆうに越えている。おかしい。どう考えても納得がいかない。テストを受けさせているあいだはすぐそばで見えていたので、カンニングをするような機会はなかったはずだ。だが、この点数は中間考査の結果からかけ離れすぎている。やはりこれは、女体への興味が性的好奇心おうせい旺盛な少年に為なさしめた奇跡なのだろうか？

目の前にある事実を信じたくなくて、手元に置いたレポート用紙の隅すみでしつこく検算してみるが、なん度やっても答えは同じだ。

「ねえー、まだあ？」

机に屈みこんでいる家庭教師の背中に明生がふたたび声をかける。冴子は回転椅子をまわして身体ごと明生のほうを向くと、舌の上に乗せた言葉がたまらなく苦いものであるかのように眉根を寄せて、

「八十二点」

「やりイッ！」

暗い顔をしている家庭教師とは対照的に、明生ははしゃいだ声をあげると、指をパチン

と鳴らした。ベッドの端から勢いよく立ち上がると、「散歩」という言葉を耳にした飼犬みたいに落ち着きのない動作でベルトをゆるめ、ジーンズとブリーフを一緒くたにしてずり降ろす。採点中からご褒美を期待して股間をふくらませていたらしく、勃起したペニスがブリーフのゴムに押されて大きくたわみ、その反動で跳ね飛び出した。

止める間もなく剥き出しにされた若い勃起に、冴子はハッと息を呑む。明生は膝の下まで降ろしたジーンズとブリーフから足を抜くとベッドに上がり、壁に背を預けて両足をだらしなく投げ出した。Tシャツ一枚の姿になった少年のペニスは、生白い下腹部に繁る恥毛の中からすつくとそそり立っている。亀頭の大部分は露出しているが、鋭角的に張り出したカリは余った包皮に覆おおわれていて、見た目は肉色の太いアスパラガスのような。股間から目をそらしそびれた冴子にあいさつするように、そり返ったシャフトがヒクンと跳ねる。

恥ずかしげもなくペニスを剥き出しにした明生は、正面に座る女子大生に向かって、

「先生も早く脱いでよ」

「え、どうして？」

「だって、ご褒美……」

「ご褒美？ でも、テストは八十点以上だったから、あたしが、その……アレをさわるん

じゃないの？」

「うん。もちろんそうだけど、先生の胸もさわらせてくれるんでしょ？」

「なんでよ？」

明生のあつかましい要求に、冴子は思わず声が高くなる。

「なんでって……テストの点が八十点以上ってことは、当然七十点以上ってことでもあるよね？」

「あたりまえじゃない」

「だから、ご褒美は七十点のバスタッチ、プラス八十点の分ってことでしょ」

「はあ？」

冴子は片方の眉をつり上げて、

「そんな屁理屈、通用するわけないでしょッ！」

「なんでさ？　ちゃんと、テストの前に約束したじゃん」

と、明生が唇をとがらせる。

「そんな勝手なこと言うんだったら、ご褒美はナシよ」

「ええーッ！」

明生が階下まで聞こえそうな声を張り上げると、冴子はあわてて、

「ちよつと、あんまり大きな声出さないでよ」

今の声を不審に思われて、千春に様子を見に来られでもしたら大変だ。この状況を見られたら、どんな誤解をされるか知れたものではない。よしんば事情を説明しえたとしても、そのまま家庭教師として雇いつづけてもらえるとは考えにくい。もし、ここでクビになったら、前回のご褒美の《ナマチチ》は見せ損ということになる。リッチでゴージャスな夏のバカンスのため、まさしくひと肌脱いだのに、それが無駄になるのはなんとしても避けたい。

「わかったわ」

ため息まじりにつぶやくと、冴子は回転椅子から立ち上がった。膝丈のライトブラウンのスカートとのり合わせが、砂地に咲いたコスモスを思わせるパステルピンクのニットの胸元を持ち上げるバストはあいかわらずの巨乳で、いささかもボリュームが減じた気配はない。見せて減らなかつたんだから、さわらせたって減りやしないわ……と、なかばヤケクソな気持ちで薄手のニットを鎖骨の下までまくりあげ、背中に手をまわしてブラジャーのホックを外す。

とりあえず、一回目のバイト代をもらうまでは我慢しなきゃ。そうでないと、元がとれないわ。

今までに払った分をとり戻すため、さらに賭^かけ金を注ぎこむというのはギャンブルの典型的な負けパターンだ。だが、ギャンブルで身を持ちくずす者がおおむねそうであるように、高額のバイト代に目がくらんだ女子大生は、自分が泥沼にはまりつつあることにまったく気づいていなかった。

冴子はベッドに座って分身を屹立させている明生の右隣に腰を降ろすと、ブラジャーのカップを押し上げて白い乳房をあらわにした。少年の身体に寄り添うと、スプリングの効いたマットに左手をつき、ストッキングに包まれた膝をくずして横座りになる。

「先生、早く」

昂る気持ちを抑えられないのか、ご褒美を催促^{さいそく}する明生の声は少しうわずっていた。冴子が下腹に張りつきそうなシャフトに右手を伸ばすと上体が前のめりになり、重々しげに垂れたふくらみが勃起の先端にふれそうになる。

「ン……」

分身を軽く握られただけで、明生は小さなうめきをあげた。少年の肉茎は熱く、からめた指に力強い脈動が伝わってくる。冴子がシャフトに添えた手を根元のほうに引くと、先端部にかぶさっていた包皮がクルリと剥けて、カリがあらわになった。入浴時に洗う習慣がついているのか、余った包皮の下はちゃんときれいにされている。ツルンとした亀頭の

表面はいかにも舌ざわりがよさそうで、冴子はそのまま身を屈めてむしゃぶりたい衝動に駆られた。だが、あやういところでそれをこらえ、握った勃起をしごきはじめる。

しゅにしゅにしゅに……。

筒状にした右手をシャフトに沿って下方にすべらすたびに、小指の側面と、それにつながる手のひらの外側にやわらかな恥毛の繁みがふれた。折り返してきた手をいちばん上まで引き上げると、今度は親指と人差し指で作る輪に形よく張り出したカリの裏が当たる。ゆるゆるとしごかれるうちに、元から赤みの強かった勃起の表皮はさらに血の色を濃くし、先端の切れこみから先走りのしずくをにじませた。

最初、冴子の手の動きは、様子を見るようにゆっくりとしたものだった。だが、それは徐々にスピードを増し、静脈の浮いたシャフトをリズムカルに上下しはじめる。その動きに合わせて表皮がスライドし、余った包皮が手荒く剥き上げられた次の瞬間には元に戻されるのがくり返された。鈴口からあふれたカウパー腺液が裏筋を伝って、冴子の手指を濡らす。雁首に溜まった粘液は、カリのでっぱりとせわしく動く包皮の縁とで攪拌^{かくはん}されて粒の細かい泡になり、口の中でもてあそんだ唾液^{だえき}のようにねっとりとしたものになった。それを舌先で舐めとりたいという欲求が胸に湧き、冴子は自分の中で蠢^{うごめ}きはじめた牝の部分戒めるため、口の中で舌先をそつと前歯で噛んだ。

「センセ……ボクも、センセのさわるよ」

明生は壁に預けていた背をわずかに起こし、上半身を右にひねって、左手を冴子の胸に伸ばした。いっぱいに開いた手のひらを上に向け、小刻みに動く肩に合わせて揺れる右のふくらみをすくい上げるようにしてつかむ。手の中におさまりきらない巨乳の大きさに、明生は軽く目を見開いた。冴子のバストが大きいのは見ればわかるが、それを自分自身の手でたしかめてみて、あらためてそのボリュームに驚いたようだ。

「うわ、でけエ」

と口の中でつぶやいてから、まさしく手に余る乳房を揉みはじめる。すべらかな肌の内側にゼリーを詰めこんだような、たぷたぷとした感触を貪欲に味わおうと、明生は一時も手の動きを休めない。強く握ると指の隙間からこぼれ落ちてしまいそうなほどやわらかく、それでいて弾力のあるふくらみが落ち着きなく形を変える。冴子の巨乳を揉みしだく明生の手の動きは、愛撫と呼ぶのもためらわれるほど稚拙なものだった。だが、その不器用な手つきが、手慣れた愛撫に飽きていた女子大生をかえって興奮させる。胸を揉まれているだけなのに息が弾み、汗ばんだ手のひらでこすられた乳首が、そのことに抗議するように硬くしこつてきた。

「あ……ああ……」



明生の口から言葉にならないうめきが漏れてきた。自身の吐液でぬらつくペニスは異性のしなやかな手指でしごきたてられて、はちきれそうになっている。そして、そうした少年の昂りが、勃起を握る手のひらから伝染したように、いつしか冴子の身体も熱く火照っていた。

ヤダ、なんかあたしまでコーンしてきちやった。

その証拠に、さわられていないほうの乳首までが勃起している。慎ましく閉じた太腿の奥では、粘膜の合わせ目に生じた潤みが、スリットから今にもじみ出しそうだ。五つも年下の少年の勃起をしごきながら、こっそりと秘裂を濡らしているのかと思うと、冴子是我が身の浅ましさがイヤになる。しかしそれと同時に、やむなくはじめたはずのこの淫らな行為に、自分がひどく熱中しているのを感じてもいた。

「すつごく……すつごく気持ちいいよ。自分ですんのより、ずっとよくて……よすぎて、チンポ破裂しそうだよ」

明生が自分の愛撫であえぐ姿を見ていると、冴子はどうしたわけか、この生意気な少年が少しかわいく思えてしまう。もっと気持ちよくしてやりたい、もっと淫らなことをして年下の少年をあえがせてみたい、という欲求がこみ上げてくる。そうした思いを愛撫に反映させて、冴子は勃起をしごく手に、シャフトをねじるようなひねりを加えた。そしてと

きおり、親指と人差し指で作った輪で雁首をキュツと締めつけると、勃起をひくつかせながら明生が切ないうめきをあげる。

冴子の手指にもてあそばれて、少年のペニスは赤く鬱血^{うっけつ}し、太い血管を浮き上がらせていた。表皮は先汁でヌルヌルになり、急角度でそそり立つ勃起のつけ根では皺^{しわ}深い陰囊^{いんのう}が堅く引きしぼられている。

「もっと……もっと強くして」

放出のときを間近に控えた明生の牡器官は技巧を凝^こらした愛撫よりも、単調で激しい摩擦を求めているようだ。その要望に応えて冴子が右手のグリップを強くすると、密度の高いシリコンのような感触のシャフトの中に硬い芯が感じられた。

もし、こんな硬いのを突っこまれたら……。

そう思うだけで、熱く潤んだ秘裂の奥がキュンと疼く。

「先生、ボク、もう……」

明生が切迫した声で、限界に近いことを告げた。手にした勃起がぐうツとそり返り、カウパー腺液の青臭い匂いがひとときわ強くなったような気がする。それなりに男性経験のある冴子だが、こんなふう到手だけで相手を射精にまで導くのは初めてだった。なにか物足りないような、それでいて新鮮な体験のような、不思議な心持ちがする。

「ああッ！」

悲痛な叫びとともに明生の腰が大きく跳ね、腰のそばについた右手がベッドカバーを強くつかんだ。巨乳を揉む手にも力が入り、白い肌に指が喰いこむ。そうすると、未使用のルージュの先端のように形よくとがった乳首が、手のひらに圧迫されてやわらかな乳房にめりこんだ。

びゅくんッ！

きばりきった勃起が弾かれたようにしゃくりあげ、濃厚なスペルマをたわわに実る果実に向けてほとばしらせた。勢いよく撃ち出された白い弾丸は、冴子の胸のふくらみに当たって砕け、魅力的なまるみにべつとりとへばりつく。射精がはじまって冴子は手をゆるめることなく、おののく勃起をしごきつづけた。元気のいい若幹わかみきはすっかりとからみつく指から逃れようとするみたいに激しく脈打ち、そのたびに匂いのきつい精液が噴き上げられる。冴子は至近距離から浴びせかけられるスペルマの熱さと勢いを肌で感じながら、欲望の放出がおさまるまでペニスを激しく愛撫しつづけた。

「んふぁッ」

長々とつづいた噴射がようやく途切れ、明生がそのあいだずっと詰めていた息を吐き出した。わしづかみにしていた冴子の乳房から手を離し、全身の力を抜いて背後の壁にもた

れかかる。惜しげもなく剥き出しにされた巨乳は、粘っこい精液で汚されていた。しかし冴子はそれを拭くこともせず、やさしい手つきで尿道に残っていたスペルマを最後の一滴までしぼり出してやる。透明なカウパー腺液の中に、精子の白い濁りを浮かせた粘液が尿道口からにゅるりとあふれ、すでにベトベトの手指をダメ押しのように汚した。

壁に背を預けた明生は軽く目を閉じ、ハアハアと肩で息をしている。射精直後の虚脱感の中でぐったりとしている本体とは対照的に、ピンと硬直したままの分身から手を離し、冴子はゆっくりと上体を起こした。粘液まみれの手で服やベッドにさわらないよう気をつけながら自分の胸を見下ろして、そこを汚すおびただしい量のスペルマに目をまるくする。うわあ……すぐくいっぱい出たんだ。

深い胸の谷間にぶちまけられた白濁液から立ちのぼる青臭い匂いに包まれて、冴子は身体の奥深いところで、自分でも説明できない奇妙な充実感を得ていた。

風呂からあがった冴子は身体にバスタオルを巻いただけの格好で、冷蔵庫から冷えた缶ビールをとり出した。冷蔵庫のドアを足で閉めながら人差し指でプルタブを引き起こすと、立ったまま缶ビールの飲み口にかぶりつき、噴きこぼれる泡と一緒の中身を喉に流しこむ。「んく……んく……ふはあーッ！」

缶の中身の半分ほどを胃の腑におさめたところで大きく息を吐き、オヤジ臭いセリフを口にする。

「カアーツ、うまいツ！」

まったくもって、風呂あがりの冷たいビールに勝るものはない。人生、この一瞬のために生きていると言っても、決して過言ではないだろう。

キッチンとは名ばかりの、玄関から伸びる短い廊下の片側にへばりつくように設置された流し台。冴子はその横に置かれた冷蔵庫の前を缶ビール片手に離れると、格子模様のカバーをかけたベッドのほうにゆく。東側の壁一面を占めるサッシは締め切られ、花柄のカーテンが外からの視線を遮っていた。このあいだ梅雨入り宣言が出されたばかりだが、ドライにセットしたエアコンのおかげで、六畳相当の洋間は外の湿気とは無縁の快適さに保たれている。

もともと、快適と言えるのは室温だけで、部屋の様子はお世辞にもそうは評せない状態だった。フローリングの床にはファッション誌や通信販売のカタログ、そして、明生との《特別授業》を招くに至った遠因の海外旅行のパンフレットなどが散らばっている。ベッドとは反対の壁際に配置された機能的なデザインの机の上にはこまごまとした物が散らかっていて、ノートをひろげる余地もない。部屋の隅のプラスチックの大きな籠には汚れ物

が詰められ、洗濯せんたくされるのを待っている。ミニコンポの表面にはうつすらと埃ほこりが積もっていて、スピーカーの上に四つ折りにして置かれたペーパークリナーはほとんど使われてないようだ。その隣のテレビの上には、小さなマットを敷いたところに、どこの土産物みやげか、陶器の牛の置物がとってつけたように飾ってあって、それがどことなく貧乏臭い感じを醸し出している。この部屋をひと目見れば、冴子が主婦としての適正に欠けるのは明らかで、家事が趣味の男でもなければ、彼女を人生の伴侶はんりよとすることをためらうだろう。

「ふう」

さすがに「どっこいしょ」とは言わないが、冴子はベッドの端に腰を降ろすと同時に小さくため息をつき、汗を掻きはじめてビールの缶にふたたび口をつけた。発泡する液体が喉をすべり、口の中に残ったほどよい苦みが消えるのに合わせて腹の底がじんわりと温まってゆく快感はなに物にも代えがたく、この飲み物が黄金と同じ色をしているのも、あながち意味のないことではないという気がする。湯上がりで火照った身体に適度にアルコールがまわり、彼女は心地よい浮遊感にとらえられたが、心にわだかまる重いものが酔いに身を委ねるゆだねことを妨げていた。

また、やってしまった。

後悔の対象はもちろん、またしても明生にご褒美を与えてしまったことだ。授業を終え、

一緒に夕食をいかが？……という千春の勧めをことわって、高瀬家を逃げるように辞してから、まだ数時間しかたっていない。今でも右手には明生のペニスの感触が残っていて、マンションの近くのファミリーストランで夕食をとったとき、そこで注文したディナーセットの皿にハンバーグと一緒に盛られていた粗挽きソーセージに手をつけるのがためらわれたほどだ。

冴子はビールの残りを飲み干すと、空き缶をベッドのそばに置いてあるスチール製のゴミ箱に落としこんだ。濡れた口元を手の甲でぬぐう彼女の目元は、淡いピンクに染まっている。酒にはめっぽう強いほうだが、風呂あがりなのがアルコールのまわりをよくしているらしい。冴子はベッドに腰かけたまま上体を背後に倒し、両腕を大きくひろげて仰向けに身を横たえた。顎のラインで切り揃えた髪は、まだ完全に乾いていない。このままだとベッドカバーが濡れてしまうが、根がズボラな冴子はそんなことには頓着せずに、ぼんやりと天井を見上げた。

どうして、あんなことになっちゃったんだろう？

だが、そうやって今日の失敗の原因に思いをめぐらせていると、それを押しのけるように「あんなこと」の内容がまざまざと思い出されてくる。ほんの数時間前のできごとだけに、その記憶はひどく克明で生々しいものだった。握ってしごきたてていた若い勃起の脈

動が右手に廻り、その性急なひくつきに合わせたように胸の鼓動が速くなる。動悸の速さを測るように、冴子は自分の左胸にバスタオルの上から、そっと右手をあてがった。

あたし、ドキドキしてる……。

この「ドキドキ」がなにを期待してのものなのかは言うまでもない。気の早いことに、とろけそうにやわらかな乳暈の中から乳首がムクリと身を起こし、身体に巻いたバスタオルを内側から突き上げる。高瀬家を出たとき、そこに淫らな気持ちも置いてきたつもりだったが、完全にそれを振り切ることはできなかったようだ。

冴子の頭の中で、「オナー——開始」のスイッチが早く押してくれと言うように激しく点滅する。だが、明生への淫らなご褒美の記憶に促されて自慰をはじめることには、なんとなく抵抗があった。身体の内深いところに生じた切ない疼きをなんとか抑えようとするが、それはそうしようとすればするほど強くなってゆく。なかばまでバスタオルに覆われた内腿の奥が熱く火照りだし、こみ上げてくる劣情で胸が苦しくなってきた。ふと気がつく、手が勝手に動いてバスタオルの結び目をほどこうとしている。ビールの酔いがそうさせるのか、ただでさえゆるい理性のタガが、すっかり外れてしまったようだ。

鎖骨の下結び目を解くと、冴子は身体を覆っていたバスタオルを左右に大きく開いた。あらわにされた巨乳は仰向けになったせいで幾分高さを減じてはいるが、喰いこむ指を押

し返すほどの張りが重力の作用に抗^{あらが}つて、見事な盛り上がりを保っている。ほとんど形をくずしていないふくらみは、底面がひろくなり、自重で横にはみ出したまるみが強調された分だけ、その並外れたポリウムを見る者により強く印象づけるだろう。

膝から先をベッドの端から垂らしたみずみずしい裸身^{らしん}が、蛍光灯^{けいこうとう}の無気質な光にさらされる。すでに乳首は愛撫を待ちかねたように、硬くしこり勃^はつていた。ゆるく開かれた内腿のつけ根には髪と同じ色の恥毛が密生し、魅力的な繁みを形作っている。風呂あがりで水気を含んでいるせいか、それはひとときわしつとりとして、いかにも手ざわりがよさそうだ。ふつくりとした恥丘をふたつに分かつスリットは、うっすらと蜜をにじませて、温度差を感知するカメラを通せば、そのあたりが濃い暖色に染まって見えるだろう。

冴子は自分が、もう後戻りできない状態になっているのを感じた。こうなったら、みずからを慰^{なぐさ}めて身体^{からだ}の火照りを静めるしかない。いくばくかのやましさと、それをはるかにうわまわる劣情に衝^つき動かされ、冴子は大きく開いた左手を右の乳房にかぶせた。自分のものだけに、たっぷりとしたふくらみを遠慮なくわしづかみにする。

「ンふあ」

耳に吹きかけられたら背筋がゾクツとするような、色っぽい吐息が冴子の口から漏れた。乳房を強くしぼり上げた手からそっと力を抜いて、自分でも持て余し気味の巨乳をゆった

りとしたテンポで揉みしだく。

にむッ、にむッ、むにゅん……。

こうやってやわらかなふくらみをこねまわしていると、湯上がりで桜色に染まった肌に、初めてさわる異性の胸を飽きることなく揉みつづけていた明生の手の感触が甦ってきた。不器用だが、新しいオモチャを与えられた子供のように熱心だった手の動き。それを思い出すと、まだふれてもいない秘裂から透明なシロップがトロリとあふれ出す。

揉まれた側がその感触をこんなにはつきり覚えているのだから、揉んだほうの手にもそれがしつかりと残っているに違いない。ずいぶんと非論理的な思いこみでそう決めつけると、冴子は淫らな妄想の翼^{つばさ}をはばたかせた。

明生のペニスは放出後もずっと硬いままだった。後始末をして、たがいに衣服を整えたときも、ジーンズのファスナーをあげるのに苦勞しているほどだった。当然、一回出したぐらいじゃおさまらなくて、自分が高瀬家を辞してから、家族に隠れてこっそりと、勃起をしごく家庭教師の手の感触と、初めてさわった乳房のやわらかさを思い出しながらオナニーをするというのは充分考えられることだ。いや、「充分考えられる」どころのハナシではない。巨乳の感触が残る手、^{たお}嫺やかな指の感触が残るペニス、ありあまる性欲。これだけの条件が揃えば、明生が今日二度目の放出に向けて勃起をしごきたてるのは、ほとん

ど確実なことのような気がする。

絶対……絶対、ヤッてるわ。あのコ、あたしの胸さわったの思い出しながら、ビンビンになったチンポ、シコシコしてるわ。

一昨日、実際に明生がオナニーするのを見ていただけに、それを脳裏に思い描くことは容易だった。下半身を剥き出しにして、繁みの中からそり立つ勃起を夢中でしごく少年の姿は、すっかり発情した女子大生の身体をさらに昂らせる。もっとも、明生が冴子の胸を揉んでいたのは左手だったので、常識的に考えると右利きの彼がそれでペニスをしごくというのはおかしいのだが、そこは妄想だけあって、都合よく補正されているようだ。

冴子は特にそうした趣味があるわけではなかったが、自分より年下の少年が自慰に耽っているところを想像するのは、思った以上に刺激的だった。造りの雑なレディースコミックを見ながらや、同年代のセックスフレンドとの行為を思い返してのオナニーより、ずっと興奮しているのが自分でもわかる。おそらく、少年の《ズリネタ》の対象が他ならぬ自分だという確信が、劣情を掻き立てるスパイスとして作用しているのだろう。

自分の胸を揉みしだきながら、冴子は妄想の中の明生に問いかける。

あたしのおっぱいさわって、どうだった？ コーフィンした？ もちろん、そうよね。おちんちん、あんなに硬くしてたんだもの。コーフィンしてないはずないわよね。今も、それ

思い出しながらオナニーしてるの？ ビンビンのチンポしごいて、すっごく気持ちよくな
って、セーエキいっぱい出しちゃうの？

冴子は乳房を揉む手を止めて、せっかく風呂に入ったのに、もううつすらと汗ばみはじ
めた胸の谷間にそっと指を這わせた。ほんの数時間前、屹立したペニスから、ここ目がけ
て濃いスperlマがぶちまけられたのだ。風呂で念入りに洗ったはずなのに、熱いほとばし
りを受けたときの感覚が、まだ残っているような気がする。

そう言えば、胸への《ぶっかけ》なんて、ご褒美の中には含まれてなかったはずだ。本
当なら約束違反だと怒ってもいいはずなのに、なぜか、そうした感情は湧いてこなかった。
ただ、あのと鼻腔を満たしていた青臭い匂いが甦り、刺激を待ち受ける女体を狂おしい
ほど疼かせる。

冴子は胸の谷間を探っていた指を、なめらかな肌の上をすべらせて、無駄な肉のない腹
部のほうへと這わせていった。それは腿のつけ根に達すると、艶やかな恥毛の繁みを掻き
分け秘裂にふれる。

あ、もう、こんなに濡れてる。

思った以上の潤みを指先に感じて、冴子は一瞬、指の動きを止めた。シエルピンクの粘
膜をわずかに覗かせたわれめから透明な粘液があふれているさまは、まるで愛撫されるの

を待ちかねて、よだれを垂らしているかのようだ。冴子は中指の先で、ぬめる秘裂をスツと撫で上げた。それと同時に微弱な電流が背筋を走る。

「ン……」

と小さくうめいてから、冴子はやさしい手つきで、われめをなぞるように指先を何度も往復させた。愛液がスリット全体に塗りひろげられると、伸ばした中指をスリットに沿わせて、そつと力をこめる。するとそれは、なんの抵抗もなくやわらかな粘膜の狭間に沈みこんでいった。そうして秘裂にくぐらせた指を鉤形に曲げ、異物の侵入を歓迎するように締めつけてくるぬかるみをゆつくりと掻きまわす。

「あはあ」

半開きになった冴子の唇から、淫らな響きの吐息が漏れた。根元まで挿し入れられた中指の動きに合わせて、その両側の人差し指と薬指が、ぷにぷにした恥丘をマッサージする。そうするうちに手のひらでこすられたクリトリスが急速にふくらみ、フード状の包皮の下から顔を出した。すると、それに促されるように柔肉に埋もれた指の動きが速くなり、秘裂からチュクチュクと卑猥な水音が漏れてくる。

ね、わかる？ あたしのオ〇〇コ、もう、ぐちよぐちよなの。ビンビンのチンポがほしくて、こんなになっちゃってるのよ。

冴子はベッドの端から垂らしていた足のうち片方だけを引き上げると、妄想の中の少年に見せつけるように大きく股を開いた。そのはしたない格好で、中指をシャクトリムシのように動かし、伸縮性に富むホールに出し入れさせる。充血して厚みを増した肉襞が、せわしく動く侵入者からみついてくるが、多量の愛液ですべりのよくなつたそれを捕まえることはできないようだ。こみ上げてくる快感にヒップがくねり、な風いだ海のようなだつたベッドカバーに波が立つ。

冴子はあいているほうの手を伸ばして、身悶みもだえに合せてたぶたと揺れる乳房をつかんだ。人差し指と中指の股からツンとがった乳首を突き出させ、特大のプリンのようなふくらみを揉みしだく。もちろんそのあいだも愛液にまみれた指は秘裂ちゅうそうへの抽送を休みなくくり返し、いつの間にか乳首に負けじと勃起したクリトリスは、覆いかぶさる手のひらにたしかかな存在を感じさせていた。

「あ……ン……あふあッ」

快感曲線は右肩上がりりの放物線を描き、ときおりピンク色の舌先を覗かせる唇の隙間くちびるからは、鼻にかかった声がひっきりなしに漏れてくる。頬の赤みが増すにつれ、濡れた肉襞にくひだを掻き乱す指の動きに熱がこもってきたが、それだけでは貪欲な女体にエクスタシーへの階段を昇り切らせることはできないようだ。

指じゃ……指だけじゃダメ。もつと……もつと、おっきいのがほしい。

冴子のしなやかな指は勃起をしごくのにはいいが、彼女自身の欲張りなわれめを満足させるには細すぎる。我を忘れるほどの爆発的な快感を得るためには、もつとポリュームのあるものが必要だ。もちろん、いちばん望ましいのは勃起したペニスだが、それが手近にないときは代替品を使うしかない。

冴子は乳房を揉む手を止めて、秘裂から指を引き抜いた。腹筋だけを使って身を起こし、マットの端から身を乗り出して、キャスターのついたベッドの下ひきだしの抽出を開ける。その中には冬物の衣類がぎっしりとしまわれていた。身体の下に敷いていたバスタオルで愛液に濡れた指をぬぐうと、抽出の中に押しこまれた厚手のセーターの下に手を入れて、そこに隠していたバイブレーターをとり出す。

それは挿入部だけで二十センチを超える大物で、シャフトのいちばん太いところは指がまわり切らないほどだ。黒光りするシリコンでかたどられた男性器の根元に接続されたグリップが電池ボックスになっていて、その底面にスイッチがある。コントローラボックスの類たぐいいは付属しておらず、プラスチックの小さなツマミをグリップの側面に刻まれた溝みぞに沿って動かすことで震動の強弱を調節するようになっていた。その大きさもさることながら、凶悪なまでに張り出したカリといい、力強くそったシャフトといい、深窓しんそうの令嬢の鼻



先に突きつけたら気を失いそうなシロモノだ。

使い慣れたバイブレーターを手にしただけで、冴子の秘裂は大好物の骨を目の前にぶらさげられた牝犬のようにヨダレをあふれさせる。

こうなると、ほとんど条件反射の域だ。気がせくのか、冴子は抽出を閉めもせず、バイブレーター片手にベッドの真ん中で仰向けになった。女体の奥に棲む牝が、早く早くとせがんでくる。いつもなら挿入の前に、シリコン製のペニスをフェラチオめいた仕草で舐めしやぶり、淫らな気分を昂めるのだが、今はそんなことをする必要も余裕もない。

冴子はバイブレーターを逆手に握ると、片膝を立てて大きく股を開いた。あいているほうの手の人差し指と中指を大陰唇^{だいいんしん}にかけ、肉襞をはみ出させたスリットを左右に割り開く。剥き出しにされた粘膜はいびつな菱形^{ひしがた}を形作り、その中心から少し下寄りのところに穿^{うが}たれたホールから、膣腔^{ちつこう}の奥に蓄^{たくわ}えられていた粘度の高い愛液が垂れてくる。それは会陰部^{えいんぶ}を伝ってアヌスの周囲を濡らし、ベッドカバーにシミを作った。冴子はものほしげにひくつく膣口にバイブレーターの先端をあてがうと、あせる我が身をじらすようにゆっくりとそれを挿し入れた。並外れて大きな人造ペニスが、手品のようにスムーズに呑みこまれてゆく。

ぬむうーッ……。

冴子は柔肉の中にバイブレーターを根元近くまで埋没^{まいぼつ}させると、膣腔を満たす異物の感触を味わうように、少し間を置いてからスイッチを入れた。

ヴィイイーン……。

バイブレーターの力強い震動が膣壁^{ちっへき}に伝わると同時に、火照った裸身がそり返る。

「ンふあッ！」

背筋を走る快感に、冴子は派手な悲鳴をほとばしらせた。ビッグサイズのバイブレーターをぐつぷりと咥えこんだ秘裂からは、くぐもったモーター音が漏れてくる。大陰唇は太い胴部の周囲にぴっちり巻きつき、一見すると抜き差しならない状態だ。しかし、冴子の手がグリップを強く引つぱると、シエルピンクのぬかるみの中から黒いシャフトが引きずり出されてくる。愛液をまとったそれはテラテラとぬめひかり、得体の知れない両生類の身体の一部を思わせた。

冴子はバイブレーターを雁首のきわまで後退させると、今度はそこで折り返し、ワレメの奥まで一気に突き入れる。勢いのついたシャフトが肉路を貫き、居場所を奪われた愛液が外にあふれ出た。抽送のテンポは最初から速く、劣情の虜^{とりこ}になった女子大生は自身の秘芯^{ようしん}を容赦なくえぐる。まわりつく襞^{ひだ}をふり切るようにしてシャフトを後退させると、頼りないほどやわらかな中身が一緒に引きずり出され、逆に奥深くまで突き入れると、大陰

唇までもがスリットの内側へと巻きこまれた。

電気じかけの巨根の助けを借りて、冴子はエクスタシーへの階段を着実に昇ってゆく。しかし、しばらくして彼女は、自分の体内で蠢くバイブレーターの不調に気がついた。連日の酷使で電池が切れかかっているのか、いつもより震動が弱いように感じられる。こういう場合に備えて、たしか予備の電池が買ってあったはずだが、いったんオナニーを中断して電池を新しいものと入れ替えるのは面倒だ。それに、この散らかった部屋の中から目当てのものを、そう簡単に見つけ出すとは思えない。

冴子は今ひとつ元気がない愛用のバイブレーターにもどかしさを覚えながら、震動の弱さを補おうと、愛液まみれのシャフトをことさら激しく出し入れさせた。グツと張り出した力りが膣壁をえぐり、まるくどがった先端が子宮口にぶちあたる。さらにはもう一方の手を股間に伸ばし、親指と中指で固定したクリトリスを人差し指の腹でいじめるようにこすりたてた。快樂の波に揉まれて身悶えすると、V字形になった両腕に左右から寄せられて、ひととき谷間を深くした乳房が窮屈そうに揺れる。

「あッ、いいッ！ チンポが……おっきいチンポがオ○○コの奥に当たって、すっごくいいの……もつと……もつと強く。あたしのオ○○コ、壊れるぐらい突きまくって！」

冴子は自分では頭の中だけで発しているつもりちごの恥語を、実際に口に出していることに

も気づかない。抽送のテンポをひたすら速め、ラストスパートをかける。

「あッ、あッ……」

黒光りするシャフトはぬかるみの奥に向けて立てつづけにジャブを打ってから、とどめとばかりに強烈なストレートを叩きこむ。

「イクウッ！」

絶頂に達すると同時に、冴子はベッドの上で両足を踏ん張り、ブリッジをするように腰を突き上げた。収縮する肉路が根元まで呑みこんだシャフトをきつく締め上げる。バイブレーター grips を握る手は指の関節が白くなるほど力がこめられ、反対の手の人差し指ははちきれそうなクリトリスを押しつぶしていた。

数瞬のあいだ、冴子はそのままの姿勢でいたが、不意に全身から力を抜くと、汗と愛液のシミの上にヒップを落とす。頬はすっかり上気して、息は短距離走を走り切った直後のように荒くなっていた。物憂げな手つきでバイブレーターをぬかるみから引き抜き、スイッチを切る。震動音が途絶えると、冴子は静寂の中、軽く目を閉じて心地よい虚脱感きよだつかんに身を委ねた。

Lesson3

初体験



「これが、女のひとの……」

このままだとマズイ。

明生に与えた褒美の記憶に触発されて、思わず自慰に耽ってしまった冴子だが、身体
の火照りが冷めるにつれて、苦い思いがこみ上げてきた。シャワーを浴びなおし、今度こ
そ本当に汗と一緒に劣情の残滓^{ざんし}を洗い流すと、新しいバスタオルを身体に巻いてベッドの
端に腰を降ろす。ビールの酔いが抜け、頭がハッキリすると、状況の悪さがますます強く
感じられてきた。

家庭教師のアルバイトで、次に高瀬家を訪れるのは明後日^{あさって}だ。そのとき明生は、当然ご
褒美つきのテストをねだってくるだろう。そのテストで明生が合格点をとるのは、確実と
まではいなくても、かなり高い確率のような気がする。どうやら明生は、鼻先にニンジ
ンをぶらさげられるととたんに速く走りだすタイプのようなのだ。ひとから聞けば、まさかと
思うようなハナシだが、実際、ぶらさげたニンジンを喰われてしまった冴子としては、そ
う考えるしかない。

このままでは、また明生にご褒美を与えることになるだろう。そして、そのご褒美の内
容がエスカレートするのは目に見えている。今のペースでいけば、身体を求められるのも
そう遠くないかもしれない。いくらなんでも、それは困る。では、そうならないためには
どうすればいいのか？

いちばん簡単なのは明生の家庭教師を辞めてしまうことだが、それでは今まで与えたご褒美がすべて無駄になる。ここまで投資したのだから、なんとか元をとらなければ損だという貧乏つたらしい根性が、もつとも確実な手段をとることを邪魔していた。

うーん……。

頬に手を当てて考えこむ冴子の耳元で、彼女と同じ顔をした手のひらサイズの悪魔がそつとささやく。

「そんなの簡単じゃない。テストの問題を、とびきり難しくすりやいいのよ」

愁いに沈んでいた顔が、パアツと輝いた。

そっか……要するに、どうあがいても、あのコが合格点をとれないような問題を出せばいいんだ。

最初から解けそうもない問題を押しつけるのは、学習法としてあまり成果の上がるやり方とは思えないが、今はそんなことを言っている場合ではない。好条件に釣られて家庭教師を引き受けたものの、あまりにも予想外のなりゆきにとまどう冴子は、とにかく最初のひと月を乗り切って、バイト代を手にする以外には考えられなくなっていた。

目先の欲に囚われたこの目論みは成功し、あれからテストを三回実施したが、明生は合格ラインを越えることはなく、冴子は新たなご褒美を提供するのを免れていた。そして、

難易度をアップしてから四回目になる今日のテストも、思惑どおりの結果になりそうだ。

「ダメだよお、こんな難しいのできっこないよおー」

冴子の作ってきた数学のテストにとり組んでいた明生が音^ねを上げたのは、机に向かってから十五分ほどたったときだった。

「あら、もうギブアップ？」

ベッドの端に腰かけていた冴子は、左手首の内側につけた腕時計の文字盤をチラリと見て、

「まだ、時間はたっぷり余ってるわよ」

「いくら時間があっても一緒だよ」

明生は回転椅子をグルリとまわして、身体ごと家庭教師のほうを向いた。拗ねた子供のように唇をとがらせ、薄手のニットに白い麻のパンツといういでたちの冴子に向かって、

「学校で習ってないのばっかで、ぜんぜんわかんないよお」

わからなくて当然だ。このテストの問題は、すべて有名国立大学の入試問題集から抜粋^{ぼつすい}してきたのだ。学校の中間考査で赤点をとっている落ちこぼれに解けるものではない。明生が途中で投げ出すのもつともだ。さすがに今回は少し難易度を上げすぎたという気がしないでもないが、冴子はそんな思いはおくびにも出さず、

「なに言ってるの。受験戦争を勝ち抜くためには、これぐらいできなきゃハナシになんないわよ」

「じゃあ、受験戦争を勝ち抜いてきた先生は、こんなの簡単にできちゃうんだ？」
「え？」

高校のときから得意だった英語ならともかく、数学はちよつと自信がない。だが、家庭教師の冴子先生としては、ここはうなずかざるをえない。

「まあ、一応……」

「だったら、先生がやってみてよ」

「はあ？」

切れ長の目を剥いた冴子は、形のいい眉の片方を吊り上げて、

「なんで、家庭教師のあたしがテスト受けなきゃなんないのよ？」

「だって、教えるほうができないテストをやらされるなんて、なんか納得できないよ。だから、このテストやって、そうじゃないって証明してみせてよ」

言葉に詰まった家庭教師に、明生は疑わしげな目を向ける。

「まさか、自分でできない問題をボクにやらせてるんじゃないよね？」

「あ、あたりまえでしょ」

言ってから「しまった!」と思ったが、もう遅い。

「じゃ、さっそくやってみて」

そう言うなり、明生は回転椅子から立ち上がり、机の前を冴子に譲る。机の上に置かれたテスト用紙は、まったく手つかずのままだった。なにか妙な展開になってきたが、ああ言い切った手前、今さら引っこみがつかない。

なんで、こーなるのよお。

冴子がしかたなく机の前の椅子に腰を降ろすと、明生は試験官よろしくその背後に立ち、「制限時間はボクと一緒に一時間。合格ラインは、えーっと……七十点。もし、それ以下だったらセンセにフェラチオしてもらうからね」

「ええッ!」

「できたときのご褒美があるんだから、できなかったときのペナルティがあるのは当然でしょ」

「なに言ってるのよ。そんな勝手に……」

「どっちみち合格点とるんだからいいじゃん。こんなのできてあたりまえのテストなんでしょ?」

こうなったら、もう、やるしかない。見事合格点をとって、この生意気な生徒にギャフ

ンと言わせてやるのだ。

そう決心すると、冴子は眉間^{みけん}に皺を寄せて、必死に高校時代の記憶を呼び覚まそうとする。だが、恐ろしいことに三年間の詰めこみ教育の成果は、ここ数年の怠惰^{たいだ}な学生生活できれいさっぱり失われていた。答えが導き出せないどころか、問題によつてはなにを問われているのかすらわからない。無情にも時間は刻々と過ぎてゆく。今となつては、「超」がつくほどの難問ばかりをセレクトした昨日^{きのう}の自分が恨めしい。

「ハイ、そこまで」

どうにかこうにか解答欄を八割方埋めたところで、明生がストップをかけた。

「あ、ちよつと、まだ……」

「だあめッ！」

明生は机の上からテスト用紙をとり上げると、冴子のほうに手を突き出して、

「センス、答え」

疲れた顔の冴子は椅子から立ち上がると、ベッドの上に置いてあるクリアケースの中から解答のプリントを渋々^{しぶしぶ}ととり出した。明生はそれを受けとると、机に向かってテストの答え合わせをはじめ。ベッドの端に腰を降ろした冴子は、なぜか家庭教師のやったテストの採点をしている生徒の背中を見ながら、落ち着かないひとときをすごした。記入した

解答すべてが正解なら、八十点にはなるはずだ。だが、その可能性は極めて薄い。冴子としては、得点が合格ラインに達しているよう祈るばかりだ。

「どうだった？」

赤ペンを持つ明生の手が止まったのを見て、冴子がおそろおそろ訊く。明生は椅子をまわして身体ごとふり向くと、採点を終えたテスト用紙を家庭教師の顔の前に突きつけた。

「三十二点」

あちゃー。

予想以上に悪い成績に、冴子は一瞬目の前が真っ暗になった。

「先生、すっかりしてよ。これじゃあ、ボクよりひどいんじゃないの？」

明生のあきれたような言葉にも、冴子は一言もいちごんない。よりによって自分の作ったテストで赤点をとっていたのでは、家庭教師の面目丸つぶれだ。このていたらくでは、この先、明生の前で、センセイでございとふんぞりかえっていることはできないだろう。

いや、そんな心配をする前に、まずは合格点をとれなかったことへのペナルティをどうにかしなければならぬ。そもそもテストの問題を難しくしたのは、明生にご褒美を与えないためにしたことのはずだ。だが、そのせいで、明生にご褒美を与えるのと同じ結果になってしまうとは、まったくもってバカバカしい。なんとか、ペナルティを受けずにすま

す方法はないものか。

すると明生は、そうした冴子の気持ちを^{みすか}見透かしたように、手にしたテスト用紙をしげしげと見て、

「けど、ひどいなあー。これ、ママが見たら、先生、クビになっちゃうかもね」
クビ……。

それは、冴子をもっとも恐れていることだった。ここでクビになったら、今までの《投資》が全部パアになる。それだけは、なんとしても^さ避けたい。

そんな思いを冴子の顔から読みとったのか、明生は小憎らしい口調で、
「ま、ボクはセンセのこと気に入ってるから、そんなことするつもりはないけどね」

ハッキリとは言わないが、この言葉が脅迫^{きようはく}のニュアンスを含んでいるのはあきらかだ。要するに、明生の気に入る「冴子先生」でいるならいいが、もし逆らうようなら、このテストを母親に見せてできの悪い家庭教師をクビにするということなのだ。もちろん、リッチでゴージャスなバカンスのための資金源を手放す気のない冴子に選択の余地はない。

「それじゃあ、さっそく、やってもらおっかな」

明生は椅子に腰かけたままジーンズのファスナーを降ろすと、トランクスの前開きからペニスをひっぱり出した。採点を終えた時点で、すでにフェラチオへの期待をふくらませ

ていたのか、それはすっかり硬くなっている。ここ三回の授業ではご褒美を与えていなかった。明生の勃起を目にするのは一週間ぶりだ。いくら成長期とはいえ、たかだかそれだけの期間で目に見える差が生じるはずはないが、この前見たときより少し大きくなつたような気がする。ひよつとすると初めてのフェラチオへの期待が、血の気の多い牡器官をいつもより激しく勃起させていたのかもしれない。

「センセ、早く」

と促され、冴子は明生の足元にひざまずく。ジーンズの前開きから突き出たペニスはピンとそそり立ち、彼女のほうにその裏側を見せていた。そこを走る畝うねのような盛り上がり、若幹の力強さを誇示している。こうして低い位置から見上げると、角度のせいで一段とポリウムが増したように感じられた。明生の股間に顔を近づけると、乾いた汗の匂いと残尿臭のまじった牡器官特有の青臭さが鼻孔びこうを満たす。いい匂いとは言えないが、さりとて不快な感じはしない。食欲ならぬ、性欲をそそる匂いだ。

冴子はそり返ったシャフトに指をからめ、しっかりと剥け上がった先端を自分の口元に引き寄せた。亀頭の裏に唇を寄せると、裏筋のあたりに吐息がかかり、敏感なこわばりがヒクツと跳ねる。ふと目を上げると、明生はペニスが呑みこまれる瞬間を見逃すまいと、自分の股間を瞬きもせずに見下ろしていた。やんわりとした脅迫でフェラチオを強要され

たことを不満に思う一方で、ペニスと唇のファーストコンタクトを前にして緊張する少年の姿を微笑ましく感じてしまう。

冴子は先端部の切れこみに口づけすると、そのまま亀頭の表面に沿って唇を進め、肉の実をすつぽりと口に含んだ。するとそれは、ぬめらかな口内粘膜に包まれたのを喜ぶように、血の色を透かせた薄皮うすかわをはりつめさせた。新陳代謝しんちんたいしゃの活発な少年の亀頭に付着した目に見えない汚れが唾液の中に溶け出し、青臭い味が口の中いっぱいにひろがる。舌先を力りの裏に這わせると、汚れの溜まりやすいところだけあって、そこはひととき味が濃い。

雁首のくびれに唇を巻きつけて、亀頭を頬の内側で圧迫すると、尿道口から前ぶれのしずくが、じゅわりとにじみ出してきた。それに含まれた年若い牡のフェロモンが、根が淫蕩とらうな女子大生の肌を内側から火照らせる。ツンととがらせた舌先で、先端の切れこみをチロチロとくすぐると、明生は女のコのように甲高い声をあげた。

「あッ、あッ……あぁッ！」

わずかな舌の動きにも、いちいち敏感に反応するのがおもしろくて、冴子はフェラチオ初体験の少年の表情を上目づかいでうかがいながら、舌ざわりのいい亀頭を舐めしゃぶる。摩擦に慣れていない先端部を重点的に責められて、じっとしていられなくなったのか、椅子の上で明生はわずかに身じろぎをした。軽く握った肉柱からも、快樂のおののきが伝わ

ってくる。

冴子は勃起に添えていた手を離すと、持ち主にその分身が呑みこまれるところを見せつけるように、血管の浮いたシャフトに沿ってゆっくりと唇を進めた。

ぬむむむッ……。

O字形にすぼめられた唇が、急角度でそり立つ肉柱をすべってゆく。少年が見つめる中、彼のペニスは根元までずぷりと呑みこまれてしまった。育ち盛りの勃起は丸呑みできるギリギリのサイズで、脈打つ肉茎が口の中を心地よく圧迫する。冴子はしばらくそのままできて、口内を満たす勃起のポリウムを堪能^{たんのう}してから、ゆっくりと唇を動かしてはじめた。こわばりの角度に合わせて頭部を後退させると、それにつれて唇から弓なりにそつたシャフトが姿を現す。温かな口中に含まれていたせいか、唾液でぬめる表皮はさらに血の色を濃くしていた。若幹を這う静脈も、より強く浮き上がっている。カリのでっぱりがちようどいいストッパーになっているのか、冴子の唇はそこでいったん動きを止めた。しかしすぐに折り返して、今度はペニスを根元まで含みこむ。トランクスの前開きからはみ出した恥毛の先が、鼻の頭にふれるのがくすぐったい。

ぬむッ、ぬむッ、ぬむッ……。

唇はゆったりとしたリズムでシャフトを往復し、刺激を求めてやまない勃起をやさしく



しごく。だが、そうしたソフトな愛撫では物足りないのか、明生はもっと強い摩擦を催促するように、座ったまま腰を前ににじらせた。そのため、体重をかけられた回転椅子の背もたれがギシリときしむ。

明生の無言のおねだりに応えて、冴子は唇の動きを速めた。じゅぷじゅぷと卑猥な音がたち、痺れるような快感が少年の背筋を這いあがる。勃起の表皮に塗りこめられた唾液の助けを借りて、シャフトをすべる唇の動きはいたってスムーズだった。勃起のつけ根に鼻孔から漏れる息を吹きかけながらせわしく動く頭部に合わせて、顎のラインで切り揃えた黒髪が揺れる。

ときおり、冴子が口の中に溜まった先汁の混ざった唾液をすすり上げると、敏感な部位を強く吸われるのが苦痛らしく、明生が喉の奥で小さくうめいた。吸い上げ切れなかった唾液は口元からあふれ、顎を伝って垂れてゆく。

「センセの口の中、すつごく気持ちいいよ。そうやってじゅぷじゅぷされると、チンポ溶けちゃいそうだよ」

うわ言めいた明生のつぶやきが、冴子の胸に牡に快楽を与える牝の悦びをもたらした。不本意なりゆきでこうなってしまったが、フェラチオ自体は決して嫌いな行為でないだけに、自然と熱が入ってくる。おしゃぶり好きの女子大生は、口内粘膜でシャフトをしご

くだけでなく、単調な唇の動きにアクセントをつけるように、これまでの男性経験の中で体得した小技を織り交ぜはじめた。

ペニスを深く含んだついでに、ツルンとした亀頭を喉の奥のぬめらかな部分にこすりつける。唾液にまみれ、溶けだしたアイスクャンデーのようにぬらつく肉茎を、いやらしく伸ばした舌で根元から舐め上げる。含んだ肉の実から青臭い果汁をしぼるように口元をもぐもぐと蠢かせる。舌先を円を描くように動かして、張り出したカリの縁をなぞる。

技巧を凝らしたフェラチオに、明生は切なげに息をあえがせた。とりわけ、亀頭の裏を舌先でくすぐられるのがたまらないらしく、鋭い快感で腰が跳ねそうになるのを必死に押さえつけている。

若い勃起をしゃぶるのに熱中する冴子の目元は、いつしかほんのり桜色に染まり、鼻孔から漏れる息はペニスのつけ根を汗ばませるほど熱くなっていた。一方的に奉仕するだけでは我慢できないのか、愛撫をせがむように秘裂がムズムズしてくる。穿いているのが麻のパンツだからいいようなものの、もしスカートだったら、その中に自分の手を忍ばせていたかもしれない。

あ、ヤダ。あたし、濡れてきた。

恥丘に密着したパンティの下で、貪欲なスリットが潤んできたのが感じられる。どこを

愛撫されたわけでもないのに、ペニスをしゃぶっているだけで秘裂を濡らしている我が身の浅ましさに、冴子は強い羞恥しゆうちを覚えた。しかし、そうした恥の意識はかえって女体を昂らせ、彼女は自分の手指の侵入を拒むこばようにしっかりと閉じ合わせた内腿を、無意識のうちにこすり合わせていた。

「ン……あッ……クッ……」

明生は初めてのフェラチオがもたらす快感を少しでも長引かせようとしているらしく、もろい勃起の暴発を歯を喰いしばって耐えている。

けっこうがんばるわね。

冴子は少年のがんばりに感心しつつも、それを突きくずそうと、シャフトをしごく唇をすばめ、摩擦係数を一気に高めた。いくらがんばったところで、こうした激しいフェラチオに初々しい勃起がそう長く持ちこたえられるはずがない。

「せ……センセ、オレ……オレ、もう……」

ほどなくして、明生がうわずった声で放出のときが近いことを告げた。しかし、冴子はそれを無視して、いっそう愛撫のテンポを上げる。

「だ……ダメだよ、センセ。そんなにされたら、ホントに出ちゃうよ」

この期に及んでも、フェラチオ初体験の少年には相手の口の中に射精することのためら

いがあるようだ。だが、そうした少年らしい躊躇^{ちゆうちゆう}も、激しい快樂の奔流^{ほんりゅう}には抗^{こう}すべくもなかった。

「ホントに……ホントに、も……ああッ！」

温かな口中に深々と含まれた亀頭が、ぶわッとふくらんだ。喉の奥でそれを察知すると、冴子は唇を雁首のくびれまですばやく後退させる。それとほぼ同時に、先端の切れこみから熱いほとばしりが噴き出した。

びゆるンッ！

ギリギリまで我慢していただけに、放出の勢いは激しく、スペルマも濃い。連続して撃ち出される白濁液が喉の奥を直撃しないよう、冴子はそれを舌先で巧みにさばきながら口の中に溜めていった。ここ一週間、家庭教師からのご褒美がなかったのをとり戻すように、明生の勃起はこころゆくまで若い牡のエキスをぶちまける。それは、ご褒美がもらえなかったあいだ、ずっとオナニーを我慢して、精液を溜めていたのではないかと思わせるほどの量だった。

ようやく噴射がおさまると、冴子は口中を満たす生臭い粘液を、少しずつ喉の奥に流しこみはじめる。しかし、煮詰めたように濃いスペルマは、口内発射には慣れているはずの彼女ですら飲み下すのに苦勞するほどだった。それがすむと、ずっと唾えたままだったこ

わばりを根元近くまで含み、キュツとすばめた唇でシャフトをしばらく上げながら、尿道の中に残っている精液を吸いとってやる。射精直後で過敏になった亀頭を吸引されると、明生は顔をしかめて眉間に縦皺たてじわを刻んだ。

ちゅぽンツ。

冴子は小気味よい音を立てて亀頭から唇を離すと、スperm臭いため息をつく。

「ふう」

すべてを出し切った明生は、椅子の背もたれに上体を預けて荒い息をついていた。ジーンズの前開きからは、たつぷりと舐めしゃぶられたせいで、ゆでたように赤くなったペニススがそそり立っている。

また、やつちやつた。

床にペタリと腰を落とした冴子は、ついさっきまで自分の口の中で脈打っていた少年の分身を焦点しょうてんの定まらない目で見ながら、一度は抜け出しかけた泥沼にふたたび足を踏み入れてしまったことを感じていた。

「先生、早く」

と催促されて、上半身だけ裸になった冴子は、下半身を剥き出しにしてベッドの端に腰

かけた明生の足元に膝をついた。大きく開かれた少年の足のあいだに身体を入れ、両側から捧げ持つようにした自分の乳房で、下腹につくほどそり返った勃起を挟む。

「ンッ」

こわばりを包むやわらかな肌の感触に、明生は唇を引き結んだまま小さく鼻を鳴らした。歳のわりにはそれなりにポリュームのある勃起もFカップの巨乳に挟まれると、その大半が肉の谷間にうずもれてしまい、かろうじて、そこから亀頭が顔を覗かせている状態になる。冴子は乳房に手を添えたまま上半身を上下に揺らし、たっぷりとしたふくらみで肉茎をゆっくりとこすりはじめた。

このパイズリは、もちろん、今日のテストで合格点をとったことへのご褒美だ。前回のことで懲りた冴子がテストの難易度を元に戻したとたん、明生は当然のように合格ラインをクリアし、こうして、またご褒美を与えるハメになってしまったのだ。

にゅむ・にゅむ・にゅむんッ……

冴子の身体の動きに合わせて、彼女の手からはみ出た左右の乳房が、そのあいだにしっかりと挟みこんだシャフトをしごく。最初のうちこそ少しぎこちなかったが、冴子にとってパイズリは慣れた行為のようで、動きはいたってスムーズだ。余った包皮が一定のリズムで剥き上げられては、すぐに元に戻される。弾力あるやわらかさに包まれて、少年の勃

起は早くも前ぶれのしづくをにじませはじめた。

腰のうしろに手をつけて上体を軽くそらせた明生は、パイズリの現場に喰い入るような視線を注いでいる。自分の分身が白いふくらみの狭間で溺^{おぼ}れているさまは、すでに充分高まっている少年の興奮をさらに煽^{あお}るものだった。

パイズリは様々な技巧を駆^く使^しできるフェラチオに較べると、刺激のパターンが単調なのは否^{いな}めない。だが、肌と肌との密着が性欲以前の動物的な欲求を満たしてくれる。男なら誰しも顔をうずめたいと思うであろう深い胸の谷間に挟まれて、シャフトはますます硬くなり、白い肌に映えるピンクの亀頭は中から明かりを灯したように赤みを強くしていた。

フェラチオもそうだが、いくらパイズリをしても女のほうに肉体的な快感はほとんどない。こうした一方的な奉仕は、自分の身体が性欲処理の道具にされているようで、女王様への憧れと牝^{めす}奴隷^{どれい}への屈折した羨望^{せんぼう}が裏と表に刻まれたコインを、心の奥に隠し持つ女体をひどく興奮させる。自身の肌の火照りと相俟って、熱いこわばりを挟んだ胸の谷間は、いつしかうつすらと汗ばんでいた。

先端の切れこみからにじむ匂いの強い先汁が汗と混じって、ふくらみの動きをさらになめらかにする。あいだに挟んだ勃起と競うように、左右の乳首はどちらも硬くその身をと

がらせていた。明生の位置からは見えないが、肩甲骨けんこうこつの形が薄く浮き出た冴子の白い背中がなまめかしい。

手よりもはるかにやわらかく、舌よりもずっとボリュームのあるふくらみに包まれて、少年のこわばりは限界に向けて着実に追い詰められてゆく。勃起のつけ根にひときわ力がかもり、それを胸の谷間で感じとった冴子は、放出のときが近いのを察知した。だがそれでも、シャフトをしごく乳房の動きをゆるめようとはしない。射精をこらえる明生の内腿の筋肉がひきつり、腰のうしろについた手がベッドカバーに指を立てた。

「センス、もう出ちゃうよ。このままだと、センスの胸に……」

警告の言葉が終わらぬうちに、ギリギリまで引きしぼられた我慢の弓弦から快樂の矢が放たれる。

ビクンッ！

電撃を浴びたように明生の細腰が跳ね、それと同時に尿道口からジェル状の白濁液が撃ち出された。

「あッ！」

いくらご褒美とは言え、青臭い体液で家庭教師の肌を汚してはいけなかったのか、明生が水の入ったコップを落としたときのような声をあげる。しかし、欲望のほとばしり

は、いったんはじまってしまおうと止めようがない。やわらかな巨乳に挟まれたまま、ペニスは何度もしゃくりあげ、冴子の顎の裏から細い首筋にかけておびただしい量のスペルマをぶちまけた。

びゆるッ・びゆるッ・びゆるるッ……。

激しかった噴射がおさまっても、冴子はすぐには身体を離さずに、指が喰いこむほど強く握った乳房を両側から寄せて、力み返ったシャフトをしぼる。尿道の中に残っていたスペルマがにゅるりと押し出され、先端の切れこみに白く濁った露の玉を宿らせた。そうやって最後の一滴までしぼりとってから、冴子はそっと身体を離す。むっちりとした胸の谷間から解放されても、少年のペニスは屹立したままだった。ただ、はちきれそうだった龟头は少し小さくなって、なんとなくひと息ついた様子に見える。

顎を直撃したスペルマは、岸壁に打ちつけられた波のように白濁した飛沫を下唇にまで跳ねさせていた。鎖骨のくぼみに飛んだ粘液が肌理の細かい肌をすべって、ついさっきまで勃起をしごき立てていた胸の谷間に垂れてくる。液中に含まれている精子の数が多いのか、白濁した航跡を曳くスペルマのしずくはねっとりとして重たげだ。

「はい、ティッシュ」

明生は自分に必要な分だけ抜きとると、冴子にティッシュの箱を差し出した。彼女はそ

れを受けとると、自分の胸元から立ちのぼる青臭さにむせ返りそうになりながら後始末をはじめめる。肌を汚す粘液は濃いうえに量が多く、ティッシュでぬぐうだけでも大変だ。

ひと足先に後始末をすませた明生は、足を入れたジーンズのファスナーを上げると、

「フェラもパイズりしてもらったから、次のご褒美は、いよいよアレかな」

ブラジャーを着けた冴子が、白いブラウスのボタンを留めながら訊く。

「アレって、なによ？」

「セックス」

冴子は思わず手を止めて、

「なに言ってるの。そんなのダメに決まってるでしょ」

「えーッ、なんでえー？」

「たかがテストのご褒美に、ホンバンなんて贅沢ぜいたくすぎるわよ」

「じゃあ、どうすりゃいいのさ？」

「今度の校内模試で十番以内に入れたらね」

冴子としては絶対無理な条件を出したつもりだったのに、明生は目を輝かせ、

「マジ？」

しまった！ あたしってば、またよけいなことを……。

と、後悔したが、もう遅い。中間考查で赤点を連発していた劣等生がどれだけがんばったところで、校内模試でいきなりベストテンに入れるはずがないと自分に言い聞かせつつ、冴子は曖昧にうなずいた。

「え、ええ……」

その次の授業で、いつものように彼女が問題集を切り貼りしたテスト用紙を出そうとすると、明生がいつになく真剣な顔で、

「今日はテストはいいよ」

「え？ でも、それじゃあ、ご褒美はあげられないわよ」

「うん、わかってる。それより、勉強で訊きたいところがあるんだ」

机の上には、家庭教師が来るのを待ちかねていたように、数学の教科書とノートがひろげられている。ご褒美を犠牲にしてまで勉強するとは、どうやら明生は本気で校内模試で十番以内に入るつもりらしい。

冴子は机に向かう明生の横に椅子を置き、それに座って勉強を見てやる。よくよく考えると、こうした家庭教師らしいことをするのは、これが初めてではないだろうか。明生の質問には、思った以上に基礎的なことが含まれていて、これがわからないようなら間違っても校内模試で十番以内に入る成績はとれないだろうと安心する一方で、冴子は理由の説

明できない奇妙な胸騒ぎを感じていた。

「はい、どなた？」

その日、軽やかなチャイムの音に応えてドアを開けてくれたのは、明生の妹の梢こずえだった。てつきり千春が出てくるものと思っていた冴子は少し驚いて、

「あら」

「あ、先生」

冴子は単に明生の家庭教師であって、別に梢の先生ではないのだが、ほかに呼びようがないので彼女も冴子のことをそう呼んでいた。明生の家庭教師として高瀬家を訪れるようになってから、梢とはすでに何度か顔を合わせているが、二階の廊下ですれ違うときや、出かけようとする彼女と玄関で鉢合わせしたとき軽くあいさつするぐらいで、こうして面と向かって話をするのは初めてだ。年齢は確か、明生よりふたつ下のはずだ。

背は同年代の少女たちとくらべても小さい部類に入るだろう。全体的に小作りで、身体のどこをとっても無駄な肉は一切ない。ミニスカートの裾から伸びる脚線はすつきりと細く、水の抵抗が少なそうなボディラインは、この年頃にしかないふくらみかけた蕾つばみのような未成熟な魅力を有していた。

千春と明生の外見が、ふたりが血筋という見えない糸で繋がれて（つな）いるのを感じさせるのに比して、梢の顔立ちにはあまり母親に似ていない。どうやら彼女は、父親のほうからより多くのものを受け継いだようだ。

栗色がかった髪はふたつに分けられて、左右の耳の上でまとめられている。垂れた髪の毛は、ギリギリで肩にかからない。髪を結んでいるリボンは鮮やかな赤で、少女の指より細いものだった。もっと幅広のものを使ったほうが、より髪に映えるだろうが、本人はそうした結果、子供っぽく見られることを警戒（けい）しているらしい。そうして、やたらと子供扱いを嫌うところはいかにも今時の女のコだが、やはり育ちのよさか、言葉の頭に見境なく「チョー」とかつけたりはしない。また、これだけは母親譲りの白い肌も、下品に灼（や）いて、せつかくの瑞々（みずみず）しさをみずから損なうようなこともしていなかった。

小さな唇はツヤツヤとして、わずかに上向きかげんの鼻が小生意気さとかawaiiげを同時に感じさせる。冴子の見たところによると、同い年の異性にはハナも引っかけないタイプだろう。少し吊（つ）り気味だが、丸い瞳の大きな目は表情が豊かで、発展途上のスレンダーな肢体（しだい）と相俟（あ）って、どこか悪戯（いたづら）な仔猫（こねこ）を思わせる。その印象を強調するように、少女はトレーナーの上から、胸元にかわいい猫のアップリケをあしらったエプロンを着けていた。

「お母さんは？」

と、冴子が訊くと、梢はわずかに顔を曇らせて、

「ママは町田のおばさんが入院して、それでお見舞いに」

「まあ、そうなの」

町田のおばさんというのは千春の母の妹で、梢から見ると大叔母にあたる。先日、授業が終わってから夕食をよばれたとき、たまたま当人から電話があつて、それを受けた千春があとで、中座の非礼を詫びつつ話してくれたところによると、去年の秋口からずっと具合を悪くしているらしい。

Vネックのショートセーターに膝丈のスカートを合わせた冴子に、梢は自分のエプロン姿の理由を説明するように、

「だから、今日の晩ご飯はわたしが作るんです」

調理の途中でチャームに呼ばれ、あわてて玄關に出てきたらしく、少女の右手にはへビの顔を模した鍋つかみがはめられたままだった。

「……って言っても、小学校のとき調理実習で覚えたカレーなんですけどね」

と梢は謙遜するが、いまだに黄身のつぶれた目玉焼きと野菜炒めらしきもののしか作れない冴子よりはるかにマシだ。

「明生くんは二階？」

「はい」

と、梢はうなずいてから、腕の先のヘビの口を意味もなくパクパクさせた。

「お兄ちゃん、学校でなんかあったみたいで、帰ってくるなり自分の部屋に閉じこもっちゃってるんです」

そう言えば、明生の学校で校内模試が実施されてから、今日でだいたい一週間になる。そろそろ、その結果が出てくるころだ。目の前にぶら下げられたニンジンの大きさにつられて、明生はずいぶん意気こんでいたが、梢の言った様子だと、十番以内には入れなかったようだ。

ま、当然よね。

と思いつつ、冴子は心の中で、ホッと胸を撫で下ろした。

「それじゃあ、上がらせてもらおうね」

「あ、はい、どうぞ」

梢がスリッパをパタパタ鳴らしてキッチンに戻るのを見送ってから、冴子は軽やかな足どりで二階に上がり、明生の部屋のドアをノックする。

「はぁーい」

中から返ってきた声は、親族の死を看とった直後のように暗く沈んだものだった。部屋

に入ると、明生は壁に向かってベッドに寝そべっていた。縦にした枕を胸に抱き、胎児のように身体を丸めている。これで指でもしゃぶっていれば、完璧に拗ねた幼児のポーズだ。家庭教師が来たというのに、背中を向けたまま顔を見せようもしない。全身から暗い気が発散されていて、Tシャツの背に「ガックリ」と書いてあるのが見えるようだ。手を伸ばせば届くところにあったいつものご褒美を犠牲にしてまで模試に備えたのに、その結果が思わしくなかったのでは、こうして落ちこむのも無理はない。期待が大きかっただけに、その反動で落胆も大きいようだ。冴子は、いい気味だと思う一方で、自分の身体をご褒美として差し出すことを免れた余裕からか、明生の落ちこみぶりが少しかわいそうな気もしてきた。

「校内模試、どうだった？ そろそろ成績、出たんじやないの？」

「うん」

と、応える声もひどく力ない。やはり、模試の結果は芳しくなかったようだ。

「で、結果は？」

「机の上」

ぶっきらぼうに言われてそこに目をやると、きれいにかたづけられた天板の真ん中に一枚のプリントが置かれていた。コンピューター処理されたそれは、模試の結果を表すもの

で、細かく区切られた欄に科目別の得点、順位、偏差値等が記されている。

どれどれ……。

冴子は机からプリントをとり上げ、目を通す。各教科の得点は、明生の態度から推測していたものより、ずっといいようだ。そうするとあの落ちこみぶりは、もう少しのところでご褒美を逃したゆえなのか。そんなことを考えながら、総合順位の欄を見た瞬間、冴子は我が目を疑った。そこには、画一的な字体でたった一文字、「7」とだけ印字してある。言うまでもないが、これは、今回の校内模試における明生の順位が七位であるということだ。

そんなバカな……と、冴子は手にしたプリントを何度も見直したが、総合順位の欄の数字は「70」の見まちがいでも、ミスプリントでもないようだ。

これは夢よ。悪い夢だわ。

認めがたい事実を前にして、冴子の意識は現実からの逃避とうひを図はかろうとする。

目が覚めたら、あたしはまだ温かい布団の中にいるのよ。お願い、早く目が覚めて。

だが、そうした願いもむなしく、いつまでたっても悪夢のような現実さかは醒めはしなかった。

ハッ！

背中に視線を感じてふり向くと、ベッドの上にあぐらをかいた明生がニカツと笑って、Vサインを突き出した。得意満面とは、このような表情を言うのだろう。ここに至って、ようやく冴子は自分がいっぱい喰わされたことに気づいた。明生は今の今まで、あふれそうになる喜びを押し隠し、わざと落ちこんだふうを装っていたのだ。それを額面どおりに受けとって、自分から校内模試の結果を訊いた冴子は、とんだマヌケというわけだ。

「先生」

と呼びかけられて、冴子は身体を硬くした。

「約束、覚えてるよね」

十日ばかり前に、うっかり口にした言葉が脳裏に甦る。

（『今度の校内模試で十番以内に入れたらね』）

後悔、先に立たずというが、冴子は自分のうかつさが悔やんでも悔やみ切れなかった。もし、タイムマシンがあるなら、この約束をしたときに戻って、過去の自分の後頭部を思いつきりはたいてやりたい。

「ね、ねえ、そのことなんだけど……」

「まさか、今さら、あれはなかったことにしてくれ、なーんて言わないよね？」

先まわりされて、冴子は言葉に詰まる。しばらくのあいだ彼女は無言で、余裕の笑みを

浮かべる明生の顔を睨みつけていた。だが、小さくため息をつくと同時に、高いところから飛び降りようとする猫みたいに強ばっていた身体から、ふッと力が抜ける。

「わかったわ」

自分でも意外に思うほどあっさりと、負けを認める言葉が口から出た。今までの経験から、下手に抗っても事態を悪くするだけなのはわかっていたし、明生に与えるご褒美が胸を見せることからフェラチオ、パイズリとエスカレートしていくうちに、少年と淫らかな行為に耽ることへの抵抗が薄れていたせいかもしれない。もちろん、「なんで、あたしがこんな目に……」という疑問は胸にある。だが、今回の場合は、バカな約束をした自分が悪いのだ。もし誰かを恨むなら、そんな自分を恨むしかない。

利口なことに冴子は無駄な抵抗をあきらめて、期待に満ちた明生の目の前で服を脱ぎはじめた。ショートセーターを起伏に富んだ上半身から引きはがし、スカートを足元に落とす。冴子がブラジャーのフロントホックを外したところで、明生が場所を譲るようにベッドから降りた。そして自分もそそくさとジーンズを脱ぎ、トランクスから足を抜く。もちろんそうするあいだも、ひと足早くあらわにされる女体から目を離さない。

冴子は途中で自分の気が変わるのを恐れるように手早く裸になると、ベッドに仰向けに横たわった。白い裸身を覆うものはなにひとつなく、まな板の上の鯉こいの心境だ。すぐにで

も飛びかかってくるのではという予想に反し、明生はベッドのそばに突っ立って、彼女の裸体を見下ろしている。剥き出しになった少年の股間では、勃起したペニスのつけ根がダランと垂れたTシャツの裾を持ち上げていた。だが、そうして激しく興奮しながらも、夢にまで見た《ごちそう》を前にして、かえってすぐには箸をつけれないようだ。

「どうしたの？」

と、下から問いかけられて、明生はやつと冴子の足元のほうからベッドに上がってきた。すると、だらしなく投げ出されていた脚が、少年をいざなうようにゆっくりと開かれる。明生はベッドカバーの上に腰を落とすと、すべらかな内腿のつけ根に好奇心いっぱい目を向けた。ほどよく脂肪しぼうの乗った恥丘は艶やかな恥毛をしっかりと繁らせ、微笑むようにほころぶ秘裂はシエルピンクの肉襞をわずかにはみ出させている。

初めて見る女体の神秘は、少年の目を釘づけにした。美術館に展示してある名画は熱心な視線にさらされることによって、わずかずつではあるがキャンバスに盛られた絵の具が削れていくという。そのことをもって、視線に物理的な力があるとする説があるが、冴子は今、自分の身体で、それがあながち荒唐無稽こうとうむけいなものではないことを感じていた。

見られてる……あたし、今、オ○○コ見られてるんだ。

年下の少年の視線が、自分の身体の中でもっとも秘めやかな部位をとらえているのを意

識するだけで、頬にうつすらと血が昇る。もちろん、そこを異性の目にさらすのはこれが初めてではないが、こんなにもしげしげと見つめられたことはなかった。喰い入るような視線を浴びせられていると、恥丘の毛穴が収縮し、鳥肌が立つのにも似た感覚で秘裂の周囲がムズムズしてくる。

明生は、さっきまで自分の抱いていた枕に頭を預けた冴子の顔をうかがいながら、この少年にしてはめずらしく、おずおずとした態度で、

「さ……さわっていい？」

「いいけど、乱暴にしちゃダメよ」

オナニーのときは人を殴り殺せそうなほど大きなバイブレーターで秘裂を突きまくっているクセに、妙にしおらしいことを言う。

明生は不自然なほど大きく喉を鳴らして生唾を飲むと、右手を冴子の股間に伸ばした。だが、その動きは水中でのもののように緩慢で、なかなか秘裂にふれてこようとしていない。まるで、指先がふれたとたんに、目の前の女体が蜃気楼みたいに消えてしまうのではないかと疑っているようだ。やろうとしている行為とはイメージ的にかけ離れた少年の真剣な表情は、それを見ている冴子までも緊張させる。

おそろおそろの伸ばされた人差し指の先が、ふつくりとした恥丘をふたつに分かつわれめ

にふれた。

「ン」

寒さでひび割れた唇の痛みをたしかめるような慎重なタッチに、冴子は小さく鼻を鳴らした。ハッとして冴子の顔を見る明生に、彼女は「いいのよ」というように目でうなずいてやる。それに促されて、少年が秘裂にふれた指に力を入れると、それは、たいした抵抗もなく柔肉の中へと埋没していった。

「入っ、ちゃった……」

目の前で起きたことが信じられないのか、明生が事実の確認をするように口の中でつぶやいた。知識としては知っていても、実際に自分の指を入れてみて、女体がもうひとつの口を持つことを強く実感したようだ。そのショックが一段落してから、明生は挿入した人差し指でぬかるみの中を探りはじめた。伸縮性に富むホールの中は温かく、指の動きに反応して、それを取り巻く膣壁が微妙に蠢く。縦に裂けた外観から想像していたほど間口はひろくないが、その分奥は深いようだ。

「んん」

深々と挿し入れられた指で膣内をまさぐられ、冴子はわずかに身じろぎをする。興味深い使い方のわからない道具をいじる子供のような、熱心だが、たどたどしい指の動きが

焦れたい。

「ね、中を……中を掻きまわすようにしてみて」

冴子の指示に従って、明生は汁気の増したぬかるみを掻きまわした。膣壁に沿って動く指に、ねっとりとした感触の襲がまわりついてくる。

「そう……それでいいわ」

と言いつつも、快楽に貪欲な冴子は、さらに効率よく摩擦を生み出す動きを催促する。

「次は、指を前後に動かして」

明生は言われたとおり、ピンと伸ばした人差し指をホールに出し入れさせた。豊富な潤滑液かつえきのおかげか、その動きはスムーズだ。

「もっと速くていいわ。それで、もっと奥まで……」

明生が指の抽送を速めると、秘裂から卑猥な水音が漏れてきた。指を突き入れるたびに指の表面と膣壁とのあるとも思えぬ隙間から、ちゅぷりとあふれた愛液が会陰部を伝ってアヌスのほうに垂れてくる。

「指は……指は、もういいわ」

「うん」

と、素直にうなずいてから、明生はスリットから指を引き抜いた。指先と潤みの源との

あいだに引かれた粘液の糸が、一瞬きらめいてから切れる。長々と秘裂に咥えこまれていた人差し指は、シロップ漬けにされたようにぬるぬるになっていた。

「今度は、そこを舐めてみて」

冴子は「舐めてみて」と気軽に言うが、クニニリングス初体験の少年にとって、その行為はそれなりに決心を要することのようだ。土下座をするみたいに腰を落としたまま上体を前に倒し、知らないひとの手から餌をもらう野良猫のように、慎重に冴子の股間に顔を近づける。しかし、すぐには秘裂を舐めようとはしない。しばらくは匂いを嗅いででもいるように、蜜を湛^{たた}えた花びらを間近で見つめている。

セックスに関することには興味津々^{しんしん}の明生も、排尿器官でもあるところに口をつけるのは、さすがにためらいがあるようだ。だが結局は、そうした生理的な抵抗よりも、性的な好奇心のほうが勝つたらしく、そろそろと舌を伸ばし、スリットをそっと舐め上げる。われめからはみ出た褌に舌先がふれた瞬間、冴子はヒクツと身体を痙攣させた。少年の興味と警戒がいりまじった控えめなアプローチは、彼女に自分が初めてフェラチオをしたときのことを思い出させる。

一度秘裂を舐めてみて、そんなにまずいものではないのがわかると、明生は夏バテした犬のように舌を長く伸ばし、透明なシロップでぬめるわれめをつづけて何度も舐め上げた。

舐めても舐めても淫らなぬめりはぬぐわれず、かえって量を増してくる。

れろ・れろ・れろんッ……。

濡れたビロードのようにぬめらかな舌の表面が、大胆な動きでスリットをなぞり上げるたびに、冴子の身体を彼女自身の意志では制御できない小さな震えが走る。次々と押し寄せる快楽のさざ波は、やがて大きなうねりとなって、豊かな裸身をゆったりとローリングさせはじめた。

「もっと……もっと奥まで舐めて。われめの中に、舌、入れて」

この要求に応じて、明生は目いっぱい伸ばした舌を粘膜の狭間に差し入れた。少年の舌は安全なねぐらを求める軟体動物のように蠢きながら、ホールの中にもぐりこんでくる。恥毛の繁みに鼻面をうずめた明生は、ぬかるみを掻きまわしていたときの指の動きを真似ようと、懸命に舌を動かした。すると、恥丘と密着した口元から、食卓ではたてられない下品な音が漏れてくる。それをBGMにして、冴子は見事に隆起した胸をゆるやかに上下させながら、気怠げに身をくねらせた。

この反応に気をよくしたのか、明生は汁気の多い果実にかぶりついたときのよう口の中にあふれる愛液をすすり上げながら、興味の赴くままに力をこめた舌先で柔肉をえぐり、肉壁と戯れる。明生の舌づかいは稚拙で、テクニクと呼べるようなものは皆無だった。



だが、そうしたがむしやらな愛撫は少年の異性に対する飢えを感じさせ、日頃から好色な身体を持て余していた女子大生に貪られる悦びを与えてくれる。

ぬかるみの中で舌をくねらせるのに疲れたのか、明生が秘裂から口を離した。息継ぎしてからふたたび口をつけようとする少年に、冴子はしつとりと潤みを帯びた声で、

「ね、見て。われめの上のところにちっちゃくてプクッてしてるのがあるでしょ。それがクリトリスよ」

充血して肥大したクリトリスは包皮の下から顔を半分覗かせて、自己の存在を主張している。

「今度は、それ舐めて」

明生は発情した牝の匂いを漂わす冴子の股間に顔を寄せ、赤みの強いシエルピンクの突起をチロリと舐めた。とたんに、電撃を浴びせられでもしたように、冴子の腰がビクンと跳ねる。

「はひッ！」

女体の過敏な反応に驚いて、明生は舌の動きを止めた。叱られるのを恐れるように、目だけを上げて冴子の顔を見る。

「いいからつづけて」

と促され、明生はクリトリスへの愛撫を再開した。

「そこは、とっても敏感なところなの。だから、ちよつと舐められただけですつごく感じちゃうの」

冴子は舌とクリトリスの接触面から生じる快樂のパルスで、声が途切れそうになるのをこらえつつ、自分の身体を教材にして、デリケートな部位へのアプローチのしかたをレクチャーする。

「舌をとがらせて、それでチロチロって……あたしが、おちんちんの先っぽにしてあげるみたい……あ、そう、そんな感じ。それから唇で軽く挟んで、やさしく吸ってみて」

明生は冴子先生が教えてくれるとおりに、舌先でクリトリスをくすぐり、捕まえにくい突起を吸った。教え方がいいのか、それとも、好きこそもの上手なれというヤツか、少年はすぐに愛撫のコツを会得したようだ。フード状の包皮の中から吸い出されたクリトリスを舐める舌の動きはマメだが決して単調でなく、初心者とは思えないほど強弱と緩急をわきまえている。体験学習の成果を発揮する明生の愛撫に、冴子は巨乳を揺らせて身悶えた。

愛撫の対象がクリトリスに移ったことで、ほったらかしにされた格好の秘裂は、すぐ上の突起を羨むようによだれを垂らしている。とめどなくあふれる愛液は、ヒップの谷間で秘めやかに息づくすばまりを濡らし、ベッドカバーに小さなシミを作っていた。狂おしい

ほど子宮が疼き、熱く潤んだぬかるみを埋めるこわばりがほしくてたまらない。手や口に勃起の硬い感触が甦り、秘裂にその侵入を渴望させる。本来は不本意なはずのセックスで、自分から求めるような真似はしたくなかったが、体内に棲む貪欲な牝の飢えは、ささやかな体面を保つのを許さないほど強いものだった。

「ね、ねえ……」

と、声をかけられて、明生が股間から顔を上げる。少年の口のまわりは粘度を増した愛液でベトベトになっていた。冴子のおねだりを待ち受けるように、股間では若いペニスがいきり立ち、鈴口はすでに先汁をにじませている。剥け上がった亀頭はパンパンにふくれ、今にも精液が噴きこぼれそうだ。

「もう舐めるのはいいわ。それより、早く入れて」

はちきれそうな勃起を目にしたとたん、情欲のうねりが腰の奥から突き上げてきて、元からゆるい理性のタガが外れそうになる。おねだりのとき、思わず口から出そうになった「チンポ」や「オ○○コ」などの下品な単語を抑えるのがやっとの状態だ。

明生は無言でうなずくと、口の中に残っていた愛液と一緒に唾を飲みこんだ。汗ばんだ上体を起こし、ぬらつく口元を手の甲でぬぐう。膝立ちの姿勢で、これから自分がごちそうになる家庭教師の身体を見下ろしてから、それに覆いかぶさった。挿入への渴望は明生

も冴子と同じなようで、せっかちに腰を突き出してくる。だが、ペニスの先は狙いをそれて、愛液ですべったシャフトの裏が剥き出しのクリトリスをこすり上げた。

「あ、あれ……？」

明生はあわてて腰を引き、つづけて挿入にトライする。だが、豊富な潤滑液が仇になり、勃起はむなしいうわすべりをくり返した。

冴子はスリットめがけて闇雲に突きをくり出してくる少年に、
「ちよつと待って。少し落ち着いて」

この状況で落ち着けと言うのも無理な話だが、このままでは挿入を果たすことなく勃起が暴発しかねない。のしかかる胸板を手で押し返し、いったん身体を離してから、

「あたしの言うとおりにすれば、ちゃんと入るから」

冴子は逆V字形にした人差し指と中指の先を大陰唇にかけると、みずからの手で秘裂を大きくわり開いた。そして、もう一方の手を明生の股間に伸ばし、下腹に張りつく勃起をやさしくつかむ。根元に力のこもったシャフトの角度を調節し、生々しいぬめりを帯びた粘膜の杯の底で、ものほしそうにひくつく膣口に亀頭の先をあてがった。

「このまま、ゆっくり腰を突き出して」

言われたとおり、明生が腰を前に進める。亀頭が粘膜の狭間にはまりこむと、冴子はシ

ヤフトに添えていた手を離し、秘裂をひろげていた指を外した。まるく上がった先端で柔肉を搔き分けるようにして、肉茎は膣の奥へと進む。待ちかねていた異物の侵入に歓迎の意を表して、ぬめらかな膣壁が血管の浮いた勃起を締めつけてきた。まるで吸いこまれるようにペニスが貪欲なぬかるみに根元まで埋没すると、ふたりの股間が一部の隙なく密着する。

「あたしの中、どんな感じ？」

童貞喪失の感激が大きすぎるのか、お約束の質問にも、明生はすぐには返事ができないようだ。逆に冴子のほうが、ひさしぶりに味わうナマのペニスの感触に気を昂らせ、あらぬことを口走りそうになる。

チンポ……ビンビンのチンポ。年下のコの硬いチンポが、あたしのオ○○コに入ってる。あたしの中で、元気のいいチンポがセーエキ出たくってウズウズしてる。

大きさは愛用のバイブレーターに及ばないが、少年の初々しい勃起からは、作り物では決して得ることのできない熱い脈動が感じられた。冴子は、別の生き物の一部が体内で脈打つのに胸苦しいほどの興奮を覚えながら、

「ゆっくりでいいから、腰、動かして」

その指示に従って、明生が腰を上下に動かしはじめる。最初のうちは、ホールからペニ



スがすっぱ抜けるのを警戒してか、腰の動きは小刻みだった。だが、すぐに自分のシャフトの長さを身体で覚えたらしく、下半身のアクションがだんだん大きくなってくる。明生には元々セックスの才能があつたのか、見た目ほどには簡単でないピストン運動を楽々とこなすところは、挿入にあればど手間どつたのが嘘のようだ。

あら、けっこううまいじゃない。

冴子は初めてにしてはテンポのいい明生の腰づかいにうれしい驚きを感じつつ、腰の奥から背骨に沿ってうねり上がってくる快感に身をくねらせた。それに、律動する少年の細腰から伝わる小刻みな震動が加わり、やわらかな胸のふくらみが落ち着きなく揺れる。淫らな興奮で冴子の目元はピンクに染まり、髪の毛の生え際にはうっすらと汗がにじんでいた。

本能の導くまま、明生は腰の動きを加速させ、火照つたぬかるみを突きまくる。この調子なら、家庭教師が次のレッスンを施す必要は、もうないだろう。こわばりが雁首のきわまで引き抜かれると、膣内の空気圧が下がり、粘膜の吸いつく力が強くなる。すると、それに引き戻されるように、じゅぷうと下品な音をさせながら、反ったシャフトが根元まで深く突き入れられる。

Tシャツを汗で背中に張りつかせた明生は、自転車のペダルを踏むような力強いテンポで抽送をくり返しながら、

「センセのオ〇〇コ、すっごい気持ちいいよ。ぬるぬるン中にチンポが全部入っちゃって、それ抜こうとするとギュウツて締めつけてきて……」

少年のあられもない言葉につられ、冴子も喉の奥にとどめていた恥語を、つい口にしてしまう。

「あたしも……あたしも、気持ちいいわ。チンポがオ〇〇コにずぶずぶって入ってきて、硬い先っぽが奥に当たって、それで……あッ、あッ、あッ……」

膣腔の突き当たりを強い力でえぐられて、後半は言葉にならなくなった。女体を揺さぶる波のうねりが大きくなり、白い巨乳が愛撫を誘うように躍る。明生はベッドについた片手で上半身を支えつつ、もう一方の手をアウトラインを一定させないバストに伸ばした。たふたふとしたふくらみをわしづかみにし、乱暴な手つきで揉みしだく。

「あぁん」

と、鼻にかかった声をあげると、冴子は「もつとして」というように胸をせり上げた。少し痛いぐらいの荒々しい愛撫が、飢えた牡に我が身を貪られて^{むさば}いることを強く実感させる。乳房を揉むため明生が少し身体を起こしたせいで、シャフトの進入角が微妙に変わった。ぬかるみに出入りをくり返す勃起の力りのでっぱりが、下腹の裏により強くこすりつけられる。膣腔とシャフトの角度の違いが生み出す快感に、冴子は大きく身をよじり、甲

高い声をほとばしらせた。

「いい……いいわ。もつと強く……もつと奥までチンポ突っこんでえ」

淫靡に蠢く肉壁が不躑な侵入者を搦め捕ろうとするのに逆らって、明生が肉茎の抜き差しの速度を上げる。すると冴子のほうも、より深い結合を求めて、打ちつけられる少年の股間を迎え撃つように下腹をせり上げた。ふたりの股間がぶつかりあうたびに、秘肉を貫く勃起の先端が子宮口をノックする。鋭角的に張り出した力りに掻き出されたシロップが明生の恥毛をも濡らし、ベッドカバーのシミは大きく広がって、おもらしをしたような有り様になっていた。

明生にとつてこれが初体験であることを考えれば、入れたとたん射精してもおかしくないのに、《ご褒美》という形で積み上げてきた秘密のレッスンの成果か、とてもそうだとは思えないほど抽送の回数を重ねている。だが、そうしたがんばりにも、さすがに限界が迫ってきたようだ。

明生は荒い息の下から切迫した声で、

「先生、もう出そうだよ」

秘裂を突き荒らす肉茎の性急なひくつきが、少年の言葉どおり射精が近いことを訴えている。

「センセの……センセのオ○○コに出していい？」

「ダメ」

と、にべもなく言ってから、冴子はあわててつけ足すように、

「中に出すのはいいけど、まだ出しちゃダメ。もう少し……もう少しがんばって」

最初のうちは、とりあえず挿入させて、それで射精すれば明生も満足するだろうから、下手に逆らうよりは言うとおりにして、さっさとすましてしまおう……ぐらいの気持ちだったのに、熱心なクンニリングスで官能の火を点けられた女体は、悦楽の極みに到達しなければおさまりがつかないとこゝろにまで追いこまれていた。

「センセッ、もう……もう……」

明生は齒を喰いしばって、欲望の噴出を必死にこらえていたが、もうこれ以上は無理なようだ。

「いいわ、出して。オ○○コの中にセーエキぶちまけてッ！」

冴子の口からお許しの言葉が出ると、明生は大きく腰を引き、ぬかるみに最後のひと突きを叩きこむ。深々と突き入れられた勃起の先端が子宮口にめりこんだ。

「はひッ！」

のけぞった冴子の顎が天井を指し、秘裂がずっぷりと啞えこんだこわばりを締め上げる。

「あ、出るッ！」

尿道を走る熱い矢が鈴口から放たれると同時に、巨乳をつかむ手に力が入り、明生は白いふくらみにきつく指を立てた。手のひらからはみ出る乳房を握り締めたまま、ガクガクと腰を痙攣させて、溜めに溜めていたスpermを撃ち尽くす。

出てる……あたしのオ○コの中に、セーエキいっぱい出てる。

膣腔のいちばん深いところに熱いほとばしりを浴びながら、冴子は少年の細腰をクロスさせた両足でしっかりと挟みこみ、絶頂への到達を告げる歓喜の叫びを長々と放った。

Lesson4

罌



「お兄ちゃんは、わたしのものよ」

「先生、少しお話が」

その日、いつもと同じ頃合いに高瀬家を訪れた冴子は、玄関で彼女を出迎えた千春にそう言われ、リビングルームに通された。そのソファには、冴子が来るのを待っていたように、スウェットパーカにミニスカート姿の梢が座っている。ふだんと違う対応に、一昨日、明生と身体を交えたことがバレたのではと、冴子は一瞬ギクリとしたが、梢が同席しているところを見ると、どうもそうではないようだ。心の中で胸を撫で下ろし、娘の隣に腰を降ろした千春の正面に座る。今日の冴子は、半袖のスクエアネックのセーターにカッターソーパンツという飾り気のないいでたちだ。

上品なデザインのブラウスと裾の長いスカートを身に着けた千春は、息子の家庭教師が自分の向かいに腰を落ち着けるのを待ってから、

「せっかく来ていただいたのにもうしわけないんですが、今日の授業、お休みさせていただけないでしょうか？」

「……と、言いますと？」

「じつは、明生、風邪を引いたみたいで、今、薬を飲んで眠ってるんです」

「風邪、ですか」

「はい」

千春はわずかに首をかしげると、白い頬に片手を当てて、

「昨日からあまり調子はよくなかったみたいなんですけど、今日、学校から帰ってきたら妙に赤い顔をしてたんで、熱を測って見たら……」

そういえば、冴子と身体を交えたあと、明生は汗に濡れたまま、下半身丸出しでベッドにひっくり返って初体験の余韻よゐんに浸っていたが、あれがよくなかったのかもしれない。今までのことがあるだけに、いい気味だと思う一方で、冴子はなぜか、生意気な弟を案ずるような気持ちにもなっていた。

「先生がこちらに来られる前にお知らせしようと思って、お宅のほうに電話したんですけど、いらっしやなくて」

そのころ、冴子はまだ大学に居て、大教室で退屈な授業を受けるふりをしていた。大学から直接ここに来たので、自分の部屋の留守番電話をたしかめてはいなかったし、千春には携帯電話の番号までは教えていなかったもので、連絡がつかなかったのもしかたがない。決して千春の落ち度だとは言えないだろう。

そっか、今日は授業ナシか。

本番までしてしまった以上、もはや恐れるものはなにもないと、居直りに近い心情で、今日この家を訪れた冴子は、ちよっと拍子抜けした気分だ。

「それじゃあ、今日は……」

このまま帰るしかない。無駄足になってしまったが、病氣とあれば仕様がな

「無駄足を踏ませてしまって、もうしわけありません」

「あ、いえ、別に……」

こちらの心中を見透かしたような千春の詫びように、冴子は少々ドギマギしつつ、

「風邪じゃ、しかたないですし」

「ほんとにすいません。こんなことなら、携帯のほうの番号もお聞きしておけばよかったですわ」

「いえ、わたしもそこまで気がまわらなくて」

などと当たり障りのない会話をしながら、腰を上げるきっかけをうかがっていた冴子に、千春がおずおずと切り出した。

「あのう、それで、じつはもうひとつご相談が」

「あ、はい、なんでしょう？」

会話から気がそれかけていた冴子は、あわてて居住まいを正す。

「明生の代わりというわけじゃないんですが……」

千春は隣で行儀よく膝を揃えて座っている梢にチラリと目をやって、

「このコが勉強でわからないところがあるから、先生に見てほしいって言うんですけど、もしよろしければ、少し教えてやっていただけませんか？」

「はあ、ですけど……」

思いがけない依頼に冴子が曖昧な返事をする、千春はそれをある種の催促ととったのか、

「あ、もちろん今日の分の授業料はちゃんとお支払いしますし、梢の勉強を見ていただく分は、それとは別に……」

この気前のいい申し出は、冴子にとっては願ってもないことだった。今日ここに来たことが無駄にならずにすんだうえ、余分のバイト代までもらえるという。冴子は卑しい喜びが面に出ないよう気をつけながら、

「なんの準備もしてませんが、それでよければ」

「ありがとうございます」

千春はひどく無理な願いを聞いてもらえでもしたように、喜色を浮かべた顔を娘のほうに向けた。

「よかったわね、梢」

「うん」

と、梢はうなずいてから、冴子に向かって頭を下げる。

「よろしくお願いします」

小さくて形のいい頭の動きに合わせ、その両脇に垂らされた髪の毛がふわりと揺れた。

「あとでお茶をお持ちしますわね」

と言う千春に、冴子は「おかまいなく」と言葉を返してから、先に立って階段を昇る梢を追って二階に上がる。梢の部屋に入るとき、冴子は隣の部屋の明生を見舞おうかとも思ったが、寝ているのを起こしたりしてはかわいそうだと考え、遠慮することにした。

「ハイ、どうぞ」

ドアを開けた梢に促され、冴子は彼女の部屋に足を踏み入れた。部屋の造りは明生の部屋とおおむね同じだ。だが、主が女のコだけあって、殺風景な兄の部屋とはずいぶん印象が違う。

壁際のシングルベッドには花柄のカバーがかけられ、その頭側にある作りつけの棚には片手でつかめるほどの小さなぬいぐるみがずらりと並んでいる。ベッドとは反対の壁際の机の上はきれいにカタづけられていて、そばの回転椅子の足元には通学用のリセバッグが置いてあった。フローリングの床には梢が充分寝そべれるほどの大きな円形のカーペットが敷かれ、窓際に置かれたふだんは踏み台がわりにしているしつかりとした造りの木製

の椅子には、のんきな顔のデイベアがちょこんと腰かけている。

度を越さないかわいらしきで彩られた室内の様子を自分の部屋の散らかりようと比べた冴子は、ここ数年のあいだに自分が急速に失っていったなにかを見せつけられたようで、少しばかりイヤな気持ちになった。机の横の本棚に目をやると、そこにはヤングアダルトと総称される中高生向けの文庫本とコミックスが半々ぐらいの割合で収められている。コミックスのタイトルは冴子の知らないものばかりだが、背表紙のデザインは彼女が稍ぐらいの年頃に馴れ親しんだのと同じレベルのもので、かつては少女だった女子大生に、今の時の女のコとて決して宇宙人ではないのだという感を抱かせた。

冴子が本棚を見ているあいだに梢は木製の椅子からデイベアをどけ、それを机のそばに持ってきて家庭教師の席を用意する。

「先生はここに座ってください」

冴子が椅子に腰かけると、梢はその横の回転椅子に座って、机の上にノートを広げた。ノートには授業の内容がきっちりと整理されていて、それを見ただけで少女の頭のよさうかがえる。特定の目標がなければ発奮しない兄と違って、妹のほうはふだんからよく勉強しているようだ。

わからないところといつてもたいしたことはないだろうとタカをくくっていた冴子は、

もし、答えられないほど難しい質問をされたらと、ちよつと不安になつてきた。なにしろ、家庭教師の名目でこの家を訪れてはいるものの、実際はそれらしいことをほとんどしていないのだ。だが、梢の質問は、誰もがつまずくちよつとした引っかかりといった程度で、怠惰なキャンパスライフで錆びついた頭でもなんとか対応できるレベルのものだった。

これなら楽勝ね。

素直な生徒、楽な頭脳労働、そして破格の報酬。まさしくこれは、家庭教師をしないかと持ちかけられたとき頭に思い描いた「おいしいバイト」そのものだ。こうなるのなら、明生がずっと風邪を引いたままならいいのに……と、ひどいことを考えながら、冴子は鼻歌が出そうな順調さで、臨時の家庭教師役を務めていた。

ふたりが二階に上がってから一時間ばかりがすぎたとき、部屋のドアが軽くノックされた。身軽に立ち上がった梢がドアを開けると、四角い盆を持った千春が中に入ってくる。盆には紅茶のカップとケーキの皿が載っていた。

「どう？ お勉強、はかどつてる？」

千春は梢にそう言いながら、あぶなげのない所作で盆を円形のカーペットの中心に置く。

「先生、お茶、ここに置いておきますわね」

「あ、すいません」

千春は二言三言、冴子と言葉を交わすと、戸口でていねいに頭を下げてから部屋を出て行った。休憩^{きゆうけい}するにはちょうどいい頃合いだし、紅茶が冷めてもいいけないので、冴子はひと息入れることにする。

「それじゃあ、ちよつと休憩しましょうか」

「はい」

冴子は盆をあいだに挟んで、梢と向き合うようにカーペットの上に腰を降ろした。カップを口元に運ぶと、湯気と一緒に立ちのぼる紅茶の香りが鼻腔を満たす。皿に載っているのは、甘い物好きのOLのあいだで人気の老舗^{しにせ}『ヴァンダイン』のチョコレートケーキだ。冴子は細い銀のフォークでケーキの一角を切りくずし、茶色いかけらを口に運んでは、舌の上に広がる上品な甘さを楽しんだ。

しばらくは、そうしたなごやかなお茶の時間がつづいた。やがて、冴子よりひと足先にケーキをたいらげてしまうと、梢は皿とカップを下に置き、

「ね、センセ」

「なあに？」

と返事をしてから、冴子は舌に残ったケーキの甘さを洗い流そうと、カップを口元に運び、香り高い紅茶を含む。

「先生、一昨日^{おととい}、お兄ちゃんとエッチしてたでしょ」

投げかけられた言葉のもたらす衝撃があまりにも強く、冴子は口に含んだ紅茶を吹き出しそうになった。それをなんとか飲み下し、驚愕でいっぱいに見開いた目を正面の梢に向ける。頭の中が真っ白で、どんな言葉も出てこない。ショックで手にしていたカップを落とさなかったのが不思議なくらいだ。

「お兄ちゃんの部屋ってね、キッチンの真上にあるの」

血管に凝固剤^{ぎようこざい}を注入されでもしたように固まっている冴子を、おもしろがるような目で見ながら、梢は淡々^{たんたん}とした口調で、

「晩ご飯の用意してたら上からヘンな声がしたから、わたし気になって、二階に上がってお兄ちゃんの部屋のドアを開けて、隙間から中を覗いてみたの。そしたら……」

そこから先は言われなくてもわかる。梢は見たのだ。自分の兄が家庭教師の女子大生と痴戯^{ちぎ}に耽^かつているところを。それも、声が階下に漏れるほど大きくなっていたところだから、かなりクライマックスに近い激しい場面を目にしたに違いない。そんな恥ずかしいところを覗かれていたとは、快樂の虜^こになっていた冴子はまったく気づかなかった。いったん、《エロモード》に入ってしまうと、まわりのことはいっさい目には入らなくなってしまう。淫^ひらな自分がうらめしい。

なにもかもおしまいだわ。

最初の衝撃が薄れると、それに代わって深い絶望が訪れた。目の前が真っ暗になり、リッチでゴージャスなバカンスの夢が粉々に砕け散る。しかし、甘い夢を手に入れるためにしかたなくしたことが、結果として、それを失う決定打になってしまふとは、なんという皮肉だろう。もし、今、目の前に運命を司る神様がいたら、ハイヒールの踵で足の小指をいやというほど踏んづけてやりたい。

明生とのが千春の耳に入ったら、家庭教師は当然クビになるだろうし、バイト代もまずもらえないだろう。それどころか、かわいい息子を傷物(?)にされた千春が逆上し、しかるべき筋に訴え出たりしようものなら、冴子はその日から、良識ぶった社会から指弾を受けることになる。「欲求不満の美人女子大生、家庭教師先の教え子をつまみ喰い」、「美貌の家庭教師、男子生徒に秘密のレッスン」、「援助交際は、もう卒業? わたしのチヨ―淫らなアルバイト、過激な実態大告白」、「妹は見た! ショック、お兄ちゃんはどうしてオトナになった」……電車の中吊り広告をにぎわすであろう、週刊誌のセンサーショナルな見出しが頭の中を駆けめぐる。だが、この期に及んでも、冴子は自分を指す「女子大生」や「家庭教師」の頭に、無意識のうちに「美人」だの「美貌の」だのとつけていた。バカなのか胆が太いのか、おそらくはその両方だろう。

すでに事態は、ちよろいバイトで稼いだカネで、海外旅行としゃれこもうという目論みが粉碎ふんさいされただけではなくっていた。自分と明生の「特別授業」が千春の耳に入るのを、なんとしても防がねばならない。

「こ、梢ちゃん」

無理もないが、冴子は声がわずかに震えている。

「そ、そのこと、もう、お母さんに言ったの？」

「ううん」

と、梢は首を横にふる。それはそうだろう。もし、彼女がそのことをすでに告げていれば、千春の態度があんな穏やかなものであるはずがない。現状が、まだ最悪の事態には至っていないことを確認すると、冴子は手を合わせんばかりの様相で、

「ね、お願い。そのこと……一昨日のことは、お母さんには言わないで」

「えッ、でも……」

と言ったきり、梢は目線を落として口ごもる。どうやら、偶然、手にした重大な情報を、どう扱えばいいのか決めかねているようだ。考えてみれば、あんな一大事をすぐさま母親に報告せずに、こうして冴子本人に現場を目撃した事実を告げたところからも、そのことがうかがえる。そこに一条の光明を見いだした冴子は、それがどんな意味を持つか、さし

て深く考えもせず、してはいけない約束を口にした。

「そうしてくれたら、あたし、梢ちゃんの言うことなんでも聞くから」

「そう、なんでも言うこと聞いてくれるんだ……」

小さくつぶやく梢の両目がすうツと細くなり、危険な光が宿された。もし、彼女の頭の中を覗くことができたなら、その黒板には「飛んで火に入る夏の虫」と書かれていただろう。

梢は、まるで紅茶に砂糖を入れてくれと頼むような口調で、

「それじゃあ、先生。服脱いで、裸になつて」

突きつけられた要求があまりにも突拍子とつぴようしもないことだったので、冴子は一瞬、なにを言われたのかわからなかった。

「どうしたの？ 聞こえなかったの？」

梢の言葉の内容を理解すると同時に、怒りと羞恥で冴子の頬に朱しゆが差した。

「い……イヤよ。そんなのできないわ」

「どうして？」

「どうして……」

絶句した冴子を、梢はからかうように、

「お兄ちゃんとはセックスまでしたんだから、妹のわたしの前で裸になるくらいなんでもないはずよ」

よくわからない理屈だが、妙に説得力があるような気もする。

「どうしたの？ 早く脱いでよ」

と催促してから、梢は余裕の表情でとどめを刺した。

「それとも、お兄ちゃんとのこと、ママに言ってもいいの？」

かわいい顔には似合わない脅迫めいた言葉に、冴子は奥歯を噛み締める。梢に絶対的な弱みを握られている以上、今の彼女はどんな理不尽な要求であれ、吞まざるをえない。しばらくのあいだ、冴子は吞み下しがたい要求が本当に喉に引つかかっているような顔で、じっと座っていた。とつちらかった頭の中で懸命に、この窮状を切り抜ける方策を検討してみるが、けっきょく出てきた答えは「全面降伏」の四文字だった。いつもならよいなことをささやきかけてくる手のひらサイズの天使と悪魔も、打つ手がないのを宣言するよう
に居留守を決めこんでいる。

聞こえないほどわずかなため息とともに、ずっと引き結ばれていた冴子の唇が、ふつとゆるんだ。口元には、あきらめの感情が色濃くにじんでいる。ひとつしかない選択肢を
渋々選ぶと、冴子はその場に立ち上がり、半袖のセーターを思い切りよく脱ぎ捨てた。白

いFカップのブラジャーに捧げ持たれた九十センチオーバーのバストをあらわにすると、カットソーパンツのウエストをしぼる細いベルトのバックルに手をかける。

そうやって服を脱ぐ冴子の頭の中は、いったい、なんであたしがこんな目に……という思いで満たされていた。最初は友人からまわってきた、おいしいアルバイトを引き受けただけのはずだった。それが、どこで歯車が狂ったのか、家庭教師先の少年の妹の前で裸体をさらすハメになっている。どこをどうすればこんな展開になるのか、誰か教えてほしい。本当なら、床にひっくりかえって手足をバタバタさせたいところだが、今はひたすら忍の一字で、この場を切り抜けねばならない。リッチでゴージャスなバカンスへの夢をつなぐか、淫乱女子大生とうしろ指を差されることになるか、すべては梢の気持ちひとつにかかっているのだ。

カットソーパンツから足を抜き、パンティストッキングを脱ぐと、冴子はブラジャーとショーツだけの姿になった。

これぐらいで勘弁してくれないかしら。

そう思って、座ったままこちらを見上げている梢の様子をうかがうが、少女の目つきはいたって冷ややかだった。どうやら、かわいそうに思っれんびんて、ここで許してくれるというの
はなさそうだ。考えてみれば、今時の女の口に憐憫れんびんの情なぞあるはずがない。無駄な期待

はやめて、ブラジャーを外し、ショーツを脱ぐ。これで、冴子の身体を覆うものはなにひとつなくなつた。右の手のひらを股間の繁みにかぶせ、もう一方の腕は自分の肩を抱くようにして胸を隠している。いや、隠そうとはしているが、細い片腕一本で大きな乳房すべてを覆えるはずもなく、ふくらみの大半は腕からはみ出していた。彼女の腕にいだかれた双球は両側から寄せられたため、本人の意図に反して、視線を誘うように魅力的な谷間をより深くしている。

「ぬ……脱いだわよ」

わざわざ言わなくてもわかることをあえて口にすると、冴子は梢を睨むように見た。しかし、少女は平然とそれを見返し、次の指示を出す。

「じゃあ、そのベッドに座って」

冴子は言われるまま、ベッドの端に腰を降ろした。隠しきれない乳房を胸に抱き、ぴつたりと閉じ合わせた腿のつけ根に手を置いて、そこが不躰な視線にさらされることを防いでいる。梢は立ち上がると、回転椅子をベッドのほうに向け、そこに座った。向き合った冴子との距離は一メートルもない。梢はこの特等席で、臨時家庭教師の女子大生の裸体を鑑賞するつもりのようなのだ。

「手をどけて」



と言われて、冴子は乳房を抱いていた腕を降ろした。腕の中から解放されて、重たげな巨乳がたぷんと揺れる。

「下のもよ」

さすがに少しためらってから、冴子は股間の繁みを隠していた手をどけた。梢は値踏みするような目で、冴子の全身をジロジロと見る。

「おっきな胸……」

と、あきれたようにつぶやくと、少女はたつぷりとしたふくらみにストレートな^{やゆ}擲揄をぶつけた。

「まるで牛みたいね」

^{あざけ}嘲るような口調の底に、憎しみに近い感情がこめられている。梢は同じ年頃の少女と比べても小柄なほうで、その体格に合わせたように胸のふくらみも控えめだ。手のひらの中にすっぽりと収まりそうなささやかなバストは、ノーブラで走っても揺れることはないだろう。そうした発展途上の身体に対するコンプレックスが、これでもかと言わんばかりの巨乳に、ある種の敵意を抱かせているようだ。

それからしばらくのあいだ、梢は無言で冴子の裸身を見つめていた。なんとも言えない気まずい沈黙が、部屋の空気を支配する。距離が近すぎるせいで、かえって冴子には、梢

の視線が自分の身体のどこに向けられているのか、はつきりとはわからない。なにをされるでもなく、ただこうやって見られていると、今になって、どうして梢が自分にこんなことをさせるのか、そして、これからどうなるのかと、様々な疑問と不安が湧いてくる。裸を見られる恥ずかしさより、こうした不安定な状態に置かれつづけることが精神的にはつらい。意図の読めない目で見られるということが、こんなにも苦痛だとは思わなかった。これなら、男から性欲剥き出しの視線を浴びせられるほうがよっぽどマシだ。なぜなら、それには飢えはあっても蔑みはないからだ。

とうとう冴子は、無言の鑑賞がもたらす居心地の悪さに耐えかねて、
「もう……もう、いいでしょ？」

この時点でも、彼女はまだ、梢のことを甘く見ていたのかもしれない。しよせん相手は年下の女のコ、まさか、これ以上の屈辱を味わわされることはないだろうと。しかし、梢は可憐な少女の皮をかぶった小悪魔だった。それも、ときおり、冴子の肩口に現れてよいいな耳打ちをするマヌケなヤツではなく、狡猾で残酷な本物の小悪魔だ。

「いいわけないでしょ」

と、冷たく言って、梢は口元に薄い笑みを浮かべる。

「でも、これ以上、どうしろってゆーの？」

「そおーねえ……」

手に入れた獲物をどうやっていたぶるか、その方策はすでに立っているだろうに、氣を持たせるように少し考えるふりをしてから、

「それじゃあ、足を開いてもらおうかしら」

不用意な発言で事態を悪いほうへと進めてしまったことを後悔しながら、冴子は股を開こうとした。だが、ぴったりと閉じ合わされた腿は、見えない手で押さえつけられているみたいに言うことを聞かない。脚を開こうとすると、股関節がきしみ音でも立てそうなほどの抵抗があり、まるで自分のものではないようだ。それでもなんとか苦勞して、ようやく左右の膝のあいだに拳ひとつ分ほどの隙間ができた。もちろん、梢がそれで満足するはずもなく、さらなる開脚を要求する。

「もつとよ」

冴子は脚に力を入れて、膝と膝のあいだに張られた羞恥という名の見えない鎖くさりを引きちぎり、思い切って股を開いた。脚を閉じていたときは少し前に出ていた左右の膝の外側がベッドの側面に接し、いわゆる大股開きの格好になる。濃い繁みに飾られた秘裂が、梢の目にさらされた。彼女はそこに目線すを据えたまま、

「それから、オ○○コもひろげてみせて」

ストレートすぎる表現に、冴子は耳まで真っ赤になる。卑猥な四文字言葉を聞かされただけで頬を赤らめるほどウブではないつもりだったが、それがルージューよりもケーキの似合う少女の唇から出ると、不思議なほど強い恥ずかしさがあった。

とまどいを隠せない冴子に向けて、梢はいらだたしげに、

「聞こえなかったの？ オ○○コひろげてって言ったのよ」

ここまできたら、股を開くのもマ○○コを開くのも一緒だという開き直った気持ちで、冴子は自分の股間に右手を伸ばす。そして、逆V字形にした人差し指と中指で、わずかにほころぶスリットを大きくわりひろげた。剥き出しにされた粘膜の狭間に、突き刺すような視線が注がれる。

「へえー、案外きれいな色してるわね。ヤリマンだから、もっと汚いかと思ってたわ」

虫も殺さぬような可憐な顔をしているだけに、梢の口から出る嘲りの言葉は冴子の怒りを激しく掻き立てた。こんな状況でなければ、手形がつくほど強く頬をひっぱたいてやりたいほどだ。だいたい、なんの根拠があつて「ヤリマン」だと決めつけるのか。否定はしないが、いくらなんでも面と向かつて言うのは失礼だろう。

しかし、どれほど腹が立っても、今の冴子はそれをあらわにすることはできない。ここで梢に逆らうことは、これまでの我慢を水の泡にしたうえ、新たなリスクまで背負いこむ

ことを意味している。この状況で彼女にできるのは、ただひたすら耐えることだけだ。

みずからの指でひらかれた秘裂は剥き出された粘膜がいびつな菱形を成し、その狭間から濃厚な牝の匂いが立ちのぼってきそうなほど淫らな様相を呈^{てい}していた。そこに向けられた梢の目は、汚いものを見るような冷やかさに満ちており、冴子を、幼いころ、幼稚園のみんなの前でおもらしをしてしまったときのような、いたたまれない気持ちにさせる。

「それじゃあ、次はオナニーしてみせて」

完全に開き直ったつもりの冴子も、さすがにこれには驚いた。

「え……」

と絶句したきり、今、聞いたのがなにかの間違ひではないのかというような目で、正面に座る少女の顔を見る。

「早くしてよ。まさか、やり方がわからないってゆーんじゃないわよね？」

もちろん、やり方はよくわかっている。だが、梢の見ている前で自慰に耽^{たふ}ることは、清水の舞台でストリップをするようなもので、生半可な覚悟でできるものではなかった。もしこれが梢のような少女ではなく、男に強制されたのであれば、こうまで抵抗はなかったかもしれない。なぜなら、牝の前で痴態^{ちたい}をさらすことは恥ずかしいことであると同時に、誘惑や牝の魅力のアピールでもあるからだ。自分ひとりがはしたなく身悶えする姿をよ

だれを垂らして見られるならまだしも、冷たい蔑みの目で見られることは、到底耐えがたい屈辱だ。だが、たとえそうであっても、それが梢の口から出た以上、今は黙ってそれに従うしかない。

冴子は秘裂をひろげていた指を大陰唇から外した。花がしばむように閉じ合わさったわれめは、指でずっとひろげられていたためか、さつきよりもほころびの度合いがわずかに増していた。秘裂から離れた指をあらためてそこに伸ばしたが、あと数ミリではみ出した粘膜にふれるというところで、指先は凍りついたように動きを止める。

ダメ、やっぱりできない。

不思議だった。ふだんやり慣れているはずのことが、梢の前だとどうしてもできない。

覚悟は決めたはずなのに、身体のほうが言うことを聞いてくれないのだ。

「しょうがないわね」

いつまでも決心のつかない冴子の態度にじれったくなつたのか、梢はわざとらしくため息をつく。

「自分でできないんなら、わたしがしてあげるわ」

でも、自分でしなきゃ自慰オナニにならないんじゃない……。

この場にそぐわない、どうでもいい疑問が冴子の胸に湧く。だが、今はもちろん、そん

なことを質^{ただ}している場合ではない。

梢は椅子から立ち上がると、冴子の足元にひざまずいた。どうやらさっきの言葉は、自慰を促すための脅しではなく、本当に、動かない冴子の指の代わりを務めるつもりのだ。梢の手が剥き出しの股間に伸ばされると、冴子は反射的に腿を閉じかけた。だが、それを少女の鋭い目つきが制す。

「抵抗するの？」

ほんのわずかな睨み合い。しかし、冴子はすぐに、ここで逆らうことの不利を悟^{さと}って脚から力を抜いた。元どおり大股開きになった脚のつけ根に、梢が当然のような顔で右手を伸ばす。

あ、さわられる。

自分の股間を見下ろす冴子の身体に緊張が走った。一本だけ伸ばされた少女の人差し指が、スリットを下から上に、すうツとなぞる。

「ン……」

ふれるかふれないかの微妙なタッチにゾクリとし、冴子は唇を噛み締めた。不快なだけではなさそうな反応を見て、梢の口元に薄笑いが浮かぶ。彼女はわずかに力をこめた指先で、ぱつくりと縦に割れた秘裂を上下になぞりはじめた。第一関節まで喰いこんだ人差し

指と、敏感な粘膜の接触面から微弱な性電気が生じ、それが牙子を落ち着かなくさせる。恥丘が内側からじんわりと火照りだし、包皮の下に隠れたクリトリスに血液が集中してきた。

あたしったら、無理やりオ○コいじられて感じちゃってる。

自分の身体の中でもっともプライベートな部位をおもちゃにされる屈辱に耐える心がまへはできていたが、それから生じる快楽をこらえる準備はできていなかった。というか、それは、ふだんから隙あらば快楽を貪ろうとしている貪欲な女体には無理な相談だ。息が弾みそうになるのをこらえ、努めてなにも感じていない様子を装^{よそ}おうとするが、心と身体は別とばかりに、秘裂の奥から甘い疼きがこみ上げてくる。

ほどなくして、スリットの奥から透明なシロップがにじみ出してきた。指先を濡らす淫らなぬめりで、少し引つかかりのあった指の動きがスムーズになる。どんなに声を押し殺しても、これでは感じているのがまるわかりだ。できることなら漏れ出る愛液を止めたいが、こればかりは意志の力でどうにかなるものではない。

スリットにめりこんだ指先が上下に往復するにつれ、どんどんぬめりが増してくる。そしてついには、柔肉のほころびからあふれた愛液が、会陰部を伝ってヒップのほうにまで垂れてきた。その有り様を見て、梢はあきれたように、

「やあーねえ、ちよつとさわっただけで、もうこんなに濡らして」

自分の淫乱さを指摘されたようで、冴子は羞恥と屈辱で紅潮した頬をさらに赤らめた。こんなときでも淫らな刺激に素直に反応してしまう自分の身体がうらめしい。愛液の潤みが増すのに伴って、秘裂からわずかに漂いはじめた発情した牝の匂いに、梢が小さな鼻をひくつかせる。

「ヤダ、エッチくさあーい」

そして、その「エッチな匂い」を吹き払うつもりか、ふーッと息をかけてくる。

「あ……」

恥毛の繁みがわずかにそよぎ、冴子は身体を震わせた。少女の息に撫でられて、充血したクリトリスがフード状の包皮をキュツと持ち上げる。

「先生のオ○○コって、ほんと感じがやすいのね」

梢はからかうような口調で言うと、勃起して包皮の下から半分近く顔を出しているクリトリスに目をやった。

「クリちゃんも、もうピンピンになってるじゃない」

秘裂をなぞっていた人差し指がクリトリスに伸び、器用に包皮を剥き上げる。

「わあ、わたしのよりずっとおっきい」

梢は小指の先ほどの大きさにふくれた肉芽を見ると、ことさら大きな声で、

「ふだんから、よっぽどいじりまくってるのね」

否定できない事実を指摘され、冴子は下唇を噛み締める。梢は指先を濡らす愛液を塗りつけるようにして、剥き出しのクリトリスを嬲りはじめた。

「ンッ」

敏感な突起から快樂のパルスが打ちこまれ、冴子はさつきとは違う理由で唇を噛む。愛液を塗りたいくられたクリトリスは淫らな艶を増し、はりつめた表皮から透ける血の色をさらに濃くしていた。梢の指はクリトリスをくすぐっていたかと思うとふたたび秘裂をなぞり、すぐまた、刺激を求めて疼く肉芽に戻る。まるで、花のまわりを舞うミツバチのように、いつときも落ち着くことがない。

オナニーという言葉すら知らなそうな可憐な見た目を裏切る巧みな指づかいから、梢にはかなりの自慰経験がうかがえる。ただ、少女の指は、これまでの不躰なふるまいに似ず、われめの外側をいじるばかりで、粘膜の狭間に分け入っては来ない。冴子にしてみれば、フルコースの前菜ばかりを供されているようで、だんだんじれつたくなってきた。だが、脅迫され辱められている立場の人間としては、自分のほうからはしたないおねだりをすることはできない。屈辱的なシチュエーションの中、羞恥にさいなまれる心を置き去りにし

て、身体だけが勝手に高まってゆく。

「先生のクリちゃん、もう破裂しそう。こんなにおつきいと、ショーツの上からでも勃起してるのがわかつちゃうわね。ね、自分でオナツてるときも、こうなっちゃうの？」

梢は冴子の心と身体の乖離かいりを促進するように、羞恥を煽る言葉をかけながら、潤んだ秘裂をしつこく廻る。愛液の分泌が激しくなると、冴子のスリットは腹をすかせた牝犬のようによだれを垂らし、清潔なベッドカバーに淫らなシミをひろげた。もし、「下の口」がしゃべれたら、愛液だけでなく、はしたないおねだりもこぼしていたに違いない。

「あーあ、おツユ、こんなに垂らしちゃって。ほんと、エッチなお〇〇コね」

とろとろとあふれる蜜のしたたりに導かれるように、梢は右手の中指をわれめの内側に浅くくぐらせて、潤みの源である膣口に指先をあてがった。挿入への期待で、冴子は身体を堅くする。

「先生、オ〇〇コの入り口がヒクヒクしてるわよ」

梢は膣口の縁を指先でゆつくりとなぞりながら、

「なんでもいいから、入れてほしくってたまらないってカンジね」

本当にそうだけに、冴子には返す言葉がない。梢は指先を膣口にあてがったまま、フアックサインをするように中指をまっすぐ伸ばした。そして、太いこわばりに貫つらぬかれたく

てうずうずしているぬかるみにゆつくりと挿し入れる。指が進むのに合わせて、薄く開いた冴子の唇から甘い響きの吐息が漏れた。

「ああ……」

ほとんどなんの抵抗もなく、梢の中指は柔肉の中に埋没してしまう。彼女はそこからさらに力をこめて、指をグイッと突き入れた。

「んふあッ！」

膣腔の奥を強く突かれて、冴子の口からたまらず声が出る。指一本とは言うものの、さんざんおあずけを喰わされたあとだけに、異物の侵入によって得られる快感は、ひときわ大きなものだった。飢えた秘裂は根元まで咥えこんだ指を逃すまいと、無意識のうちにきつく締めつける。梢はそれに逆らって、深く挿入した指で熱く潤んだぬかるみの中を探った。そして、肉壁の淫らな蠢きや膣壁のぬめらかさを指全体で感じながら、

「ここにお兄ちゃんのおちんちんが入ったのね」

まさか、「そうです」とも言えず、冴子はその質問をやりすごそうとするように目を伏せた。だが、梢は、そんな彼女の顔を見上げ、不躰な問を重ねる。

「お兄ちゃんのおちんちん、どうだった？ オ○○コに突っこまれて気持ちよかった？」
直截すぎる質問に冴子が答えられないでいると、梢はひとりうなずいて、

「そうよね。きつと、気持ちよかったわよね。でなきや、あんなにエッチな声出さないもんね」

そう言う少女の声音には、隠しようのない嫉妬しつとがにじんでいた。どうやら梢は、兄の明生を、自分よりずっと性的魅力に富む女子大生にとられたと思っていたようだ。そうと察した冴子は、彼女がこうしたふるまいに及んだ動機的一端がわかったような気がした。だが、もしこれがブラザー・コンプレックスから発したある種の報復ならば、とんだお門違いだ。梢はどう思っているか知らないが、明生とのセックスはバイト代のために、やむなくしたことである。しかし、ああして盛大によがるところを見られてしまったては、どんな言いわけも通用しそうにない。なにを言っても、今以上に梢の暗い怒りを煽る結果になるような気がする。

にゅぷッ・にゅぷッ・にゅぷッ……。

梢は秘裂にくぐらせた中指をゆっくりと出し入れさせはじめた。ピンと伸びた指が深く突き入れられるたびに、膣腔の奥に蓄えられていた濃いシロップが居場所を奪われ、あふれ出る。梢は単純に指を出し入れさせるだけでなく、ときおり、ねっとりとからみつく肉襞をくすぐったり、指先で下腹の裏を軽く引っ搔いたりもした。たっぷりの潤滑液に促され、指の動きを速めてゆくかと思うと、不意に抽送の速度を落とし、冴子の眉間にじれた

色が浮かぶと、またテンポを上げる。いったいどこで覚えたのか、とても年下の少女のものとは思えない巧みな指づかいだ。

ツボを心得た愛撫の生み出す快感で、冴子は上体を起こしているのがつらくなってきた。腰のうしろに両手をついて、それで背後に倒した身体を支える。だが、そうしてリラックした姿勢をとると、窮屈さで減殺されていた分の悦びまでもが身内を駆けめぐり、今度はじつとしていられなくなってきた。唇を引き結び、浅ましい声が漏れるのだけはなんとかこらえているが、もじもじと落ち着きのないヒップはシミのできたベッドカバーに皺を寄せ、少しでも気を抜くと、下腹がより強い刺激を求めて勝手に前に出ようとする。クリトリスは暗闇で光を放つのではないかと思えるほど鮮やかなピンクに染まり、強くつまめば、ザクロの身の粒のようにあえなく破裂しそうだ。今や、年下の少女に全裸で嬲られるという屈辱も、熱く火照った身体をさらに昂らせるスパイスでしかなかった。

ちゅぷちゅぷちゅぷ……。

いつしか、秘裂を侵す中指は、あふれる愛液が泡立つほどの勢いで激しく出し入れされている。豊富な潤滑液の助けを借りて、そのまま速度を増してゆくかに思えたが、梢は不意に指の動きを止めて、それを秘裂から引き抜いた。

「あッ……」

冴子の唇がほどけ、手にしたお菓子をとり上げられた子供のような声が出る。しかし、すぐに梢は透明な粘液にまみれた中指に人差し指を加え、まっすぐ揃えた二本の指を掻き乱された秘裂に挿入した。貪欲なぬかるみは、太さが倍になった侵入者を強い締めつけで歓迎する。するとそれに応えるように、根元まで挿し入れられた人差し指と中指が、潤みきった柔肉の中で活発に動きはじめた。

二本に増えた指は太さが倍になっただけでなく、一本のときよりもずっと多彩な愛撫を施してくる。梢はきつい締めつけに逆らって、二本の指をバタ足をするように動かしたかと思うと、Vサインを出して膣腔の奥をひろげ、さらにはグリグリと左右にねじりながらぬかるみに深く突き入れた。

「あッ……ン……んくッ」

もはや、声を抑えることができなくなったのか、冴子の口から断続的なあえぎが漏れる。彼女の額はうっすら汗に濡れ、そこにほつれた髪がへばりついていていた。乳首は見えない指でつままれたようにとがって上を向き、身悶えするのに合わせて巨乳が揺れる。入り口付近をまさぐる指先で、俗に言うGスポットをこすられると、冴子は顎のラインで切り揃えた黒髪を激しく揺らせてのけぞった。

「はひッ！」

白い喉が無防備にさらけ出され、豊かな乳房が大きく弾む。体内に棲む牝を戒めていた理性のタガは今にも外れそうで、それを証明するように秘裂から漂う淫らな匂いも強くなっていた。そして梢もまた、抵抗できない冴子を齧ること嗜虐的な興奮を感じているのか、目元を淡いピンクに染めている。おそらくは、Aカップのブラジャーの下で小さな乳首を勃起させ、幼いスリットに蜜をにじませているに違いない。

疲れを知らぬ梢の指が、卑猥な粘着音をたてながら潤みの源を熱心に責めつづける。だが、いかに多彩な動きをすればいい、極太のバイブレーターを愛用している冴子にとって、少女の細い指はあまりにも物足りないものだった。二本の指を駆使してのテクニカルな愛撫もメインディッシュへの期待を煽るばかりで、貪欲な秘裂の飢えを満たしてくれそうにない。それでも、このまま指での愛撫をつづけられれば、絶頂に達しはするだろう。だがそれは、ステーキハウスに入ってポータージュースとコーヒーだけ飲んで店を出るような、充足感に乏しいものに違いない。今、冴子が欲しているのは、まさしく、小手先の愛撫ではなく、ボリキュムと硬さを兼ね備えたモノの侵入だった。ひと言で言えば、「チンポがほしい」ということになる。

「どうしたの、先生？ イキたいんだったら、このままイッてもいいのよ」

梢は秘裂に指を出し入れさせながら、ハアハアと息を弾ませている冴子の顔を見上げた。

「それとも、もっと大きいのがほしいの？」

こちらの心中を見透かしたような問いかけに、冴子は思わずうなずきそうになる。だが、わずかに残った理性とプライドが、そうすることをためらわせた。本来なら屈辱だけを感じなければならぬ仕打ちで、こんなにも秘^ひ芯^{しん}を濡らしていることだけでも恥ずかしいのに、このうえはしたくないおねだりまでしてしまつては浅ましいにもほどがある。

「ね、センス、ホントにこのままでいいの？ 指だけじゃ我慢できないんじゃないの？」
梢は小悪魔の本領を発揮して、甘い誘いをささやいてくる。

「どうしてほしいのかちゃんと言わないんなら、もうやめちゃうわよ」

その言葉が脅しでないのを教えるように、ぬかるみを侵す指の動きがスローダウンした。
「どうなの？ ここでやめてもいいの？」

「ま、待って！」

プライドという名の堤防はもろくもくずれ、必死に抑えていた欲望が一気にあふれ出す。

「やめないで、お願い」

「じゃあ、どうしてほしいのかちゃんと言うのね？」

「言うわ。だから、早く……」

「早く、なに？」

冴子は浅ましい要求を口にすることに異様な昂りを感じつつ、

「おっきいのを……もつと、大きいのを入れて」

「どこに入れてほしいの？」

と、梢の間は容赦がない。冴子は数瞬のためらいを見せたが、けっきょく、こみ上げる劣情に負けて、

「お、オ○○コに……オ○○コに入れて」

「『お願いします』は？」

「お……お願いします。あたしのオ○○コに、おっきいの入れてください」

このとき、切羽詰まった欲望に支配された冴子は、こわばりを持たない少女が、はしたないおねだりに応じてなにを入れるつもりなのかということに、思いをめぐらせる余裕はまったくなかった。

「いいわ」

と軽くうなずくと、梢は秘裂から指を引き抜いた。そして、愛液に濡れた指をふきもせず、その手を握って拳にする。

「それじゃあ、お望みどおりスゴイのを入れてあげる」

えッ、まさか？

きつく握られた拳を見た冴子の脳裏を不吉な予感がかすめた。それを裏づけるように親指を上にした拳が、だらしなくほころびたスリットに押し当てられる。梢の拳は小柄な体軀にふさわしいかわいいものだ。だが、それでも、締めつけのきついホールに挿入するに
は大きすぎる。

「ちよッ、ちよつとなにを……」

あせる冴子とは対照的に、梢はいたって涼しい顔で、

「だから言ったでしょ？ オ○○コにスゴイの入れてあげるって」

「無理よ、そんなの入りっこないわ」

梢は冴子の抗議を無視して、縦にした拳を無理やり秘裂にねじこんでゆく。

ぐにい……。

たつぷりの潤滑液と、事前に指でよくほぐしておいたせい、少女の小ぶりの拳はやわらかな肉の裂け目に半分ばかりめりこんだ。だが、そこが大変で、いかに伸縮性に富むホールでも、拳を吞みこむのはさすがに苦しいようだ。

「ホントに……ホントに無理だつてば」

無茶な挿入の試みに、冴子は眉根まゆねを寄せて苦悶くもんの表情をつくる。しかし、梢はむしろ、そうした冴子の苦痛に歪ゆがむ顔を愉たのしむように眺めつつ、秘裂にめりこませた拳に力をこめ

た。嗜虐の愉悦に酔った少女の髪の生え際にも、いつしか汗が浮いている。

「はッ……あッ……んッ」

じりじりとめりこむ拳でわれめを押しひろげられ、冴子が悪夢にうなされているようなうめきを漏らす。許容量を越える物体を無理やり頬ばらせられた膣口は、血の気を失うほど引き伸ばされていた。拳を握ることで肉の薄い手の甲に浮き上がった指のつけ根の関節が、入り口付近の括約筋に引っかかり、そこから先に進まない。もうひと息というところで、拳の侵入を阻む秘裂に痼癩を起こしたのか、梢は下唇に軽く歯を立てると、腕にひときわ強く力をこめた。

ずぶッ！

少女の拳で秘肉を貫かれ、冴子が甲高い悲鳴をあげる。

「ひあッ！」

いちばん幅のあるところが括約筋を通過すると、勢いのついた拳は膣腔の奥まで一気に突き入れられた。肘から先のほぼ半分が柔肉の中に埋没し、愛用の極太バイブレーターをうわまわるポリウムで膣内を圧迫する。突進してきた拳に子宮口を突かれて、冴子は一瞬息が止まった。

「どう？ オ○○コに、おっきいのぶちこまれた感想は？」

「あ……あ……あ……」

今までに味わったことのない衝撃で、冴子は言葉を返すこともできない。肉路を満たす圧迫感で、息をするのも苦しいらしい。括約筋のきつい締めつけをくぐり抜け、ここまで腕が入ったのが不思議なくらいだ。当然、膣内はギチギチで、スムーズな抽送はおろか、拳を動かすことも満足にできない。だが、梢がぬかるみの中で腕をねじっているうちに淫らなオイルがまわり、徐々に拳を動かせるようになってきた。

ずずッ……。

梢が力を入れて腕を引き、膣腔の中で拳を後退させる。子宮への圧迫が軽減されて、冴子がわずかに気をゆるめると、その瞬間を狙いすましていたように、肉路のなかばまで後退していた拳がふたたび奥へと突き入れられた。

「はひッ！」

子宮口に強烈なパンチを喰らって、冴子は息を詰まらせる。すると梢は、きつい締めつけをものともせず、乱暴に腕を動かして立てつづけにストレートを叩きこんできた。さらには肉路を進む拳の動きにひねりを加え、膣腔の奥を強くえぐる。

こんなの……こんなの初めて。とつても太くて、とつても硬くて、とつても……とつてもスゴイのがオ○○コの奥にぶちあたってくる。



女体の最深部への連打に耐え兼ねて、上体を支えていた腕がくずれ、冴子はそのまま背後に倒れこむ。そして、拳が子宮口を突くたびに大きく背をそらせ、仰向けになってもほとんど形をくずさない巨乳をダイナミックに揺らせた。汗ばんだ肌は湯上がりのようにピンクに染まり、汲めども尽きぬ愛液が梢の腕をぬめらせる。

「も……もうダメッ！」

息もつかせぬ猛攻に、さすがの冴子も音をあげた。

「それ以上やられたら、あたしのオ○○コ壊れちゃうッ！」

しかし梢は、むしろそれが望みだといわんばかりに、柔肉をえぐる拳の動きを休めようとはしない。それどころか、腕の抽送はさらに激しさを増し、勢いのついたストレートを秘裂の奥に喰らった冴子は、拳が身体の中を突き抜けて、口から出てくるのではないか思ったほどだ。彼女は今まで感じたことのない大きなうねりに翻弄ほんろうされて、完全に我を失っていた。身体の内ばん深いところに拳を打ちこまれるたびに、そこから脳天へと抜ける衝撃が苦痛なのか快感なのか、それすらわからない。切れ長の目尻には涙が溜まり、唇の端からはよだれが垂れて、左右の手は快樂の波に呑みこまれるのをおそれるように、ベツドカバーをわしづかみにしている。

「オ○○コに腕突っこまれてよがるなんて、とんだインランね」

浅ましく悶え狂っている冴子の秘裂を、梢は固く握った拳で容赦なく犯しながら、
「ん、どうしたの？ もう、イキそうなの？」

そう訊かれても、冴子は派手なよがり声をあげるだけで、まともな返答はできないよう
だ。だが、そうした乱れた反応が、図らずも梢の問への答えになっていた。

「イクなら、さっさとイッちやいなさいよ」

みずからの行為に酔った少女の語尾が、ヒステリックに跳ね上がる。

「ほら、早くッ！」

その言葉が発せられると同時に、大きく引かれた拳が今まで以上の強さでもって、秘裂
の奥に深々と打ちこまれた。

「——ッ！」

冴子の口から声にならない叫びがほとばしる。豊かな裸身がそり返り、膣壁がぐっぷり
と啜えこんだ梢の腕を血が止まるほどきつく締め上げた。全身がガクガクと痙攣するなか、
目の奥でフラッシュが焚かれ、頭の中が真っ白になる。かつてないほどの高みに昇り詰め
た冴子は、そこで気を失った。

Lesson5

誘惑



「先生って、ほんとかわいいわ」

その日、薄手のニットとタイトスカートを身に着けた冴子は、いつもより十分ばかり遅れて家庭教師先の高瀬家に到着した。胸の下までしかない低い門の前に立ち、門柱にとりつけられたインターホンのボタンを押そうとした指が、なにかに脅おびえたように動きを止める。

今日は、明生との秘密のレッスンを覗き見た梢におどされて、とても口では言えないような辱はずかしめを受けた日から土日を挟んだ月曜日。あんなことがあったあとだけに、こうして高瀬家を訪れるのは、正直言つて気が重い。握り固めた拳で冴子を犯おかしたあと、梢は失神から覚めた彼女に向かつて、「今日はこれぐらいにしといてあげるわ」と言った。それは、屈辱的なフィスト・ファックが兄を誘惑した（と梢は思いこんでいるようだ）家庭教師への怒りの発露はつろの幕開けであり、決してその終わりではないことを意味していた。そうすることで兄が責められるのを危惧きぐしているのか、梢は明生と冴子の関係を母親に告げる気はないようだ。だが、そのかわり、胸に燃え上がる暗い嫉妬の炎を冴子にぶつけてくるつもりらしい。

これ以上、梢を刺激しないためにも、できれば今日——そして、もちろんそれ以降も、明生と身体を交えることは避けた。だが、妙ななりゆきとはいえ、ああして最後の一線を越えてしまったからには、明生は当然のようにご褒美として、冴子とのセックスを求め

てくるだろう。おそらく、冴子が明生の部屋に入ると同時に、壁一枚を隔てた隣室では梢がふたりの気配を探ろうと耳をすませているに違いない。そんな状況で明生のおねだりに応じれば、梢の怒りをさらに煽ることになるのは明白だ。かと言って、今までの経験から考えて、明生のおねだりを毅然とはねつけることもできそうにない。

要するに冴子に残されている道は、明生のおねだりに応え、そうすることにより、なぜか梢から仕返しされるという理不尽極まりないものだけのようだ。明生に秘密のレッスンをするのはいいとして（本当はよくないはずなのだが）、これからも嫉妬に狂った梢から凌辱を受けつづけるのかと思うと気が滅入る。どうやら、リッチでゴージャスな夏のバカンスの代償は、とてつもなく高いものになりそうだ。

そんなことを考えているうちに、冴子はこのまま踵を返して、家に帰りたくなってきた。だが、ここでくじけてしまったら、二度と高瀬家を訪れることができなくなるような気がする。少なくとも最初のバイト代を手にするまでは、なんとかがんばらねばならない。金銭への並々ならぬ執着が、冴子を、どう転んでも分の悪い状況に陥ろうじて立ち向かわせていた。

最寄りの駅からここへくる道すがら腕時計を見た時点で、すでに十分以上の遅刻だった。実際はどうあれ、かたちのうえでは冴子は《先生》なのだから、あまりに時間に遅れては

しめしがつかないし、いつまでもこうしてひとの家の門前に突っ立っているわけにもいかない。

冴子が引っこめかけた指をふたたび伸ばしてチャイムを鳴らそうとしたとき、まるで、その瞬間を見計らってでもいたかのように家のドアが内側から開いて、中から長袖のロングTシャツにジーンズといういでたちの明生が姿を現した。

「あれ、先生？」

明生は門の前に立つ冴子を見たたん、意外な場所で意外なものを見つけたように目をまるくする。

「明生くん……」

チャイムを鳴らし損ねた冴子は、とっさになにを言うべきか迷ったが、しばらく言葉を探してから、

「風邪かぜはもういいの？」

「うん、もう、すっかり」

と、うなづく明生は顔色もよく、本人の言葉どおり風邪はすっかり治ったようだ。

「でも、先生、どうして……」

どうしてもなにも、冴子がここにくる用事と言えば、家庭教師をしにきたに決まってい

る。

「今日は月曜でしょ。だから、あたし……」

冴子がそこまで言ったところで、明生は不意になにかに思い当たったらしく、敷居しきいのところに立ったまま家の中へと顔を向けた。戸口を塞ぐようにして立っていた少年の身体しんたいの角度が変わり、大きく開かれたドアの隙間から上がり框かまちに立つ千春の姿が見える。

「ママ！」

突然、息子から非難がましい声をぶつけられ、洗練されたデザインの裾の長い半袖のワンピースに身を包んだ千春は、上品な造りの顔に訝いぶかしげな色を浮かべた。だが、明生の肩越しに冴子の姿を認めると、ハツとして驚きの声をあげそうになった口を右手の指先で覆う。

「やっぱり、忘れてたんだ！」

「ごめんなさい。ママ、うつかりしてて」

「もおー、しょうがないなあ」

と、冴子を門の外に立たせたまま、ふたりが言葉を交わしているところへ、梢が軽やかな足どりで階段を降りてきた。

「おまたせー」

梢は襟元^{えりもと}に大きなリボンをあしらった半袖のブラウスにミニスカートと横ストライプのハイソックスを合わせていて、いつにも増して愛らしい。ふたつに分けた髪をまとめるリボンもターンチェックの幅広のものというおめかしぶりで、これからどこかに出かけるのか、肩から小さなポシェットを提^さげている。見るからに《おでかけルック》の梢は、なにか揉^もめている様子の母親と兄の顔を交互に見較べて、

「どしたの？ なにかあったの？」

明生が事情を説明するように二言三言、梢に言って、妹の視線を促すように冴子のほうを向いた。少女は兄の家庭教師にチラリと目をやってから、そつけなく「いいじゃん別に」とだけ言って、三和^{たき}土に降りて靴^{くつ}を履く。

「よかないだろ」

と唇をとがらせる明生に、梢は腕時計の文字盤を見せ、

「グズグズしてると間に合わないわよ」

「いや、でも……」

梢は、どうしたものかとまごまごしている兄の腕をとると、強引に家の外へとひっぱり出した。

「お兄ちゃん、行こ」

「お、おい、梢……」

梢は門を開けると、完全に冴子を無視した態度で、明生を引きずるようにして歩き出す。なにがどうなっているのか事態を把握^{はあく}できぬまま、開け放たれた門の前にとり残された冴子は、自分がやってきたほうへと歩み去ってゆく梢と明生に声をかけることもできないでいた。ふたりを見送るかたちでひとり突っ立っている彼女に、玄関先まで出てきた千春がおずおずと、

「あの、先生」

「あ、はい？」

「とりあえず、お上がりになってください」

とにかくわけを聞かせてもらおうと家にながってきた冴子を、千春はリビングルームに通す。勧められるまま冴子がソファに腰を降ろすと、千春はその向かいに座って深々と頭を下げた。

「ほんとにもうしわけありません」

と、いきなり謝られても、冴子にはなんとも返事のしようがない。

「誠にもうし上げにくいことなんですけど……」

本当に言いにくいことらしく、千春はすまなさそうに目を伏せた。

「あのコたち、コンサートに出かけたんですの」

「コンサート、ですか？」

「はい」

と、千春はうなずいてから、

「あの、先生はSYOTAP^{シヨッタ}ってご存じですか？」

「ええ、まあ、名前ぐらいは」

SYOTAP^{シヨッタ}というのは、十歳から十五歳までの少年たち五人で構成されたアイドルグループで、女子中高生を中心に下は幼稚園児から上は六十すぎのおばあちゃんまで、あらゆる層の女性から絶大な支持を得ている。彼らが出演するドラマはできの如何^{いかん}にかかわらず高視聴率をキープし、バラエティー番組やらなんやらで、メンバーの誰かをテレビで見ない日はないという人気者だ。本業の歌も順調で、出す曲すべてがチャートの上位に顔を出し、そういったものにあまり興味のない冴子ですら、サビを聞けば、「ああ、あれか」とわかるものが数曲はある。

「あのコたちの出かけたコンサートって、そのSYOTAP^{シヨッタ}のなんんですの」

発売直後にソールドアウトするSYOTAP^{シヨッタ}のコンサートチケットは、「プラチナチケット」と呼ばれるほど入手は難しいらしい。そんな貴重なものが手に入れば、ファンとし

ては、つまらない勉強よりもそちらを優先する気持ちはわからないでもない。だが、梢はともかく、明生が少年アイドルグループに興味があるとは意外だった。

「明生くん、SYOTAPのファンなんですか？」

「いえ、ファンなのは梢だけで、明生はあんまり興味はないみたいですけど、ふたりで一緒に行く約束をしてたらくて」

ファンだというわりには、梢の部屋にはSYOTAPのポスターやグッズの類たぐいは見当たらなかった。ひよっとすると彼女にとってはSYOTAPのコンサートを観るというのは単なる名目で、大好きなお兄ちゃんと一緒ににお出かけすることのほうが主な目的なのかもしれない。

「もちろん、わたしは反対したんですのよ。大事な勉強を休んでそんなところに行くなんてとんでもない。行くんなら、梢ひとりで行きなさいって。でも、あのコったら、どうしてもお兄ちゃんと一緒に行くって聞かないもので」

どうやら千春は息子にだけでなく、娘にも甘いらしい。

なるほど、それだけ甘やかせば、兄妹そろって口クでもないガキに育つはずだと、冴子はひとり納得したが、そうした思いはおくびにも出さず、
「なるほど、それで……」

「はい。そういうわけで、今日の家庭教師はお休みにしていただくよう、先生にご連絡しようと思っていたんですけど、わたし、うっかりしてて」

千春は自分の手落ちを恥じるように、美しい顔をうつむけた。

「このあいだのことといい、なんとお詫^わびしていいか」

このあいだのこととは、明生が風邪で寝こんだとき、連絡がつかなくて、冴子に無駄足を踏ませてしまった（結果的に、そうはならなかったのだが）ことだろう。

「本当にすいません」

と、千春はしきりに詫びてくるが、冴子にしてみれば、明生と梢のふたりが揃って出かけてくれたことで、とりあえず今日はやっかいな状況に直面せずにすんだことになり、幾分ホッとしてもいた。だがその反面、次にここにくるときには、今日、出掛^{でかけ}にしてきたような決心を、もう一度しなければならぬことを考えると、まるで、刑の執行が延期された死刑囚のような複雑な気持ちにもなる。

とにかく、授業がないのであれば長居は無用だ。

「わかりました。そういうことでしたら、あたしはこれで……」

そう言っ腰を上げようとした冴子を、千春があわてて押しとどめた。

「先生、せっかくいらっしゃったんですから、夕食でも一緒にいかがですか？」

「あ、いえ、そんな、おかまいなく」

「お詫びと言ってはなんですけど、ご迷惑でなければ、ぜひご馳走ちそうさせてください」
「ですけど、それじゃあ、かえって……」

などと、しばらくは押し問答めいたやりとりをしていたが、冴子はあまり固辞こじするものも悪いと思い、けっきょく、千春の勧めに従って、夕食をご馳走になることにした。

いったんダイニングキッチンへと姿を消した千春はすぐに戻ってきて、リビングルームの背の低いテーブルにワインのボトルとグラスを置いた。細みのボトルは、わずかに金色がかった透明な液体で満たされている。ボトルに貼られたラベルは比較的新しいようで、そんなに年代物のワインというわけではないようだ。

「すぐに用意できますから、それまでこれでもお飲みになってお待ちください」

千春は優雅な手つきで、背の高いワイングラスに白ワインを注いだ。彼女がふたたびキッチンへと向かうのを見送ってから、冴子はグラスに口をつける。

あ、おいしい。

フルーティーであまりアルコール度数の高くないワインは、喉をすりとすべり降りてゆく。淡い黄金色の液体が胃の腑ふに達すると、その通りすぎた食道からかぐわしい芳香がふわりと立ちのぼり、口の中を満たした。居酒屋で飲むグラスワインとは、同じワイン

と呼ぶのもはばかりされるすばらしい味だ。もともとイケるクチの冴子は、さわやかな飲み口に誘われて、ほんの数口でグラスをカラにしてしまう。中学生のころから内緒で父親のナイトキャップを失敬していて、年齢のわりには飲酒歴の長い冴子だが、こんなおいしいワインは初めてだ。

冴子はテーブルの上の封を切ったばかりとおぼしいボトルと、手にしたカラのグラスを見較べた。しばらく迷うようなそぶりを見せてから、ボトルごと置いていったということ。は、お好きなだけどうぞという意味だと勝手に判断し、二杯目をグラスに注ぐ。それも瞬く間にカラにしてしまい、グラスになみなみと注いだ三杯目を半分ばかり飲んだところで、エプロンを着けた千春がリビングに戻ってきた。

「先生、用意ができましたからダイニングのほうへどうぞ」

千春は、グラスとボトルを両手に持って立ち上がった冴子を隣のダイニングへと導きながら、

「よかったわ、先生にご一緒していただけで。独りで夕食なんて、わたし寂しくて」

ダイニングは十畳相当の洋間で、中央に置かれたテーブルは、七、八人で囲んでもまだ余裕のありそうな大きなものだった。なるほど、たしかにここで独りで食事するのは寂しいだろう。

テーブルの上には、食事の用意がぬかりなく整えられていた。テーブルの長いほうの辺の中ほどに、向き合うかたちで席がふたつ設えてある。深皿に注がれたビーフシチューがおいしそうな匂いの湯気を立て、そのそばにはグリーンサラダを入れたガラス器が添えられていた。向き合うふたつの席のあいだに置かれたバスケットには、握り拳よりひとまわり大きいサイズの丸いフランスパンが盛られている。その横にワインボトルを置いた冴子が席に着くと、エプロンを外した千春が向かいに座り、

「作り置きのものでもうしわけないんですけど、どうぞ」

「それじゃあ、いただきます」

冴子はいつものクセで、つい手を合わせそうになったが、あやういところでそれを思い止どまると、ビーフシチューをスプーンですくって口に運んだ。長時間煮こまれた肉と野菜のうまみが混然となったコクのある味わいが舌の上にひろがり、染み渡る。うまいものと言え、回転寿司の中トロがとっさに頭に浮かぶような冴子の粗末な舌でも、これが、材料と水を火にかけてインスタントのルーを放りこんでただけでできるようなものでないことはわかった。大きめにカットされた牛肉はとろけるようにやわらかで、あまり好きではないニンジンですらおいしく感じられる。

「パンも遠慮せずに召し上がってくださいね」

千春の言葉に促され、冴子はバスケットに盛られたパンに手を伸ばした。ひと口大にちぎったパンのカケラに、北海道の親戚から送ってもらったというバターを塗って口に運ぶ。表面はパリッとしているのに中はもっちりとした歯ごたえで、バターのほどよい塩気と相俟って、すこぶる味はよかった。もしこれが本物のパンだとしたら、冴子が今まで口にしていたパンは、すべて粗悪な偽物ということになるだろう。ビーフシチューにパンにサラダという至極一般的なメニューだけに、冴子はかえって、ふだんの生活レベルの差を見せつけられる思いがした。

上品な所作で食事をしていた千春は、食卓に着いてから冴子がなんとなく手をつけかねていたワイングラスに目をやって、

「先生、ワインはもうよろしいんですの？」

「え、ええ」

冴子は中身が半分ほどに減ったワインボトルが、自分の卑いやしさを無言で告発しているように思われ、なんとも言えない恥ずかしさを感じた。

「待ってるあいだに、だいぶいただいちゃいましたし……」

「いやですわ、そんな遠慮なすっちゃ」

千春はわずかに身を乗り出して、

「ワイン、好きなんでしょ？」

「ええ、まあ、わりと」

目の前におかわりをした証拠がある以上、今さら嫌いとは言えない。

「だったら、おもてなしさせてくださいな」

「はあ、では、遠慮なく」

千春はボトルを手にとると、冴子のグラスにワインを注ぎ足した。冴子の頭には肉料理には赤ワインという思いこみがあったが、濃厚な味のシチューとさっぱりとした白ワインという組み合わせも悪くない。

「シチューもよろしかったら、おかわりしてくださいね」

いつもの生活パターンからすると夕食の時間にはまだ早く、そんなに空腹ではなかったにもかかわらず、冴子は千春に勧められるまま、ビーフシチューのおかわりをしてしまう。二杯目のシチューをたいらげると、さすがにおなかいっぱい、それ以上のおかわりは無理だった。だが、もし胃袋が許すなら、不作法を承知で二度目のおかわりをしていただろう。ローマ時代の貴族たちはおいしい物をたらふく食べて満腹になると、孔雀くじゃくの羽根で喉の奥をくすぐり、胃の中のをすべて吐き出して、また美食に耽ったというが、今ならそうした気持ち少しは理解できるような気がする。

食事がすんだとき、ワインのボトルはすっかりカラになっていた。千春もグラスに半分ばかりワインを飲んではいたが、残りはすべて冴子が飲んだので、実質的にはほとんど彼女ひとりであけてしまったことになる。

「ね、先生。もし、よろしければ、もう少しおつき合いただけませんか？」

千春が汚れた食器をキッチンシンクに運びながら問うたとき、食卓の椅子に座った冴子は、すでに酔いで目元をうつすらピンクに染めていた。

「じつはとっておきのワインが一本ありますのよ」

冴子がなんとも答えぬうちに、千春はキッチンの床に膝をつくと、そこに埋めこまれていた小さなとっ手を引き起こす。よく見ると、床の一部が四角く区切られていて、その下にある収納庫の蓋ふたになっているようだ。それを引き開けた千春は奥のほうへと手を伸ばし、ダークグリーンのボトルを一本とり出してきた。さっきのと違って、ラベルはけっこう古びていて、かなりの年代物であることがわかる。

「すぐにまいりますから、先生はリビングのほうに行ってらしてくださいな」

遠慮するきつかけを失った冴子は素直にリビングに行き、そのソファに腰を降ろした。満腹のおなかに軽く手をあてて、いくら相手が勧めてくれるからといって、ここまで甘えてしまっているのかしら、と思う。だがその一方で、この機会にあのいかにも年代物らし

いワインを味わってみたいという気持ちも、また強かった。

ほどなくして千春が、とっ手のついた四角い盆を持ってリビングにやってきた。盆にはワインボトルとグラスがふたつ、そしてチーズと生ハムを盛った皿が載っている。千春は音もなく盆をテーブルに置くと、冴子の右隣にすっと腰を降ろした。

「さ、先生」

千春は手にしたボトルを傾け、冴子のグラスにワインを注いだ。脚の長いグラスに血のように赤い液体が満たされる。千春は自分のグラスにもワインを注ぐと、それを持ち上げて、

「先生、乾杯しましょ」

なんのための乾杯かわからぬまま、冴子もグラスを持ち上げて、千春のと軽く打ち合わせた。優雅なまるみを形成する薄いガラスとガラスがぶつかって、チーンと澄んだ音がする。グラスを口元に近づけると、芳醇ほうじゅんな香りが冴子の鼻孔をくすぐった。これだけでも、このワインが上等なものであることがわかる。さつき食前に供された白ワインを飲んだとき、こんなに美味なワインはほかにないと思ったが、手にしたグラスの赤ワインをひと口含んだ瞬間、その感慨はあっさりと覆くつがえされた。永い眠りから目覚めた果実酒の深くまろやかな味が口の中いっぱいにひろがる。さすが「とっておきの」と言うだけあって、とても

おいしい。冴子はなんとかしてこの感動を言葉にしたいと思ったが、生半可な賛辞ではとても追いつかないだろう。絶品という言葉は、この味を表現するためにあると言っても過言ではない気がする。

「お気に召したみたいですわね」

ワインのあまりのおいしさに言葉を失っていた冴子に、千春が微笑みかける。

「はい、とつても」

と、冴子はうなずいてから、

「でも、こんなにいいものいただいてよろしかったんですか？」

千春がキッチンで床下からとっておきの一本を出してきたときは、せっかくだから夕食のついでにご馳走になってやろうと、いささか卑しい気持ちでいたのだが、いざそれを口にしてみると、その高級な味わいがグルメでもなんでもない自分には分不相応な気がしてくる。

「いやですわ、先生。わたしの『とつておき』なんて、そんなたいしたものじゃありませんわ」

と、千春は言うが、これよりもたいしたワインなんて、おそれおおくて飲んだとたんにはバチが当たりそうだ。

「それに、どんないいお酒もひとりで飲むじゃつまらないですし」

千春は手にしたグラスに満たされたワインに視線を落とすと、過ぎ去った時を懐かしむように、

「主人と一緒に暮らしてたころは、よくこうして食事のあとにワインを愉^{たの}しんだものですわ」

「仲がよろしかったんですね」

冴子は思わず過去形を使ってしまったが、千春はそれを否定することもなく、「ええ」と小さくうなずいた。

「でも、今じゃ、ウチに帰ってくるのは年に二、三回。仕事なんでしかたないとわかってはいるんですけど……」

「……………」

「子供たちがいるんで寂しくはないですけど、こうした大人の愉しみばかりはまだわかり合えませんかものね」

なにもかも満たされているように見える上流夫人の穏やかな顔の裏に隠されていた意外な影を見たようで、冴子は口をつぐんでしまう。

「あら、わたしだったらつまらないことを」

場の雰囲気少し湿っぽくなったのに気づいた千春はそれを変えようとしてか、わざと冗談めかして、

「先生がいけませんのよ。あまりご遠慮なさるから、いろいろお勧めしているうちに、つい愚痴をこぼしてしまいましたわ」

「すみません」

「ほら、また……。ご無理を言っただけだしがお引きとめしてるんですから、気兼ねなくつろいでくださいね」

こうまで言われて、なおも遠慮するのはかえって失礼だろう。冴子は千春の言葉に甘えて、リラックスしてワインをご馳走になることにした。

「このチーズも北海道の親戚から送ってもらったものなんですよ。ひとつ、味をみてくださいな」

と勧められ、ワイングラス片手に皿に盛られたチーズに手を伸ばす。ひと口大にカットされたそれは、室温ですでにやわらかくなりかけていた。匂いはそれほどでもないが、味はけっこうクセがあり、これだと食べられないというひともいるかもしれない。だが、食べ物もセックスもこっそりしたのが好きな冴子にとっては好みの味だった。チーズの味が舌に残っているうちにワインを口に含むと、ふたつの味が溶け合って、絶妙のハーモニー

を奏でる。このチーズとワインはまさに最高のとり合わせで、それをもっと味わいたくて、知らず知らずのうちにピッチが上がってしまう。そんな冴子とは対照的に、千春は味よりも香りを愉しむように、ゆっくりとワイングラスを口に運んでいる。

適度なアルコールが緊張をほぐしたのか、ワイングラスを手にしたふたりの会話は幾分くだけた感じになってきた。主に千春が質問をし、それに冴子が答えるというかたちで、だんだんと話がはずんでくる。千春は冴子から聞いた今の女子大生のあれこれを自分の学生時代と引き較べては、その変化に驚いたり、意外と変わらない部分にもっと驚いたりしながら、会話の合間にカラになったグラスにワインを注ぎ、おつまみの追加を持ってきたりと、もてなし上手のところを見せていた。やがて、たがいがほどよくうちとけてきた頃合いを見計らったように、

「ところで先生、今、ボーイフレンドとかいらっしやるの？」

唐突な質問に冴子は言葉を詰まらせた。

「そうね。きっと、いらっしやるわよね」

冴子が見せた反応をどうとったのか、千春はひとりうなずくと、

「こんなにお美しいんですもの。男の方が放っておくはずありませんわよね」

「そんな……」

お美しいとほめられたのはうれしいが、今現在は寂しい独り身の冴子としては、いささか複雑な心境だ。だが、千春は冴子に恋人がいるものと決めつけて、勝手に話を進めてゆく。

「今、おつき合いしてるひとつて、どんな方なの？」

「いや、まあ、フツートのひとです」

「同じ大学の学生さん？」

「ええ、だいたいそんなところですよ」

千春の思いこみを訂正するタイミングを失した冴子は、今さら、じつは男の方にほつかれてますとも言えず、ぎこちなく話を合わせる。勧められるままに飲んでいたワインがまわって頭の働きが鈍ってきたせいか、それとも、寂しい独り身だということを確認させられたのが、自分で思っている以上の動揺をもたらしているのか、なんとも妙な返事をしてしまう。

冴子と、見たこともない（そして、本当はいもしない）恋人との仲睦まじいところを思い浮かべているのか、千春はうつとりとした視線を宙に投げて、

「いいわねえ、若いひとたちは」

「いや、それほどでも」

冴子としては、胸の中で苦笑いするしかない。

「やっぱり女は恋をしてなきゃダメね。わたしも今からがんばろうかしら」

鮮やかな赤のルージュが色っぽい千春の唇から、聞きようによつてはちよつと刺激的なセリフが漏れた。冴子が男なら不倫の誘いかと勘ぐるところだ。

「……って言つても、こんなおばさんじゃね、もうダメね」

「そんなことないです。千春さん、今でも充分美しいですよ」

「ふふ、お世辞でもうれしいわ」

「そんな、お世辞だなんて」

実際、それはお世辞ではなかった。内面はともかく、とりあえず見た目は美人の範疇はんちゆうに入ると自認している冴子ではあるが、目元に淡い酔いの色にじませ、ワイングラスの脚に細い指をからめた千春の姿には、そうしたうぬぼれに冷や水をかけるような美しさがあ
る。その千春の口から「お美しい」などと言われると、冴子はうれしいどころか、身にす
ぎた賛辞に居心地の悪さを感じてしまう。たしかに今は若さが味方してくれていて、自分
にも、かろうじて千春と張り合えるだけの女の魅力があるかもしれない。だが、このまま
なんの考えもなく生きていつて自分が千春と同じ年齢に達したとき、彼女のように気品あ
る色香が備わっているかについてはかなり疑問だ。千春を熟成を重ねたワインだとするな

ら、自分はしょせん、缶ビールみたいなものではないのだろうか。冷蔵庫から出したばかりの、よく冷えているときはいいだろうが、ぬるくなってしまうえば見向きもされなくなるに違いない。

そんなふうにして己の人生の行く末に思いを馳せていた冴子は、右隣に座っている千春との距離が、いつの間にか肩と肩がふれ合うまで詰められていたことに気づきもしなかった。「けど、やっぱり若いひとにはかなわないわ。だって、お肌の張りがぜんぜん違うもの」千春はワイングラスをテーブルに置くと、ニットの半袖から伸びる冴子の腕に右手でそっとふれてきた。そして、肘の少し上から手首にかけての女性的なラインを、美術コレクターが秘蔵の彫刻を慈しむような手つきでやさしく撫でる。

「こんなにスベスベでうらやましいわあ」

と言いながら、タイトスカートの裾からはみ出た膝頭に手を移し、
「それに膝もとってもきれい」

だが、そう言う千春も、年をとると真っ先にくすみがちな肘や膝はきれいなものだ。

「ねえ、先生」

膝に置かれた手が気になって、そこに目を落としていた冴子は、ハッと顔を上げ、
「は、はい」

「先生のこと、かわいって言ったら、お気を悪くなさるかしら？」

「え……」

かわいい——ひさしく言われてなかったほめ言葉に冴子は動揺した。数瞬後、そんな自分の動揺ぶりに気づいて、さらに動揺を重ねる。

あたしがかわいい？

美人だ。巨乳だ。締まりがいい。そうした表現でほめられることはあっても、かわいいと言われたのは本当にひさしぶりのことだ。いわゆるイイオンナになるのを目指している冴子にとって、「かわいい」という価値観は、成長する過程のどこかで無意識に切り捨ててきたものだった。ゆえに、二十歳を超えているにもかかわらず、いまだにそう評されることを望むようなファッションやふるまいをしている同性を心のどこかで軽蔑^{けいべつ}してさえいた。今さらカビの生えたフェミニズム思想をふりまわすつもりはさらさらないが、やはり、「かわいい」という言葉は立場が上の者が下の者にかけるものだという意識があつて、もしこれが男から言われたのなら、ある種の反発を感じずにはいられなかったかもしれない。だが、相手が憧れに近い感情を抱きつつある年上の女性だったことで、冴子はその賛辞をとまどいっつも受け入れてしまった。正直なところ、千春の目から見れば、自分などはほんの小娘にしか見えないだろう。そう考えれば、彼女が自分に与える賛辞としては、さつ

きの「おいしい」よりは、今の「かわいい」のほうがまだしつくりくる。

最初の動揺が去ると、冴子はうれしさと恥ずかしさがないまぜになった気分で頬を火照らせた。アルコールのせいですでに顔を赤くしていたからいいようなものの、そうでなければ内気な子供のように照れているのが一目瞭然の有り様だ。

「冴子さん」

「あ、はい」

「これから言うこと、怒らないで聞いてくださいね」

千春はそう前置きしてから、

「冴子さんが初めてウチにいらっしやったときから、わたし、あなたのことが気になったの。初対面で緊張してらしたんでしょけど、なんだかちよつとかしこまってらっしやるのがかわいくて」

やはり、成熟した大人の女の千春を前にして、自分の小娘ぶりに気後れを感じていたのを見抜かれていたようだ。

千春は自分の言葉で相手が気を悪くしていないかをたしかめるように、冴子の顔をうかがってから、

「それで、こんなひとが妹だったら……なんてことまで考えちゃって」

冴子ほどではないにしろ、千春の頬も酔った色をしていたが、ひよつとすると顔の赤みの幾分かは、照れによるものなのかもしれない。

「わたしって、ひとりっ子だったの。だから、小さいころからずっと妹がほしくて」

と打ち明けてから、千春は自嘲する^{じちよう}ように小さく笑ってつけ足した。

「もつとも冴子さんとじゃ、姉妹にしてはちよつと年齢が離れすぎてゐるわね」

いつの間にか、千春の冴子に対する呼びかけが「先生」から「冴子さん」に変わっている。冴子はそのことにひっかかりを感じるどころか、いつそ、親しみをこめて「冴子」とやさしく呼び捨てられたい気持ちになっていた。

「あ、あたしも千春さんみたいなひとがお姉さんだったらうれしいです」

「本当？ そう言ってもらえとうれしいわ」

千春さんが、お姉さん……。

その考えは、冴子を妙にドキドキさせた。たしかに千春本人が言うように、ふたりは姉妹にしては年齢が離れすぎている。だが、その差は母娘というほどでもなく、もし、本当に千春がお姉さんだったら、母性とは違った甘美な温かさ^{かんび}で自分を包みこんでくれそうなきがする。

「じつは、その《お姉さん》からひとつお願いがあるんだけど……」

「お願い、ですか？」

「ええ」

と、うなずいた千春は、はにかんだように口ごもってから、
「少しのあいだでいいから、あなたをだっこさせてほしいの」
「え……」

聞き間違いかと思うような突拍子もないお願いに冴子は言葉を途切れさせ、ロゼ・カラ
ーに染まった千春の顔をまじまじと見る。言われたことの意味はわかってても、その意図が
よくわからない。ひよつとすると千春は、見た目よりもずっと酔っているのだろうか。

「お願い、一回だけでいいの」

願いの強さを表すように、冴子の膝に置かれた千春の手に力がこめられる。

「え、でも……」

なんとも答えかねている冴子の困った表情を見ると、千春はすっと顔を伏せた。

「そうよね、やっぱりダメよね。ごめんなさい。変なこと頼んじゃって」

千春のがっかりした顔を見て、自分がひどくつれない仕打ちをしたように感じた冴子は
あわてて、

「あ、あの、ダメじゃないです。ちよつとだけならいいです」

とたんに千春は顔を上げ、

「ほんとに？　ほんとにいいの？」

「あ、はい」

「あとで怒ったりしない？」

と念押しし、冴子がコクリとうなずくと、千春は彼女の手からワイングラスをとってテーブルに置く。

「それじゃあ……」

千春は緊張した面持ちの冴子の左肩に右手をかけて、軽くねじられた上体を自分のほうに引き寄せた。冴子の左の肩口から出した顔を首筋にうずめると、薄手のニットに包まれた身体に両腕をまわしてやさしく抱き締める。ふたりの上半身が密着し、形よく突き出た冴子の胸のふくらみに、やわらかでヴォリュームのある感触が押しつけられた。大きさはほとんど差のない両者だが、やはり、若い分だけ冴子のバストのほうが張りにおいては勝っているらしく、千春の胸が押しつぶされた格好になる。

あ……。

こうして身体をくつつけるまで気づかなかった淡い匂いが、冴子の鼻孔をくすぐった。結びあげられた黒髪から漂うリンスの残り香と香水、そしてほのかな体臭が入り混じった

大人の女の匂いだ。こんなふうには、ただ抱き合っているだけで、冴子は不思議と気持ちが高揚してきた。好きな男の口に初めて手を握られた少女のように、カァーッと頬に血がのぼる。鼓動の音が相手に聞こえるのではないかと思うほど動悸が速くなり、スカートの上で所在なげにしていた両手の指は、いつの間にか、なにかに祈りを捧げるように組み合わされていた。

千春さん、とつてもいい匂いがする。あつたかくて、やわらかくて、なんかすつごくドキドキしちゃう。

時間にすればほんの二、三分だったが、冴子にはそれがひどく長いあいだに感じられた。千春の《だっこ》にのぼせたのか、このまま抱かれつづけていると、どうにかなってしまうそうだと。

「あ、あの、もういいですか？」

「あら、ごめんなさい」

千春はゆつくりと腕をほどき、冴子から身を離した。密着していたふたりのあいだで温められた空気が、ふわッと逃げてゆく。冴子の顔はゆでられたように、耳まで真っ赤になっていた。鼻孔から漏れる息の熱さで、本人も自分が赤面していることがわかるらしく、恥ずかしそうに顔を伏せている。千春はそんな冴子の顔を覗きこみ、

「あら、どうしたの？ 真っ赤になって」

「あ、あの、ちよつと酔っちゃったみたいで……」

「そうなの」

冴子の苦しい言いわけを素直に受けとると、千春はいたずらっぽく微笑んで、

「じゃあ、もつと酔わせてあげるわ」

相手の言った言葉の意味を問うように、冴子がうつむけていた顔を上げたときには、すでに千春の顔が息がかかるほど間近に迫っていた。驚きの声をあげる暇もなく、ルーージュを刷^はいた千春の唇が冴子の唇に押し当てられる。

「ンッ！」

と、くぐもつたうめきをあげて、冴子は一瞬、身体を堅くした。すると、それをほぐそうとするように、千春の手が冴子の両肩にかけられる。同時に、閉じ損ねた歯列の隙間に舌がもぐりこんできた。千春は冴子と唇を重ねたまま顔をわずかにかしげつつ、伸ばした舌を奥へと挿し入れてゆく。舌はきれいな歯並びを裏側からたどり、意外に敏感な上顎の裏をくすぐってから、口の中でおびえた仔猫みたいに縮こまっている冴子の舌にふれてきた。最初は反応を見るようにそつと。それで相手が抗わないと見るや、今度は大胆に舌をからませてくる。

口をふさがれ、鼻だけで息をしているせいか、冴子には千春の身体から発散される大人の女の匂いが、さつきよりもずっと濃厚に感じられた。舌と一緒に口の中に入ってきた千春の唾液は、ほんのりとワインの味を残しているようで、それが自身の唾液と混じり合い、天然の媚薬びやくとなって冴子の心をとろけさせる。緊張で強こわばっていた肩からもいつしか力が抜けて、冴子は完全に千春のキスの虜こいつになっていた。

「んん……」

長くつづいた口づけに、さすがに息が苦しくなつて、冴子が小さく鼻を鳴らすと、それでしょうやく唇が離される。冴子が今まで経験したキスと今の千春のキスは、居酒屋で出されるグラスワインと千春のとおきワインぐらいの差があつた。千春の唇から解放されても、冴子は突然のキスに抗議するどころか、頭がポーツとなつて、手足に力が入らない。飲み下した千春の唾液と引き換えに、氣力を吸いとられたかのようだ。千春の手が肩から離れると、冴子は糸の切れたマリオネットみたいなぐったりとして、ソファの背もたれに身を預けた。まさしくキスに酔わされた状態で、目は霞かすみがかかったようになっている。

「あなたって、かわいいわあ。ほんと、食べちゃいたいくらい」

千春は口元に妖艶ようえんな笑みを浮かべると、冴子に覆いかぶさるように顔を近づけてきた。
あ、また……。

と、冴子が思う間もなく、千春がふたたび唇を奪う。今度は唇と唇をふれ合わせるだけの軽いキス。千春はそのまま唇を下にずらして、薄皮を剥いたミカンの房ふさのようにつややかな冴子の下唇を軽く挟んだ。それから、さっきとは顔の角度を変えて三度目のキス。ツンととがらせた舌先が白い前歯をくすぐり、薄く開かれた歯列の狭間から口内にぬにゆりと侵入する。千春の舌は口内粘膜をまさぐりながら、淫らな動きで冴子の舌にアプローチしてきた。すると冴子もそれに応えて、積極的に舌をからませる。味みらい蕾らゐのざらつきがわずかに感じられる舌の表と、ぬめらかな舌の裏側がこすれあうのが気持ちいい。温かな口中で二匹の軟体動物がからみあい、密着したふたりの口元から卑猥な粘着音が漏れてくる。

あ、ヤダ。なんか、とろけちゃう……。

冴子は、こんなにも気持ちいいキスは初めてだった。今まではセックスに至るまでの手順のひとつ程度にしか思っていなかったものに秘められていた快感に驚きつつも、それにずっぷりと身を浸す。舌の動き、押し当てられた唇の感触、香水まじりの大人の匂い、とろりとした唾液——それらすべてがたまらなく官能的で、甘い夢の中を漂っているような気分だ。

「ん……んふ……んちゅ」

長々と舌をからめあい、たっぷりと唾液を交換してから千春が唇を離す。唇と唇のあい

だに引かれた唾液の糸が、一瞬銀色にきらめいてからすぐ切れた。千春は顎にへばりついた唾液の糸の切れ端を右手の甲でぬぐうと、その手を冴子の左の乳房に伸ばす。薄手のニットを持ち上げるふくらみにそつと手のひらをかぶせると、冴子はヒクツと身体を震わせた。だが、この接触を拒む様子はない。千春はメロンほどもあるまるみを撫でながら、真っ赤になった冴子の耳に唇を寄せ、

「すごいおっぱいね」

「そんな……千春さんだって」

たしかに千春のバストも大きさでは負けていない。ふつくらとしたワンピースの胸元は、牡の視線を引きつけずにはおかないボリウムと優美なまるみを誇示している。

「ダメよ。わたしじゃ、もう、あなたみたいな若いひとにはかなわないわ」

そう言うと、千春は指をいっぱいにひろげて、冴子の乳房をわしづかみにした。

「あッ」

冴子が肩をすくめて、少女のようにかわいい声をあげる。千春は服の上から喰いこむ指を押し戻そうとする、若い乳房の弾力を手のひらに強く感じながら、

「ほら、わたしのとは張りがぜんぜん違う」

千春の言うとおり、冴子の二の腕に押しつけられた彼女の胸のふくらみはとろけるよう

にやわらかで、喰いこむ指を押し返すような張りはない。だがそれは、若い冴子の乳房と優劣をつけれる類いのものでなく、別種の魅力に満ちていた。実際、マザコンのケがある男性ならかなりの確率で、圧迫感のある冴子のバストより、包容力を感じさせる千春のものを選ぶだろう。しかし、千春自身はやはり、自分が成熟と引き換えに失ってしまったものを貴重と思うのか、冴子の乳房の手ごたえを愉しむように揉みしだきつつ、

「いいわねえ、こんなにぷにぷにで。うらやましいわあ」

あたしのなんかより、千春さんのおっぱいのほうがずっとすてきです。

冴子はそう言いたかったが、照れに邪魔され言葉が喉をのぼってこない。

「ねえ、あなたのおっぱい、じかにさわってもいいかしら？」

千春の大胆な要求に、頭の中にピンクのもやがかかっていた冴子も、さすがにためらいを見せた。

「いいでしょ？ あなたのきれいな胸が見たいの」

千春はとまどいの色を浮かべた冴子の瞳を覗きこみ、

「お姉さんのお願いよ」

そのひと言がとどめになった。

「いいわね？」

とダメ押しされて、冴子は幼い子供のようにうなずいた。千春は背もたれに預けられていた冴子の upper body を起こすと、左腕を相手の背中から左の腋の下へとまわす。ニットの裾を両手でつかみ、鎖骨の下までまくり上げると、白いブラジャーに捧げ持たれた巨乳があらわになった。双球がせめぎあう深い谷間に視線を注ぎつつ、ブラジャーのフロントホックを器用に片手で外す。

ふるんッ。

下着の締めつけから解放された巨乳が、左右にわかれたブラジャーのカップを押しつけるようにまろび出た。たつぷりとしたふくらみは中に満たされた若さではちきれそうで、頂では桜色の乳首がとがって上を向いている。千春はそれに目を留めて、

「あら、もうこんなに硬くして」

隠しようのない欲情の証を見られ、冴子はさらに頬を火照らせた。

「おっぱいはすごいけど、ここはとってもかわいいのね」

千春は腋の下からまわした左手の親指と中指の腹で冴子の左の乳首をつまみ、クリクリともてあそぶ。そうされると甘ったるいむず痒さが背筋を這い上がってきて、冴子はもじもじと身をくねらせた。

「あなたのここ……」

千春は親指と中指で挟んだ乳首の先端を人差し指の腹でやさしくくすぐりながら、

「どうして、こんなになっちゃったの？」

「それは……」

冴子はいったん口ごもってから、蚊の鳴くような声で答えた。

「千春さんがキスしたりするから」

「まあ、自分がエッチな気持ちになったのを、わたしのせいにするのね」

叱られた子供みたいにうつむいてしまった冴子に、千春は畳みかけるように問う。

「あなたがエッチな気持ちになったから、おっぱいの先っぽがこんなになっちゃったんでしょ？ 違う？」

冴子が答えられないでいると、千春は恥ずかしい返事を促すように、

「ね、どうなの？ そうじゃないの？」

「そ、そうです。あたしがエッチな気持ちになっちゃったから……だから、そこがそんなふう……」

「ふふッ、やっぱりそうなんだ」

千春は冴子の耳元に唇を近づけ、息を吹きかけるようにささやいた。

「いけないコ」

それと同時に、勃起した乳首をつまんだ指に力を入れる。

「ひあッ！」

電流を流されたように、冴子の身体がヒクツと跳ねた。

思った以上に大きな反応に千春は少し驚いたのか、

「とっても敏感なのね」

とつぶやいてから、形よくとがった突起から指を離した。そして今度は、重たげなふくらみをすくいあげるようにして揉みしだく。

「んふあ」

鼻にかかったうめきをあげて、冴子はむずかるように身をよじった。すると、それに合わせて右の乳房が揺れる。冴子にはそれが、千春にかまってもらえないほうのふくらみが愛撫をせがんでいるように思えて、ひどく恥ずかしい。いつもなら身体を許した相手には、行為の最中にことさら痴態ちたいを見せつける自分が、そんな些細ささいなことを羞はじらっているなんて信じられない。まるで、キスをすれば赤ちゃんができると思っていた、ウブな少女のころに戻ったようだ。

そうやって冴子が自分の腰から上のできごとに氣をとられているうちに、千春はあいている右手を冴子の腿のあいだにするりと忍びこませた。



「あ、ダメ」

冴子是不躑な手の侵入を阻もうと、あわてて膝を閉じる。

千春は左右の膝に手を挟まれたまま、冴子の反応が、さも意外なことのよう、

「あら、おっぱいはよくてもこっちはダメなの？」

たしかに、ここにきて、今さら下半身へのアプローチを拒むのも変だという気がする。

しかしその一方で、もっともプライベートな部位への侵入を許してしまうのには一抹のためらいがあった。

「ね、いいでしょ？ あなたの全部をかわいがってあげたいの」

千春さんが、あたしの全部をかわいがってくれる。

冴子の脳裏にたえようもなく甘美なイメージが醸かもされた。すると、魔法にかかったように、自分の意志とはかわりなく、閉じ合わせていた腿から力が抜ける。

「そう、それでいいわ」

幼児をあやすような口調で言うと、千春は締めつけから解放された手で膝の内側を撫ではじめた。その手つきは、母親が眠りに就く我が子の額ひたいにするようにやさしげだ。千春はされるがままになっている冴子に、「いいコね」とささやくと、膝のあたりを撫でさすっていた手を腿の付け根のほうに、ほんの数ミリにじらせた。すると、縦にした手のひらが

ようやく通るほどの腿の隙間が、暖かな日射しに誘われて開花のときを迎えた蕾つぼみのように開かれる。だが、そうして道が開かれても、千春はすぐには快樂の中心にふれてこなかった。愛撫をいざなうように下肢を開いた冴子の意図をはぐらかし、すべらかな内腿をやさしくまさぐる。あいだに薄紙を一枚挟んだような微弱なタッチ。だがそれが、かえって冴子を昂らせ、薄く開かれた唇から漏れる吐息が熱くなる。やがて、カタツムリのようにのろのろと這う千春の手が、じれったくなるほどの時間をかけてタイトスカートの中に入ってきた。腿のまるみにぴったりとフィットした裾が手首にたくしあげられて、白い下着が覗けそうになる。しかし、あと少しでショーツに指先がふれるというところで、千春の手はそれ以上進むのをやめ、そこで足踏みするように腿の付け根を撫でさすった。

「全部をかわいがってあげたいの」と言っただけには、千春はなかなか肝心の部分にふれてこない。いつもの冴子なら、どんな淫らなことであれ、自分がしてほしいことを露骨な言葉でおねだりしていただろう。だが、千春の腕にいだかれるうちに、彼女の《かわいい妹》になってしまった今の冴子には、激しい愛撫を胸が焦がれるほど求めていても、そうした要求を口にするのに強いためらいがあった。

もっといやらしいコトしてほしい。千春さんに、あたしのいちばんエッチなところをさわってほしい。

身体の奥深いところからこみ上げてくる欲望と、柄にもない羞じらいの板挟みになった冴子は、そこから抜け出そうとするように身をくねらせる。千春はそうした冴子の様子を愉しみながら、スカートの中に這わせた手をひそやかに動かしていた。内腿を洗う快樂のさざ波にいざなわれ、冴子の腰の奥で淫らなうねりが盛り上がり、どうにも抑えられないものになる。

もうダメ。これ以上、我慢できない。

この、蛇の生殺しなまごろのような状態に耐え切れなくなった冴子は、さして乾いてもいない唇を舐めると、はしたないおねだりをするために口を開いた。

「千春、さん……」

「なあに？」

と問い返すあいだも、千春は内腿をさする手を休めない。

冴子は羞恥と興奮で声をうわずらせ、

「もう少し……もう少し上のほうを……」

「上？ 上って、おへそのあたり？」

冴子がなにを望んでいるか、言われなくてもわかっているクセに、千春はわからないふりをして訊く。

「そうじゃなくて……そうじゃなくて……」

切羽詰まっておねだりすると決心した以上、どんなに恥ずかしくても自分の要求をストリートに口にするつもりだったが、いざとなるとうまく言葉が出てこない。今まで冴子とベッドを共にした男が、こんなにも羞じらいに満ちた彼女を見たら、きつと目をまるくするだろう。それどころか、自分か冴子のどちらかが頭を強く打って、気がおかしくなったと思うに違いない。

「あ……あそこを……」

「あそこじゃ、どこかわからないわ」

どうやら千春は、《かわいい妹》の口から卑猥な四文字言葉を引き出すつものようだ。

「お願い、意地悪しないで」

「やあねえ、意地悪なんかしてないわ」

と言ってから、千春は口元に意地悪な笑みを含ませて、

「どうしてほしいのか、ちゃんと言ってくれないあなたが悪いのよ」

「そんな……」

やさしい口調で追い詰められて、冴子は泣きそうになる。

「ほら、どこをどうしてほしいのか、ちゃんと言って」

早くオ○○コさわってほしい。

答えはすでに出ているのに、それが、どうしても口から出てこない。いつまでも言葉をつかえさせている上の口にかわって下の口が、ここをさわってと言うようによだれをにじませ、ショーツの股布に船底型のシミを広げた。

「さあ、早く」

と促され、冴子はやむなく、自分の身体の中でいちばんいやらしい部位の名称の最初の一字を口にする。

「お……」

「お？ なに？」

「オ○○コ」

ついに言ってしまった。血が沸き立つような恥ずかしさで、顔が破裂しそうだ。

「それで、そこをどうしてほしいの？」

四文字言葉を言わせただけでは不満なのか、千春は追及の手を休めない。

「さ……さわってください。そこを、いっぱい、さわって」

「わかったわ。わたしにオ○○コさわってほしいのね」

同じ四文字言葉でもワイングラスが似合う千春の唇から出ると、冴子には自分がそれを

口にするのより何倍もいやらしく感じられた。

「お願い、早く」

冴子がかすれた声でせがむと、内腿を撫でていた千春の手が、ショーツに包まれた股間にふれてきた。ずっと伸ばされた中指が、股布の上から秘裂をなぞり上げる。長々とおあずけを喰っていただけに、軽くひと撫でされただけで、冴子はイッてしまいそうになる。

「ひあッ！」

甲高い悲鳴をあげて頭をのけぞらせると、千春は布地越しにわれめに喰いこませていた指先をすばやく浮かせた。

「まだ、イッちゃダメよ」

鋭い快感が背筋を走り抜けたあと、冴子は全身の緊張がほぐれるのに合わせて息を吐いてゆく。無防備にさらけ出された喉元を隠すように、ゆっくりと顎を引く彼女の耳に、千春は唇を寄せ、

「わたしにいっぱいさわってほしいんでしょ？ だったら、もっとゆっくり愉しみましょー」

それに対してうなずきはしたものの、実のところ冴子には、千春の愛撫をゆっくり愉しむ余裕はなかった。快楽の源が自分でも信じられないくらい敏感になっている。下着の上

からでも、あんなに感じてしまうのだ。もし、じかに秘裂をまさぐられ、深々と指を挿し入れられたら、あつと言う間に絶頂に達してしまうに違いない。それがわかつているのか、千春はショーツの中に指を忍ばせてはこなかった。薄い布地の上から浅く喰いこませた中指の先を、スリットに沿って上下させる。あいだに布地を一枚挟んでいるにもかかわらず、指と秘裂の接触面から身が震えるほどの快美感が生じ、冴子は唇を噛み締めた。

スリットをなぞりはじめた千春は、指先にふれる湿り気に気づくと、
「ふふッ、我慢できなくて、おもしろしちやつてたのね」

「おもしろし」という表現に羞恥心を掻き立てられ、冴子はこのまま消えてしまいたくなかった。だが、そうした気持ちとは裏腹に、股布にできたシミはどんどん大きくなっていく。布地越しに秘裂をなぞられるにつれ、淫らな思いを溶かしこんだシロップは、欲情の激しさを物語るようにとめどなくあふれてきた。濡れたショーツは恥丘に張りつき、白い布地の下にうつすらと秘裂を透かしている。

「あらあら、ちよつとさわっただけなのに、もう、びちよびちよ」

千春は冴子の濡らしっぷりにあきれたように、

「あなたって、いつもこういうなの？」

「ち……違います。千春さんだから……さわってるのが、千春さんだから」

「そう……わたしだから、こんなに濡らしてくれてるのね。うれしいわ」

ささやきとともに吹きかけられた甘い吐息に耳をくすぐられ、冴子はわずかに身じろぎをする。

「それじゃあ、こうしたらもっと濡れちゃうかしら？」

千春は指先にも目があるような正確さで、ぷつくりとふくれたクリトリスをショーツの上から探り当てた。そこに軽くタッチされただけで、電撃を浴びせられたみたいに冴子が鋭い悲鳴をあげる。

「はひッ！」

千春は濡れた股布の上からクリトリスに中指の腹をあてがうと、マウスをクリックするようにチョンチョンと刺激した。敏感な突起から快樂のパルスが打ちこまれるたびに、冴子は身体を痙攣させる。そんな反応をおもしろがるように、千春は軽快なリズムでクリトリスを愛撫し、もう一方の手で掌中におさまりきらないふくらみを揉みしだいた。

「はあはあ……ン……あッ」

全身を熱く火照らせた冴子の息が、だんだん荒くなってくる。乳首もクリトリスも痛いほど勃起し、秘裂からにじむ愛液もねっとりとしたものになってきた。千春の指が軟膏なんこうをすりこむような動きでクリトリスをこねると、冴子のあえぎがいつそう切ないものになる。

身体の奥から淫らなうねりがこみ上げてきて、とてもじつとしていられない。目に見えないなにかをふりほどこうと、身悶えをする彼女の頭の中はめっちゃめっちゃで、ただもう、もつといやらしいことをしてほしい、もっと気持ちよくなりたいという思いでいっぱいだった。

「千春さん、お願い。中に……中に、指入れて。それで、いっぱいクチュクチュして」
「入れる？ 入れるって、どこの中に？」

「オ○○コ……オ○○コの中に、早く」

快楽の虜となった冴子は、我を忘れて四文字言葉を連呼する。

「オ○○コの中に指入れて」

千春は冴子のはしたないおねだりに応えて、クリトリスを責めていた中指を股布の脇から中に忍ばせた。熱くとろけた柔肉の中に、にゅぷりと指を沈めると、待ち兼ねていた異物の侵入に、冴子が歓喜の声をほとばしらせる。

「あぁッ！」

きゅうツとホールが収縮し、根元まで挿し入れられた中指をきつく締めつける。千春はそれに抗って、愛液まみれの指をぬかるみにゆっくりと出し入れさせた。

「あなたのココって、とつてもいやらしいのね。わたしの指をキュンキュン締めつけてく

るわ」

淫らに蠢く千春の指がぬめる膣内を掻きまわし、からみつく肉壁をもてあそぶ。スカートの中から粘っこい水音が漏れてきて、それに重なる冴子のあえぎが切羽詰まったものになる。

「んッ……あッ……ひあッ！」

指の動きが激しくなると、脇に寄せられた股布がよじれて恥丘に喰いこんできた。ショーツからはみ出た恥毛は濡れて股間にへばりつき、ホールに指をくぐらせた千春の手のひらに卑猥な感触を与える。ふくれあがったクリトリスはフード状の包皮の下から顔を出し、あふれるにつれ濃さを増すシロップはアヌスにまで垂れて、スカートの生地にしみをひろげていた。

千春が膣口から少し奥に入ったところを鉤かぎに曲げた中指の先でひつかくと、冴子は甲高かんだかい声をあげて身をよじる。

「あッ、あッ、そこッ！」

「どうしたの？　ここが感じるの？」

と訊かれても、冴子は淫らにあえぐばかりで、まともに返事をすることもできない。千春は指先に、俗に言うGスポットのざらつきを感じながら、絶頂へとつづく階段を今にも

昇り詰めようとする《かわいい妹》を、さらに激しく責め立てる。

「もうイキそうなの？ オ○○コに指入れられてイッちゃうの？」

「あッ、あッ……」

口の端から一筋のよだれを垂らした冴子は、首の蝶番ちようつがいが外れたようにガクガクとうなずき、肯定の意を表した。完全に快樂の虜となった彼女は、もはや自分の肉体を自分では制御できないようだ。千春は痙攣する身体を押さえこもうとするように、わしづかみにしたふくらみに指を立て、秘裂にくぐらせた中指で、きつく締めつけてくる柔肉をひときわ強くえぐった。

「ああッ！」

巨乳を突き出して大きくのけ反った冴子の口から、エクスタシーの到来を告げる悲鳴がほとばしる。それと同時に身体の奥でたわめられていた悦樂のバネが弾け、彼女の意識は天の高みに舞い上げられた。

「ン……」

と、かすかなうめきをあげて、冴子は目を開けた。ぼんやりとかすむ瞳に、見知らぬ天井が映っている。

あ、れ……？

しばらくのあいだ冴子はうつろな目で天井を見上げていた。やがて、頭の中の靄もやがゆつくりと晴れ、さつきまでの記憶が甦る。

そうだ、あたし……。

ベッドで仰向けになっていた冴子は、弾かれたように跳ね起きた。上半身を起こすと、首から下を覆っていた薄い毛布がめくれ、豊かな胸のふくらみがあらわになる。

え？ ヤダ、裸！

冴子はあわてて毛布をひっぱり上げて、剥き出しの胸元を隠した。素肌にふれる毛布とシーツの感触で、わざわざ見なくても、自分が全裸にされていることがわかる。

ここは、いったい……。

訝しげな顔で冴子はまわりを見まわした。抽出のついたサイドテーブルには、電球にピンポン玉を大きくしたような丸いカバーをかぶせたスタンドがあり、部屋のドアのそばに置かれたフロアスタンドともに、やわらかな間接照明で室内の様子を浮き上がらせている。サイドテーブルを挟んだ隣にはもうひとつベッドがあるが、そこはもぬけの殻からだ。その向こうの壁一面を占める窓には厚いカーテンが降ろされ、床に敷き詰められたカーペットは、歩けば足跡がつくのではないかと思わせるほど毛足の長いものだった。冴子から見て正面

の壁に接して大きなチェストが置かれているが、それとふたつのベッドを除いては、落ち着いた色調で統一された室内にほかに目立った家具はない。たぶんここは千春と、その夫、慎一のベッドルームのようだ。

どうやら冴子は、リビングルームのソファで千春の愛撫を受けて絶頂に達し気を失ったあと、ワインの酔いも手伝って、そのまま眠りこんでしまったらしい。それを千春がここに運んで、ベッドに寝かせてくれたのだろう。

でも、あたし、どうして裸なんだろう？

真っ先に頭に浮かんで当然の疑問にようやく思い至ったとき、冴子から見て右手の奥にあるドアが開いた。ハッとして、そちらのほうに目をやると、廊下から射しこむ蛍光灯の光を背にした千春が部屋に入ってくる。風呂で汗を流してきたのか、彼女は素肌に白いバスローブを羽織っていた。

うしろ手にドアを閉めた千春は、冴子がベッドの上に身を起こしているのを見ると、

「あら、お目覚め」

「あ、はい」

千春の姿を見たたん、冴子の脳裏にリビングでの自分の痴態が甦り、頬が熱くなる。自分はただ酔いつぶれて、ここに寝かせられていたわけではない。甘美なキスに酔いしれ、

巧みに動く千春の指に翻弄ほんろうされて、彼女の腕の中で歓喜の悲鳴をあげて失神してしまったのだ。

「あ、あの、あたし……」

冴子はなにか言いわけめいたことを口にしようとしたが、胸にこみ上げる恥ずかしさに阻まれて、うまく言葉が出てこない。けっきょくなにも言えなくて、照れた子供のように耳まで真っ赤になった顔をうつむけた。

ベッドの端に腰を降ろした千春は、伏せられた冴子の顔を覗きこみ、

「さっきのあなた、とってもかわいかったわよ」

リビングのソファの上でさらした自分の痴態がまざまざと思い出され、冴子はこの場から消えてしまいたくなる。千春はすっと手を伸ばし、細い指を深く引かれた冴子の顎にかけた。それがゆっくりと持ち上げられるのに合わせて、冴子は恭順の意を表すように目を閉じる。すると、薄く開かれた彼女の唇に、ぽってりとした千春の唇が重なった。舌と一緒に千春の唾液が口の中に忍び入ってくると、毛布をしっかりと胸元に掻き抱いていた冴子の腕から力が抜けた。胸の深い谷間を隠していた毛布がずりさがり、乳房の大半があらわになる。淫らに舌をからませながら、千春はかろうじて乳首を隠していた毛布をめくり、冴子の下腹部を剥き出しにした。またしても甘美なキスに酔ったのか、冴子はされるがま

まだ。たつぷりと唾液のやりとりをしてから唇を離すと、千春は冴子の胸のふくらみに手を伸ばす。千春の指が肌にふれると、冴子は目を開き、自分の巨乳を揉みしだこうとする手を押さえた。

「待ってください」

「どうしたの？」

「あたしだけ裸なんてズルイです。あたしも、千春さんの裸見たい……」

「いいわ」

と、千春は軽くなずいて、

「たしかにあなただけ裸じゃ、不公平なものね」

冴子の胸から手をどけると、千春は立ち上がって、バスローブとともにぎれのベルトをほどいた。肩のまるみに沿って白いバスローブをすべらせ、それを足元に落とす。大きく息を呑んだ冴子の目に、一糸まとわぬ千春の裸身が余すところなくさらされた。それは、さながら白い美神だった。透き通るようなという表現が、まったく過言ではない白い肌。サイズでは冴子に勝るとも劣らぬ巨乳は重たげで、見ていると、頼りないほどやわらかなふくらみがこぼれ落ちるのを受け止めようと、手を差し伸べたくなる。舌ざわりのよさそうな乳暈の中に半身をうずめたローズピンクの乳首は、乳房自体が並外れて大きいせいかな、

意外なほど小さく感じられた。股間には、そこに女体への入り口があることを示すように細い恥毛が品よく繁り、周囲の肌の白さを際立たせている。

なにかに魅入られたような冴子の視線を身に浴びながら、千春は後頭部に手をまわして、アップにしていた髪をほどいた。艶やかな黒髪が肩から背中へとすべり落ちると、身体の奥に閉じこめられていたしなやかな牝獣^{けもの}が解き放たれたかのように、彼女はイメージを一変させた。貴婦人めいた慎ましさの下に隠されていた、淫蕩な娼婦の素顔が覗く。

「これでいいわね」

妖艶に微笑んだ千春が、冴子の下半身を覆っていた毛布を剥ぎとった。ベッドに上がると、四つん這いに近い姿勢になって、濃厚なキスをする。唇を重ねたまま冴子の upper body を背後に押し倒すと、千春はわずかに顔を傾けて、相手の口中に深く舌を挿し入れた。それを待っていたようにからみついてくる舌と戯^{たわむ}れながら、右手で冴子の巨乳を揉みしだく。めいっぱいひろげた手のひらが、弾力あるふくらみをしぼるたびに、彼女の《かわいい妹》は甘えた仔犬のように鼻を鳴らした。

しばらくして息苦しさを感じた千春は、息継ぎのためにいったん唇を離すと、今度は冴子の顎の裏に口づけし、首筋に沿って唇を胸のほうへと這わせてゆく。繊細^{せんさい}な造りの鎖骨のくぼみを舐めまわし、揉みしだかれて淡く血の色をのぼらせた左の乳房のスロープに、

ナメクジが這ったような唾液の跡を残した。やがて、美しい隆起の頂に達した唇は、刺激がほしくてウズウズしてる乳首を捉え、強く吸う。すでに勃起しかけていたそれは、温かな口中に含まれて、瞬く間に硬く上がった。そんな小生意気な突起をこらしめるように、千春が軽く齒を立てる。

「はひッ！」

冴子は鋭い悲鳴をあげると、もっとうるさく胸を突き出した。その要望に応えて、千春は乳首をやさしく噛んだ。それから、突起の側面に沿って舌先をクルクルまわして乳暈に小さな円を描き、ノミで刻んだような先端の切れこみをくすぐる。さらには母乳を貪る赤ちゃんみたいに頬をすばめて吸いたててから、小気味よい音をさせて唇を離すと、乳暈にはうつすらと赤い吸い跡がついていた。

ほとんど間を置かずに、千春はもう一方の乳首に吸いつくと、さっきまで隣の乳首にしていたのと同じことをくり返す。そうして両方の乳首を平等に味わってから、力をこめた舌先を、仰向けになってもほとんど形をくずさない乳房の谷間を通過させ、すっきりとした下腹部に向かわせた。うつすらと浮き出たあばらをたどり、脇腹のほうに寄り道してからヘソのくぼみのそばを通り抜け、恥毛の繁みを避けるようにカーブを切って腿の付け根へと至る。

ゆるく立てられた冴子の膝が、舌の訪れを歓迎するように開かれた。千春の鼻孔から漏れる息が、恥毛をわずかにそよがせる。彼女は舌を恥骨と直角に交わるように腿の付け根に沿って何度か往復させてから、内腿のほうへとすべらせた。膝の内側まで唾液の航跡を曳くと、そこで千春の舌は折り返し、今度はうねうねと蛇行しながら、まったくたるみがない太腿をすべり降りてくる。そのまま秘裂に舌を這わせてくれるのかと思いきや、彼女はそんな冴子の期待をはぐらかし、恥丘をひよいと飛び越えて、反対側の腿の付け根に唇を押しつけた。そして、鏡に映したように、さつきと同じコースをたどって、薄く開いた唇から覗かせた舌先を往復させる。

ふたたび股間に戻ってきた千春の舌は、潤みはじめたスリットのまわりを、仔猫を慈しむ母猫のようなていねいさで舐めまわす。花が蜜の匂いで虫を引き寄せようとするのにも似て、冴子の秘裂も淫らな牝の匂いを漂わせて愛撫を誘う。だが、意地悪な舌先は、今にも秘裂に届くかと見せて、いつかな肝心の部分にふれてこない。健康な男性なら匂いを嗅いだだけで勃起しそうなフェロモン臭も、同性の千春には通用しないようだ。

じれったくなった冴子はヒップをもじもじさせて、白いシーツに皺を寄せた。クリトリスは自分のところになかなか舌が伸びてこないのを訝しく思ったのか、外の様子をうかがうように包皮の下から顔を覗かせる。粘膜の狭間からも、舐めとられるのを期待するみた

いに、ねっとりとしたシロップがにじみ出てきた。それを見て、さすがにこれ以上じらすのはかわいそうだと思ったのか、千春は恥骨のあたりに這わせていた舌を横にスライドさせて、スリットを、すうツと舐め上げる。

「ひあッ！」

脳天まで突き抜ける快感に、冴子が大きく背をそらすと、ふるんと巨乳が揺れた。

千春は飼い犬が主人の顔にするように、長く伸ばした舌で秘裂を立てつづけに舐め上げる。愛液は舐めとられるはしから、それをうわまわる量があふれ出し、瞬く間に冴子の恥丘はぬるぬるになってしまった。千春は充血したクリトリスに吸いつくと舌先を巧みに動かして、フード状の包皮を剥き上げた。クリトリスの表面はぬめらかで、溶けかけたグミキャンデーのようだ。歯を立てないよう気をつけながら、唇でしつかりととらえ、てろてろと舐めしゃぶる。

「はひッ！」

敏感な突起を舌でくすぐられ、冴子はシーツに両手の指を立てた。わずかな舌の動きにも彼女の裸身は激しく反応し、胸板に盛られたふくらみが落ち着きなく揺れる。千春はクリトリスを重点的に責め、冴子を絶頂の間際まで追いこむと、そこで不意に秘裂から口を離した。口のまわりは愛液でベトベトになっていたが、それを気にするふうもなく、冴子

の大陰唇に両手の指をかけ、秘裂を大きく割り開く。

かばあ……。

シエルピンクの粘膜が形作るいびつな杯には透明なシロップがたたえられ、その底では指一本でもきつそうなホールがものほしげにひくついていた。千春は恥丘にかぶりつくようにして秘裂に口を押しつけると、とがらせた舌先で膣口の縁をゆっくりなぞる。

「あッ……あッ……」

半開きになった冴子の唇から、止めようのない声が漏れた。淫らな軟体動物を早く体内に受け入れたいのか、ホールのひくつき具合が激しくなる。ここでも《かわいい妹》をさんざんじらせてから、千春は膣口ににゅぷりと舌を挿し入れた。入り口から少し中に入ったあたりを探るように膣壁に沿って舌をまわし、とめどなくあふれる愛液を、わざとはしたない音を立ててすすり上げる。

じゅッ……じゅるッ……じちゅッ……。

飲み切れなくて唇の端からこぼれた分が会陰部を伝って、ヒップのほうにまで垂れてゆく。千春は秘裂から口を離すと、大陰唇を割り開いていた両手を冴子の膝の裏へと移し、グイッと持ち上げた。

「ひゃん！」

とかわいい悲鳴をあげて、冴子はおむつを代えられる赤ん坊のような格好になる。シートからヒップが少し持ち上げられて、うつすらと色づいた谷間で息づくすぼまりが、股間に顔を近づけている千春のほうを向いた。

千春さんに、おしりの穴、見られてる。

たまらない恥ずかしさで、もうこれ以上は赤くなるまいと思われた顔がさらに紅潮する。もつとも見られたくないパーツに熱い吐息がかかり、冴子はヒクツと身体を痙攣させた。

「あッ、ヤダ。そこは……」

千春がキスをせがむようにすぼめられたアヌスに口をつけようとしているのを見て、冴子が驚きの声をあげる。

「言ったでしょ、全部かわいがってあげるって」

千春は垂れた愛液をたどるようにして、会陰部に押し当てた舌先を冴子のアヌスに這わせた。放射状に伸びる短い皺の一本一本に丹念に唾液を塗りこめてから、きつくしぼられたすぼまりをこじ開けようと、その中心にあてがった舌先を蠢かせる。最初のうちは排泄器官に口をつけられることへの嫌悪感と恥ずかしさが勝っていたが、すぐにそれらをうわまわる快感が女体の奥から湧き上がってきた。

ウソ……あたししたら、おしりの穴舐められて感じちゃってる。



ぬめらかな舌の感触に、冴子のアヌスはヒクヒクと収縮をくり返す。可憐なすぼまりを味わい尽くすと、千春は会陰部をぬめらす愛液の跡を逆にたどって、ふたたび秘裂に口をつけた。スリットに挿し入れた舌で柔肉をえぐり、はちきれそうなクリトリスを口の中でもてあそぶ。

すっごい……すっごい気持ちいい。気持ちよすぎて、オ○○コ溶けちゃいそお……。巧みな口唇愛撫に翻弄されて、快樂の波間を漂う冴子は、せわしない息の下から千春の名を呼んだ。

「千春さん」

千春は舌の動きを止めて、恥毛の繁みにうずめていた顔を上げる。

「なあに？」

「あたしも……あたしも千春さんの舐めたい。あたしだけじゃなく、千春さんにも気持ちよくなつてほしい」

「いいわよ」

千春は膝立ちになると、冴子の足先のほうを向いて彼女の顔にまたがった。そのまま身体を前に倒してシックスナインの体勢になると、潤んだ冴子の目に千春の秘部がアップで迫る。

これが、千春さんの……。

冴子は千春のヒップに両手をかけると、それを抱えこむようにして、わずかに頭を持ち上げた。胸をドキドキさせながら、大人の女の匂いを漂わす秘裂に口をつける。

「ン……」

シェルピンクの中身をちろりとはみ出させたスリットにキスされて、千春が小さくうめいた。冴子を愛撫することで彼女自身も興奮していたのか、すでに秘芯は多量の蜜をたたえている。伸ばした舌を秘裂にくぐらせると、中はとろけるようにぬめらかで、ねっとりとした愛液が口中に流れこんできた。柔肉の中で冴子の舌が蠢くと、それに合わせて千春も愛撫を再開する。やっていることはそう変わらないのだが、アプローチの方向が一八〇度逆になっているため、さっきまでとはまた違った快感があった。

もし、「クンニリングス世界選手権」があれば日本代表に選ばれるのは間違いないと思われる千春の妙技に負けまいと、冴子も愛液をすすり、熱く潤ったぬかるみを舌で掻きまわす。まるで競い合うように、ふたりの舌の動きに熱がこもり、卑猥な水音の二重奏にくぐもったうめきが重なった。冴子も千春も火照った肌を汗ばませ、ベッドルームがむせかえるような牝の匂いで満たされる。

なかなか善戦したものの、やはりテクニクの差か、先に音をあげたのは冴子のほうだ

った。しっかりと喰らいついていた秘裂から口を離すと、千春に切ない声で訴える。

「も……もお、ダメ。それ以上されたら、あたし、もう……」

千春も愛撫を中断すると、身体の向きを反転させて冴子の顔を覗きこむ。

「イキたくって、もう我慢できないのね」

冴子は愛液でべとつく口のまわりをぬぐいもせず、目だけでうなずいた。

「いいわ。女同士でしかできないやり方でイカせてあげる」

千春はゆるく立てられた冴子の左膝の下に自分の右足をもぐりこませると、スライディングをするような体勢で腰を進め、股間と股間を密着させた。こうして、ふたつのピンセットを正面から交差させたかたち——俗に言う「松葉くずし」に近い格好になると、千春は腰のうしろについた手で上半身を支え、恥丘をこすりつけてくる。冴子もレズプレイの定番として、こういうやり方があるのは知っていたが、実際にやるのはこれが初めてだ。

潤みきった秘裂が重なると、ぬめぬめとした粘膜と粘膜が密着し、糸を引くほど粘度を増したふたりの愛液が混じり合う。千春の腰の動きに合わせて口の中で唾液をもてあそぶような音が奏でられ、いやらしくからみあった恥毛の繁みは、もう、どこからがどちらのものかわからない有り様だ。このやり方だと、当然ながら男女の交わりのように硬いこわばりでぬかるみの奥を突き上げられる快感はない。だが、それとはまた違った、女同士で



しか得られない愉悦ゆえつがあつた。

だんだんと恥丘をすりつけてくる千春の力が強くなり、中途半端に起こした上体を両肘で支える冴子も、それに応えて腰を揺する。身体の動きに合わせて、ふたりの胸のふくらしみが微妙に違うリズムで揺れた。冴子のバストのほうがりがある分揺れの度合いが小刻みで、それに対して、こぼれ落ちそうにやわらかな千春の乳房はダイナミックに形を変える。擬音で表すなら、冴子のほうが「ぷるぷる」で、千春のほうが「たぷたぷ」といったところだろうか。

こんなの……こんなの初めて。気持ちよすぎて、なんだか怖い……。

快楽のうねりにさらわれるのを恐れてか、シーツをつかむ冴子の手に力が入る。

千春は巧みな腰づかいで《かわいい妹》を悦楽の高みに追い詰めながら、

「あなたのオ○○コ、とってもいいわ。わたしのにしっかりと吸いついてきて、すっごく感じちゃう」

「あたしも……あたしも、とっても気持ちいいです。千春さんのとあたしのがくつついて、どっちもぐちゅぐちゅで、それで……それで、あッ、あッ……ああッ！」

切羽詰まった叫びとともに、絶頂に達した冴子の爪先がピンとそり返る。それとほとんど時を同じくして、千春の熟れた肢体にもエクスタシーが訪れた。一拍遅れて、冴子の派

手な嬌声きようせいに千春のそれが重なる。

快樂の嵐あらしが通りすぎると、全裸のふたりは脱ぎ捨てられたストッキングのようにぐったりとして、肌を濡らす汗と発情した牝の匂いが濃厚に漂うシーツの波間に身を投げ出した。不意に降りた静寂を、ふたりの荒い息づかいだけがわずかに乱している。ほどなくして、うつとりと目を閉じ、重たげな胸のふくらみを上下させる冴子の意識は、気怠い闇の中に吸いこまれていった。

Lesson 6

宴



「みんなで楽しもうよ」

えらいことになってしまった。

洗面台の鏡に映った冴子の顔は、梅雨時の空のようにどんよりと曇^{くも}っていた。狭苦しいユニットバスのそばに立つ彼女の髪はボサボサで、寝巻がわりのタンクトップにショートパンツというひと目で起きぬけだと知れる格好をしている。冴子をよく知るひとがこの状況を見れば、「ああ、また一日酔いか」と思うだろうが、今朝——といつても、もう昼前だが——に限っては、そうではなかった。いい酒はいくら飲んでも次の日に酔いを持ち越さないというのは本当らしく、昨夜、あれほどワインをガブ飲みしたにもかかわらず、頭痛もなければ胸焼けもない。むしろ、たくさん汗を掻いてからぐっすり眠ったせい、体調はいつもよりいいくらいだ。問題なのは、なにをしてたくさん汗を掻いたかだ。

あたし、昨日、千春さんと……。

脳裏に千春との甘い一夜の記憶がフラッシュバックして、冴子は顔から火が出そうになる。この恥ずかしさを数値にすれば、きっと天文学的なものになるだろう。酔ったうえで狼藉^{ろうぜき}やベッドの上での恥知らずな行いは日常茶飯事の冴子だが、さすがに昨夜の千春との戯^{たわむ}れは、ちよつと異常だったと思わざるをえない。家庭教師先の生徒の母親とレズプレイに耽^{たふ}つただけでも大変なことなのに、年甲斐もなく《かわいい妹》扱いされて、寂しがりやの仔猫のように甘えてしまったのだ。大人ぶった仮面の下に隠していた自分の少女性

を暴き出されたようで、千春とはもう顔を合わせられないような気さえする。せめてもの救いは、彼女を「お姉様」と呼ばなかったことぐらいだろうか。

しかし、いくらワインと雰囲気酔っていたとはいえ、どうしてあんなことになってしまったのか、まったくもって不可解だ。魔法にでもかかっていたとしか思えない。高瀬家の寝室で千春と身体を交えたあと、シャワーを浴びて汗を流した冴子はアパートに帰ってくるなり服を着替えて眠ってしまったのだが、一夜明けた今でも魔法は完全に解けていないのか、こうして昨夜のことを思い返していると胸がドキドキしてくる。

そんな気持ちの昂りを、あまり頼りにならない理性で抑えこむと、冴子は歯ブラシを手にとった。朝の歯磨きという日常の幕開けを告げる行為をはじめると、今の自分を取り巻く状況が、とんでもないことになっているのがひしひしと実感される。単身赴任で顔も合わせていない明生の父親を除き、家庭教師先の家族全員と関係してしまうなんて、どう考えても尋常な事態ではない。このままだと近いうちに、絶対口クでもないことが起こりそうだ。

明生の要求は、この先ますますエスカレートするだろう。それに応じれば、当然、梢は嫉妬の炎をさらに燃え上がらせるに違いない。その結果、どんな仕打ちが待っているか、考えただけでも背筋が寒くなる。これだけでも頭が痛いのに、そのうえ母親の千春にまで

迫られたのでは、たまったものではない。千春が冴子に手を出したのは単に独り寝の寂しさをまぎらせるためなのか、それとも本当に彼女のことを特殊な意味での《妹》としてかわいがるつもりなのかわからないが、顔を合わせれば、また誘いの手を伸ばしてくるのは確実だろう。梢の場合のように弱みを握られているわけではないが、昨夜のような感じで誘惑されたら、抵抗できないような気がする。

また、昨日の夜みたいなことになったら……。

冴子は口の中に溜まった泡をペツと吐き出すと、頭に浮かんだ甘く危険なビジュアルをあわてて打ち消した。

とにかくあの一家とかかわりあいになるのは、もうやめにしよう。なんでもいいから適当な理由をつけて、明生の家庭教師を辞めるのだ。ちょうど次の授業で、アルバイトをはじめてひと月になる。今までの分のバイト代をもらって、それでおさらばだ。もともと破格の条件だから、ひと月分でもそこそこの額になる。それで、南の島での豪遊は無理でも、近場の温泉つきの海水浴場ならけっこう派手に遊べるはずだ。考えてみれば、身にすぎたバカンスの計画を立てたのがそもその間違いだった。やはり人間、地道にやるのがいちばんだ。

次の授業は明日。そのときに、家庭教師を辞めることをはっきり言おう。

そう心を決めると、冴子はゴージャスなバカンスへの夢をふり切るように、蛇口からほとばしる冷たい水で顔を洗った。

「ええッ！」

高瀬家を訪れた冴子が、リビングルームのソファで向き合った千春に、今日で家庭教師を辞めたいと切り出すと、彼女は心底驚きで目をまるくした。叫び声を抑えるために口に当てた手を降ろすと、おろおろしながら、

「ど、どうしてですか？ 先生に来ていただいてから明生ちゃんの成績もアップして、わたし、喜んでおりましたのに」

淫らなご褒美を餌にして、やりたい盛りの少年に勉強させるというからくりを知らない千春にすれば、できの悪い息子の成績をめざましく上げてくれた冴子のことが、さぞかし腕利きの家庭教師に思えるのだろう。

「それに、明生ちゃんも、とってもいい先生だって」

そりゃ、授業のたびにとっておきのご褒美をあげてんだから、いい先生でしょうよ。

胸の中で皮肉つぶくつぶやいた冴子だが、そうしただけはおくびにも出さず、ひたすらすまなそうな顔をする。

「ほんとにもうしわけないんですけど、ちょっと事情がありました」

齒切れの悪い言いまわしになにかを感じとったのか、千春は表情を堅くすると、ほかに聞くひともないのに声をひそめて、

「先生、ひょっとしてこのあいだのことを……」

このあいだのこととは、もちろん食事もベッドもともにした、あの夜のことだろう。努めて意識の外に追い出していた事柄を持ち出され、冴子の頬に朱が差した。甘酸っぱい胸の疼きと、この場から消えてなくなりたいほどの恥ずかしさがぶり返しそうになるのを意志の力で押さえつける。

「あ、いえ、別にそーゆーわけでは……」

「それじゃあ、明生ちゃんがなにか失礼なことを」

思わず「そうです」とうなずきかけた冴子だが、それをこらえて、

「あの、ほんとにあたしの都合だけなんです。勝手言ってすみません」

この機会に母親の前で明生の《悪行》をぶちまければ、さぞかしすっきりするだろう。

しかし、ここは無用な波風を立てずに、これまでのバイト代をもらって、さっさと退散するほうがいい。

とりあえずこれで、家庭教師を辞めるのを伝えることはできた。次は肝心のバイト代の

件だ。それをどうやって切り出そうか考えていると、軽い足どりで二階から降りてきた明生がリビングに顔を覗かせた。

「なんだ、やっぱり来てんじゃん」

すでに家に来ているはずの冴子が、いつまでたっても二階に上がってくる気配がないのを不審に思つて、様子を見にきたらしい。

「どしたのセンセ？ 今日勉強やんないの？」

「明生ちゃん」

千春はソファから立ち上がるとリビングの入り口に佇む息子のそばへゆき、小声で二言三言言葉を交わす。漏れ聞こえてきたところによると、今、先生と大事な話をしているから、それが終わるまで自分の部屋で待ってなさい、とかなんとか言っているようだ。うしろ暗いところが多々あるせいか、明生は大事な話の内容が気になるらしく、その場に立ち会いたそうなそぶりを示していた。だが、母親に「さあ」と促され、しぶしぶ自分の部屋に戻ってゆく。

息子が階段を昇りきるのを見届けると、千春は冴子のほうをふり向き、急に思いついたように、

「あら、わたしだったら、お茶もお出ししませんで」

「あの、おかまいなく」

「ちよつと待つててくださいね。今、お茶をいれてきますから」

冴子が止める暇もなく、千春はキッチンのほうに足を向かわせた。今さらという気もしたが、彼女はキッチンで紅茶をいれることで、動揺した気持ちを静める時間を稼ごうとしているのかもしれない。ほどなくして千春は、ティーカップをふたつ載せた盆を持って戻ってきた。

「すみません」

冴子は自分の前に置かれたティーカップをとり、口元に近づけた。うつとりするほど香りのいい湯気が鼻腔を満たす。このリビングでお茶をいただくのもこれが最後かと思いつつ、紅茶に口をつける。おいしい。これが本当の紅茶だとするなら、スーパーマーケットやコンビニエンスストアに置いてあるティーバッグを紅茶と称して売るのは、ほとんど犯罪だろう。ポットで蒸らす時間の長さを間違えたのか、今日のお茶はいつもより苦みが強かった。やはり、千春は少し動揺しているようだ。

千春は自分のティーカップには手もつけず、上目づかいで冴子の表情をうかがいながら、

「あの、家庭教師の件、なんとか考えなおしていただくわけには」

「はあ、ほんともうしわけないんですけど……」

しばらくは、そうしたなんの進展も望めないやりとりがつづいた。会話が途切れるたびに、冴子は間をもたせるために紅茶に口をつける。カップの中身が三分の一ほどになったとき、彼女は急に強い眠気を感じた。頭の中がぼんやりとして、自然とまぶたが降りてくる。どうしたのかしら……と思うあいだに、上体が前のめりにくずれ、冴子はあわててテーブルに手をついた。

「先生、どうかされました？」

うなだれた冴子の顔を、千春が心配そうに覗きこむ。冴子は突然の体調不良を訴えようとしたが、口の中に接着剤でも流しこまれたように、うまく舌がまわらない。

「先生、ご気分がよろしくないんですの？ それとも……」

千春はいったん言葉を切ると、口元に妖しい笑みを浮かべ、

「そろそろ、お茶に入れたお薬が効いてきまして？」

えッ？ クスリ……。

艶然と微笑む千春の顔を閉め出すようにまぶたが閉ざされて、冴子は深い眠りの中に引きずりこまれていった。

「あッ、あッ、あッ……」

スタッカートで区切られたかわいあいえぎと、ベッドのきしむ音で冴子は目を覚ました。ぼんやりと開いた目に白い天井が映っている。真上から射しこむ蛍光灯の光が目には痛い。ぼやけていた目の焦点が合うにつれ、彼女は強烈な既視感に襲われた。

あれ？　ここは……。

漠然とだが、この天井には見覚えがある。というか、このシチュエーション——いつの間にか眠りこんでしまい、目を覚ますとベッドに寝かされていた——自体に覚えがあった。これは一昨日の夜のくり返しだ。部屋の明かりが間接照明だけだったあのときとは、幾分趣を異にしているが、ここは高瀬夫妻のベッドルームに違いない。

でも、あたし、どうしてここに？

冴子の脳裏に、眠りに落ちる間際に聞いた千春の言葉が甦る。

（『そろそろ、お茶に入れたお薬が効いてきまして？』）

そうだ。あたし、リビングで紅茶を飲んでたら急に眠くなって……。

おそらく、冴子の飲んだ紅茶には、睡眠薬すいみんやくかなにかが入っていたのだろう。だとすれば、あんなに急に眠くなったのも納得がいく。しかし、千春はどうしてそんなことをしたのだろうか？　そして、これからなにをするつもりなのだろうか？

そこまで考えたとき、冴子は自分がいやに不自然な姿勢でいることに気がついた。だら

しなく股を開いているのはよくあることとして、バタ足で泳ぐときのように両腕を耳に添わせて伸ばしている。真上から見ると、おおむね「人」の字の格好だ。そのうえ、身には一糸もまとっていない。

言いようのない不安に駆られ、冴子はベッドから跳ね起きようとした。だが、手首と足首に巻きついた黒革の拘束具こうそくぐがそれを阻むはば。左右の手首に巻きつけられた拘束具は小さな銀色のリングで連結され、それから細いチェーンが伸びていた。チェーンの一端はヘッドボードとマットのわずかな隙間に消えていて、ベッドのどこかにくくりつけられているようだ。足首にも手首と同じような拘束具が巻きつけられており、チェーンがベッドの下を通して左右の足首をつないでいる。そちらのチェーンはなにかに固定してあるわけではないが、十分な長さが無いせいで、股を閉じることができないようになっていた。

拘束具はどれも、痛みを感じるほどきつく締めつけられてはいないが、ストラップをゆるめずにそこから手足を引き抜くことはできそうにない。スチール製のチェーンは細いが頑丈で、いくらひっぱってもびくともしなかった。どうやら薬で眠らされているあいだに、完全に手足の自由を奪われてしまったようだ。

いったい……いったい、なんで？

パニック状態に陥りかけた冴子が、なかば無駄と知りつつも戒めから抜け出そうともが

いていると、さつきからずっと聞こえていた声が不意に甲高くなった。

「ああンッ！」

ハッとして声のしたほうに顔を向けると、左隣のベッドでからみあう男女の姿が目飛びこんでくる。冴子はとつきには自分の目にしたもの信じられなかった。すぐ隣のベッドで男女の営みが行われていたことが、ではない。それは目を覚ましたときから、意識の隅で気づいていたことだ。冴子を心底驚かせたのは、正常位で交わっているのが明生と梢だったからだ。

ふたりとも全裸で、仰向けで股を開いた梢に、明生がのしかかっている。引き締まった少年の腰が律動するのに合わせて、やわらかな恥毛をひとつまみ添えられたスリットに、勃起したペニスが軽快なテンポで出入りしていた。こわばりで柔肉をえぐられるたびに、梢は、乳房と呼ぶのがためられるほど薄い胸のふくらみを突き出すように背をそらす。その頂では本当に小さな乳首が、ツンとその身をとがらせていた。まだ幼さの残る秘裂は充分に潤っていて、明生の腰の動きに合わせて見え隠れするシャフトは透明なシロップにまみれてぬらついている。

驚きのあまり、冴子は声も出せないでいた。もう少し驚愕の度合いが低ければ、かえって大きな悲鳴をあげていたかもしれない。今、目になっているものは、現実に見えてくるこ

となのだろうか？ ひよつとしたら自分はまだ深い眠りの底にいて、夢を見ているのではないのか？ もし両手が自由だったら、冴子は自分が本当に目覚めているかたしかめるため、頬をつねっていただろう。

「ちよッ、ちよつと、あんたたちッ！」

ようやくショックから立ち直った冴子が、かろうじて自由になる首だけを起こして怒鳴ると、妹とのセックスに没頭していた明生が腰の動きを止めた。梢とつながったまま身を起こし、隣のベッドで拘束された家庭教師に顔を向ける。

「あ、先生、起きたんだ」

「な、な、なにしてんのよッ！」

「セックス」

恥ずかしげもなく言い切られ、冴子は言葉を失った。しかし、なんとか気をとり直し、
「あ、あなたたち兄妹なんですよ。なのに、そんなことしちゃマズイじゃないの」

物事の順序としては、どうして自分をこんな目に遭あわせたのかを問いたですほうが先だったろう。だが、近親相姦きんしんそうかんの現場を目の当たりにし冴子は、なによりもまずその背徳行為を咎めずにはいられなかった。しかし、明生は自分のしていることに空き缶のポイ捨て程度の些細な罪悪感もないようだ。

「いいじゃん別に。兄妹でセックスしたって、誰かに迷惑かかるわけでもないんだしさ」
そう言われるとたしかにそうかもしれないと、納得しかける自分を叱咤する（しつた）ように、冴子は唾を飛ばしてわめく。

「なに言ってるの！ だからって、ンなことしていいわけないでしょ！」

「じゃあさあ、バイト代目当てに家庭教師先の教え子とセックスすんのはいいわけ？」

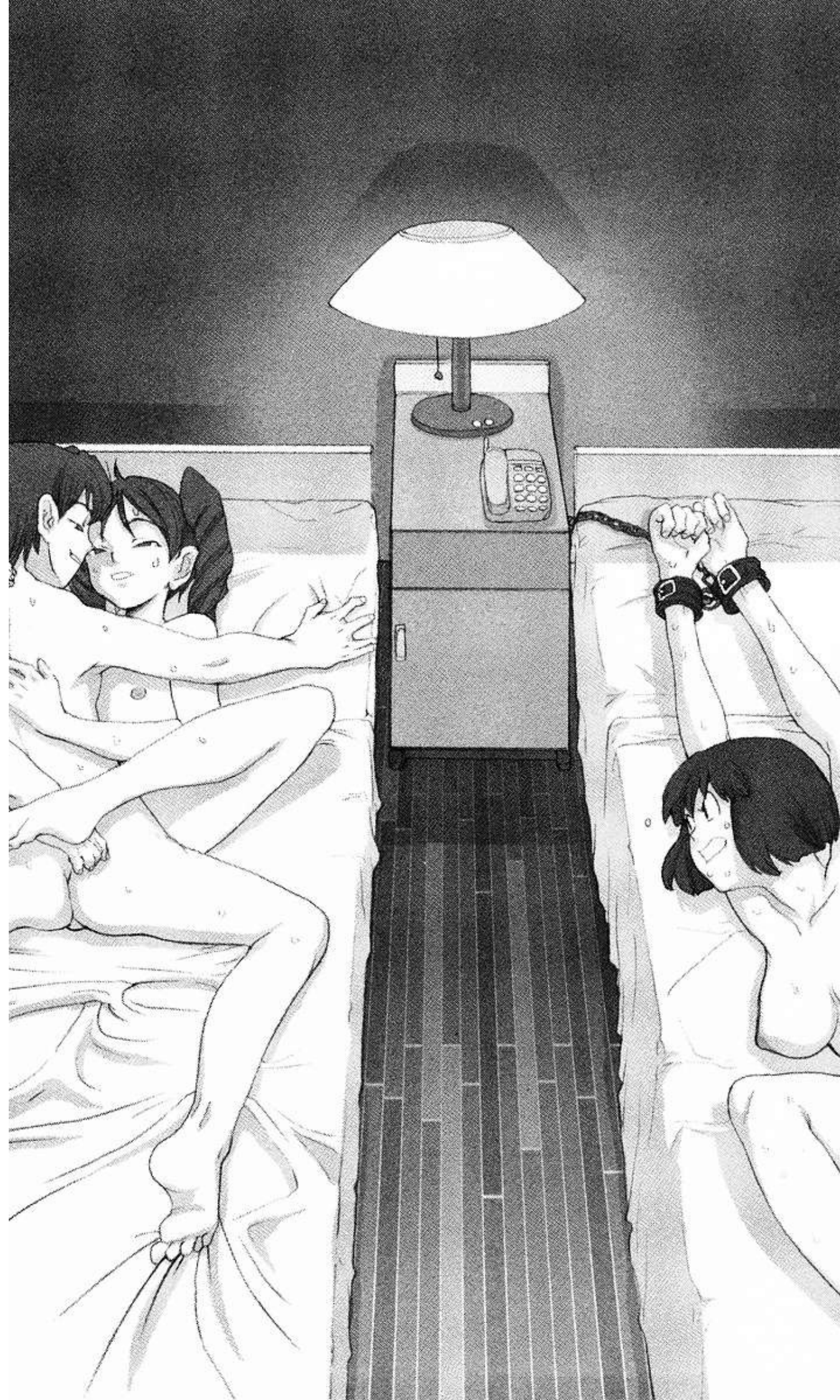
口元に薄笑いを浮かべた明生に言い返されて、冴子は言葉を詰まらせた。

「ねえ、お兄ちゃん。早くつづきいー」

冴子が黙ってしまったことで、話は終わったと判断したのか、兄に組み敷かれたままの梢が中断した行為の再開をねだった。それに合わせて、見かけよりはずっと貪欲なスリットが、しっかりと啜えこんだ勃起をじれたそうに締めつけてくる。

「先生、ちょっと待っててね。梢、すぐにイカせちゃうから」

とりあえず妹の要求を満たしてやらなければ、おさまりがつかないと判断したのか、明生は気軽な調子で言うと、未成熟な肢体に覆いかぶさった。小休止していた腰が猛然と動きだし、潤滑液まみれのシャフトが機械のように正確なテンポで秘裂に出し入れされる。抽送が再開されると、梢はかわいくあえぎだし、兄の身体の下で身悶えした。冴子が水を差すまでに、少女の身体は充分すぎるほど昂められていたようだ。「すぐにイカせちゃう



から」という明生の言葉は嘘や強がりではないらしく、ほどなくして梢は、なにかに追い立てられるように切羽詰まった反応を見せはじめた。

「どした？　もうイキそうなのか？」

「だって……だって、すごいんだもん。お兄ちゃんのおちんちんとってもおつきくて、それが梢の奥に当たってきて……」

大好きな兄のこわばりに責め立てられて、激しく乱れる自分を恥ずかしく思うのか、梢は羞恥と興奮で目を桜色に染めていた。そうして可憐にあえぐ姿は、とても、嫉妬の炎を目に宿し、冴子をいたぶっていた少女と同一人物とは思えない。

明生は妹の様子から、あとひと息だという感触を得ると、一気に腰の動きを速くした。

「あぁッ！」

元から甲高い嬌声が、さらに一オクターブ跳ね上がり、絶頂の訪れが近いことを告げる。明生はいきり立つ勃起で、完全に開花していない妹の秘裂を乱暴に思えるほどの激しさで突きながら、

「ほら、もうイキそうなんだろ？　だったら我慢しないで、早くイッちゃえよ」

「あッ、イク。イッちゃう。あ、ダメ、イクッ！」

はしたなくイクイクと連発しながら、梢は快楽の階きざはしを駆け足で昇り詰めると、兄の上半

身にしがみつき、汗ばんだ背中に爪^{つめ}を立てた。荒々しかった腰の動きが、電池が切れたようにピタリと止まる。背中の痛みと射精をこらえるために、明生は奥歯を噛み締めた。エクスタシーに達した梢は兄の身体にしがみついたまま、肩口に顔を押しつけている。しばらくのあいだ、ふたりはそのままだった。やがて、明生の背中にまわされていた腕がほどけて、乱れたシーツの上に力なく投げ出される。

「ふう……」

明生は詰めていた息を吐くと、目を閉じて快樂の余韻^{よゐん}に浸っている妹を気づかうように、そろりと身を離す。こわばりがスリットから引きずり出され、鋭角的に張り出したカリが膣口付近の括約筋を通過すると、死んだようにぐったりしていた梢が、ヒクツと身体を震わせた。

クライマックスに射精時特有の痙攣が見られなかったことからわかるように、明生自身はまだ達してなかったらしく、少年の股間では愛液でヌルヌルのペニスが不満げな様子でそそり立っている。明生はそれを隠そうともせず、冴子のほうを向いてベッドの端に腰かけた。さすがに頬を上気させてはいるが、一戦交えたあとの一服でもふかしそうな落ち着きぶりだ。家庭教師の与えるご褒美に目の色を変えていた、やりたい盛りのチェリーボーイとは人が変わったような態度や、梢を絶頂にまで追いやりながら、自分はきわどいと

ころで放出をこらえたことから、明生にとってセックスが手慣れた行為であることがうかがえる。そのことを疑問に思う一方で、短いが、それだけに激しいセックスを見せつけられた冴子は、明生と梢の昂りが伝染したように頬をピンクに染めていた。

「さてと、これでゆっくり話ができるね」

「あんと話すことなんて、なんにもないわ」

冴子はつつけんどんに言ってから、拘束具につながれたチェーンをガチャつかせ、

「それより、これがどーゆーコトか説明してちょうだい」

「え？」

明生は一瞬、なにを問われているのかわからなかったようだ。しかし、すぐに気がついて、

「ああ、それは先生が逃げないようと思って」

「……ってことは、あたしが逃げ出したくなるようなことするつもりなのね？」

近づいたら噛みつくわよ、と言わんばかりの形相で、冴子は明生の顔を睨みつけた。

「や、やだなあー、先生。そんな怖い顔しないでよ」

「なに言ってるの。こっちはクスリで眠らされたうえ、裸に剥かれて縛られてんのよ。怖い顔にもなるっつーのッ！」

冴子にしては、めずらしくもつともな言い分だ。

「まあまあ、先生、落ち着いて」

「これが落ち着いてられますかッ！」

裸で拘束されているにもかかわらず、これから起きることに脅えるどころか、喧嘩腰で喰ってかかってくる冴子に明生が辟易へきえきしていると、ベッドルームのドアが外側から静かに開かれた。

「あ、ママ」

「あら」

部屋の中に入ってきた千春は、冴子が目を覚ましているのに気づいて、ホッとした顔をする。

「よかったわあ。お薬の量、ちよつと多かったみたいで、ひよつとしたらもう目を覚まさないんじゃないかって心配で……」

のんびりとした口調でひどく物騒なことを言うと、明生のそばに身を横たえた梢の姿に目を留めて、

「まあヤダ、ふたりだけで先にはじめちゃってたのね」

自分の息子と娘が身体を交えていた事実に対しても、千春にはまったく動じた様子はない

い。どうやら彼女にとっては、こうしたことは日常茶飯事のようだ。明生のほうもそのように、母親の目から股間の勃起を隠そうともしない。

「梢が早くやろうって、うるさくってさ」

そう言う明生の口ぶりは、さも自分ががつついたんじゃないとも言いたげだ。

「それより、ママも脱いだら」

「そうね」

千春はなんのためらいもなく、息子の目の前で裾の長いワンピースを脱ぎはじめた。下着姿になると、結び上げた髪にちよつと手を当ててから、

「どう？ 今日の下着は明生ちゃんの好きな黒にしてみたんだけど」

白い肌に映える黒いブラジャーとショーツは、カットはそれほど大胆でもないが、レースになっている部分が多く、かなりきわどいところまで透けている。ほどよい肉付きの脚を包むストッキングとガーターベルトも黒で統一されていて、あとこれに毛皮のコートを羽織れば、古いフレンチシネマに出てくる高級娼婦のできあがりだ。

「とつてもすてきだよ、ママ」

「そう言ってもらえとうれしいわ」

全裸でいるよりもはるかに淫らな下着姿を息子にほめられて、千春は顔をほころばせた。

しかし、すぐに真顔に戻り、

「ところで、明生ちゃん。先生に、もう説明はしたの？」

「いや、今しようと思ってたところんだけど、先生、なんか怒っちゃってて」

睡眠薬で眠らされているあいだに裸にされて、拘束されたことに腹を立てるのが、理不尽なことでもあるかのような口ぶりだ。もし、手足が戒められていなければ、冴子は明生の口元を、いやというほどつねりあげていただろう。

「説明はママからしてよ」

明生は渡りに船と、冴子の相手を母親にバトンタッチする。

千春は冴子の右の枕元に腰を降ろすと、彼女の顔を覗きこみ、

「こんなことになってしまって、ほんとにごめんなさいね」

そう思うんだったら、さっさと鎖を外してよ……と、冴子は思う。

「でも、半分は先生がいけませんのよ。急に辞めるなんておっしゃるから、わたし、すっかりあわてちゃって、つい……」

つい、で睡眠薬を盛られたのでは、冴子としてはたまったものではない。

「と、とにかく、なにがどうなってんのか、ちゃんと説明してください」

「ええ」

と千春はうなずいてから、

「じつは先生に、わたしたちの仲間になっていたいただきたいんですの」

「仲間？ 仲間って、なんの？」

「それは……」

言いよどむ千春にかわって、明生があっけらかんと言う。

「簡単に言うと、セックスフレンドってとこかな」

「はあ？ せつくすふれんどお？」

素っ頓狂^{す どんきやう}な声をあげて明生の顔をまじまじと見た冴子の表情が、ハッと強ばった。

「まさか、最初っからそのつもりで」

冴子の推測を裏づけるように、明生がニヤツと笑う。

「そーゆーコト」

冴子はショックで頭の中が真っ白になった。なにかも、最初から仕組まれたことだったのだ。すべては高額^{たか}のバイト代につられたバカな女子大生を、爛^{ただ}れた近親相姦の輪の中に誘いこむための罠^{わな}だったのだ。

だが、そうすると、明生のあの急な成績アップはどういうわけなのだろう？ 当然、なにかからくりがあるのだろうが、いったいどうすれば、中間考査で赤点まみれだった劣等

生が校内模試でベストテンに入れるのか？ ひよつとして、家庭教師としてやってきた獲物をだますため、中間考査ではわざと悪い点をとっていたのだろうか。いや、違う。そんな、学校の成績に傷をつけるようなことをせずとも、急に成績がよくなったように見せる方法がある。

よくよく考えてみると、最初に見せられた学校のテストが本物だという証拠はなにもない。元からがパソコンやワープロを使って作製してあるものだけに、それなりの機材があれば似たようなものを作るのは簡単だ。そうやってこしらえた二セのテスト用紙に間違った解答を記入し、もっともらしく採点すれば、赤点テストのできあがりだ。一方、コンピューター処理された校内模試の成績シートを改竄^{かいざん}するのは、さすがに難しいはずだ。おそらく校内模試の結果のほうが、明生の本当の実力なのだろう。

そう考えると、ご褒美が鼻先にぶら下げられたとたんに、明生の学力が飛躍的に向上した（ように思えた）のも不思議でもなんでもない。明生にしてみれば、単に実力を発揮しただけにすぎないのだ。いや、それどころか、あまりいい点を取りすぎないよう手かげんしていた節すらうかがえる。ナイスバディをエサにして、やりたい盛りの少年を操っていたつもりが、操られていたのは冴子のほうだったのだ。明生がご褒美のかかったテストでいい点をとるたびに、あたしの魅力もたいしたもんねと、悦^{えつ}に入っていた自分が死ぬほど

恥ずかしい。

きつと、明生が風邪を引いたというのも、子供たちがアイドルグループのコンサートに行ってしまった、千春とふたりつきりになったのも、全部計画どおりのことだったに違いない。一杯どころか、二杯も三杯も喰わされていたことがわかつてくると、冴子はこれまでにいのように手玉にとられていた悔しさではらわたが煮えくりかえる。

「あ……あたしをだましてたのね。最初から、ずっと……ずっとだましてたのね！」
冴子が子供が見たら小便を漏らしそうな形相で睨みつけてくるのを、明生は柳に風と受け流す。

「だって、しょうがないじゃん。いきなりエッチ仲間になろうって言われたら、やっぱり抵抗あるでしょ？」

「あたりまえよッ！」

「だから、ボクたち全員と既成事実ができちゃえば、先生もすんなり仲間に入ってくれるんじゃないかって思ったんだ」

明生はだましていたことを謝るところか、むしろ得々として計画の意図を語った。どうやら、今回の計画の立案者はこの少年のようだ。明生は冴子を仲間に引きずりこむための計画が、いまひとつうまくいかなかったことが残念らしく、

「ほんとは、もっとゆっくりやるつもりだったんだよなあ」

明生につづいて、梢、千春と不適切な関係に落ちてしまったことで、能天気な冴子もさすがにまずいと思い、家庭教師を辞めると言い出す結果になってしまったが、当初の計画どおり、もっとゆっくりとしたペースで事が運んでいけば、なりゆきに流されて、明生たちの誘いに首を縦にふっていた可能性はかなり高かったような気がする。

「やっぱり、ママがあせったのがよくなかったんだよ」

「だって、先生つらとつてもかわいくて、わたし、我慢できなくて」

千春はあらゆるものをとろかすような色っぽい目を冴子に向けて、

「ね、先生。今までだましてたことは謝りますわ。でも、誤解しないでね。あなたのこと妹にしたいって言ったのは本当なのよ」

じっと見つめられると、怒りと拒絶に塗りこめられた心に亀裂が生じそうになり、冴子は千春の顔から目をそらせた。

「と、とにかく、あたしはあんたたちの仲間になんか入りませんからね」

千春の視線から逃れるように、冴子は明生のほうに首をねじ曲げて、

「だいたい、なんであたしがあんたたちの、その……キンシンソーカンにつき合わなくちやなんないのよ。そんなの絶対、やだからね！」

「えーッ、なんでだよぉ？ 悪いハナシじゃないと思うけどなあ。ちゃんとバイト代も出すしさぁ」

え、バイト代……。

カネのハナシが出て、一瞬ぐらつきかけた気持ちを、冴子はみずから叱咤するように、
「バカ言わないで。い、いくら出されても、ヤなモンはヤなんだから」

「これまでだって、家庭教師つつって、結局エッチしてただけなんだしさ。やることは変わらないんだからいいじゃん」

「よかないわよ！」

指摘されたことが真実だけに、否定する語気が強くなる。

「もういいじゃない」

いつの間にか快樂の余韻から醒めていた梢が、明生の肩口から顔を出し、

「ヤダって言うてんなら、無理に誘うことないわよ」

梢は兄の身体に腕をまわすと背後からおぶさるようにして、薄い胸のふくらみを背中に押しつけた。彼女の冴子を見る目には、あんなにか呼びじゃないのよと言わんばかりの敵意が見てとれる。どうやら梢は、冴子を自分たちの仲間にするにあまり前向きではないらしい。ほかのことはさておき、少女が冴子に嫉妬の炎を燃やしているのは本当の

ようだ。

「それより、ね……」

梢は明生の股間に手を伸ばし、多少硬度は減じたものの、しっかりと屹立したままのペニスに指をからめた。

「……って、さっきイカせてやったばかりだろ」

「でも、わたしまだ、中に出してもらってないよぉ」

梢は頬をふくらませると、乾きはじめてた愛液でコテコテになったシャフトの形をたしかめるように撫でさする。そうされると、さっき一度、放出の機会を逃したペニスは太い静脈を浮き上がらせて、蓄積されたエネルギーの行き場を求めてひくついた。

冴子が自分たちの仲間になるのを承諾すれば、男女比が三対一の4Pになる。さっき明生が梢の中に放出しなかったのは、それを見越して、精液を温存しておこうという目論みだった。しかし、勃起した乳首の存在をことさらアピールするように、可憐なふくらみを背中に押しつけられたうえ、臨戦態勢のこわばりをいじくられては、中出しのおねだりに応じずにすまずのは無理と言うものだ。

「しょうがないなあ」

明生は結局、梢に押し切られたかたちでベッドに上がり、小柄な肢体に覆いかぶさろう

とした。しかし、少女はそれを押しとどめ、

「あ、待って。わたしが上になる」

「オッケー」

仰向けになった明生の腰にまたがると、梢は片方の手で秘裂を大きく割り開き、まるで兄に見せつけるように、新鮮な肉色をした粘膜を剥き出しにする。下腹に張りついた肉茎に指を添え、シャフトが垂直になるように引き起こすと、はちきれそうな亀頭を膣口にあてがった。ねっとりとしたぬかるみの入り口が、ペニスの先端に吸いついてくる。

「覚悟してね。今度はわたしがお兄ちゃんをイカせちゃうんだから」

梢は年に似合わないコケティッシュな笑みを浮かべると、シャフトをつかんでいた手を離し、思い切りよく腰を沈めた。

「んあッ！」

真下から兄のこわばりに貫かれ、少女が背をそらす。まだまだ未開発の底の浅い秘裂では、最大限に勃起した肉茎を全部収めることはできないようで、付け根の部分が少しはみ出していた。

「やっぱ、お兄ちゃんのおつきい」

梢は明生の胸板に手をつくくと、片手でつかめそうなヒップをシャフトに沿って持ち上げ

る。ぬかるみの中から勃起が姿を現すにつれ、カリに膣壁を強くこすられて、少女は内臓を引きずり出されるような感覚を味わった。キュツと締まった膣口が雁首のくびれに達したところで折り返し、そこから慎重に腰を沈めると、弾力の奥に硬さを秘めた龟头が狭い肉路を押し割って、身体の中にもぐりこんでくる。

「あらあら、まだ、先生とお話しの最中だっていうのに、しょうのないコたちねえ」

息子と娘のセックスを目の当たりにしても、千春には毛ほども動じた様子はない。まるで、宿題そっちのけでテレビゲームに興じる子供たちを見ているような顔だ。

最初のうちはいささかぎこちなかった騎乗位での抽送も、ふたりの結合部に潤滑液がまわるにつれて、だんだんスムーズになってきた。調子をつかんだ梢は、リズムカルに腰を動かしながら、

「ね、お兄ちゃん。梢の中、気持ちいい？」

「ああ。とってもキツキツで、チンポちぎれちゃいそうだよ」

「うれしい」

大好きなお兄ちゃんを気持ちよくすることに、少女自身も悦びを感じているのか、興奮で紅潮した顔に母親譲りの淫蕩な笑みが浮かんだ。

「それじゃあ、もっと気持ちよくしたげるね」

梢は上体をさらに前傾させて、腰の動きを速くした。ふたつに分けて頭の両脇でまとめた髪が、チアガールの持つポンポンのようにかわいく揺れる。

「ふふ、梢ったら、はりきっちゃって」

千春は近親相姦に耽る自分の子供たちに向けていた目を冴子に転じると、

「ね、センセ。さっきのお話なんですけど、やっぱりダメかしら」

「なんと言われても、あたしは絶対にイヤです」

「そんなつれないことおっしゃらずに、わたしたちと一緒に愉しみましょうよ」

千春の甘い誘いに、冴子は背筋がゾクリとなった。

「先生さえよろしければ、このあいだのときよりも、もっと気持ちいいこととしてさしあげましてよ」

あのとときよりも、もっとキモチイイコト……。

冴子の脳裏に、今、自分が身を横たえているのと同じベッドで、千春と身体を交えたときのことが甦る。それだけで、まるで条件反射のように秘裂の奥が疼きだすところは、さながら《パプロフの牝犬》といった感じだ。

「おッ、おことわりします！」

千春の誘いを断る冴子の語気は、噛みつくように荒かった。そうなったのは、こうして

強く否定しないと、甘美な誘惑に負けそうになるからだ。だが、そんな冴子の心中を、千春はどうに見透かしているのか、余裕のある声でささやきかけてくる。

「ほら、見て」

と、冴子の視線を隣のベッドにいざなうと、

「稍つたら、あんなに激しく腰をふって……よっぽど気持ちいいんですわ」

冴子への対抗心がそうさせているのか、少女の腰づかいは、見るからに未成熟な肢体には似合わない激しいものだった。

「ね、先生。見てるだけで、こっちまでほしくなってきたやいませんか？」

「そんな……そんなことはありません」

「ウソ」

懸命な否定の言葉を千春は一蹴^{いっしゅう}する。

「隠してもダメですわ。ここにちゃんと証拠がありますもの」

千春の右手がすいと伸び、知らぬ間に勃起していた冴子の乳首を軽くつまんだ。とっさのことで、思わず声が出てしまう。

「あッ」

千春は親指と中指でつまんだ欲情の証を、軽くひっぱった。

「ここがこんなに硬くなってるのは、興奮している証拠じゃありません？」

返す言葉がなくて、冴子は唇を噛み締めた。前々からわかっていたことだが、あまりにも節操のない自分の身体に、さすがに腹が立つ。

「恥ずかしがることなんてありませんわ」

と言いながら、千春がブラジャーを外し、豊かな乳房をあらわにする。

「わたしだって、ほら……」

下着の締めつけから解放されて、くつろいだ様子のふくらみの頂^{いただき}では、冴子のそれと競うように乳首が勃^はつっている。千春はますます激しさを増す、明生と梢の交わりに目をやって、

「あんなの見せられたら、こうなって当然ですわ。だから先生も、もっと自分に素直になつて」

冴子が身動きできないのをいいことに、千春は戒められた裸身をさわさわと撫でまわす。羽毛みたいに軽やかで、それでいて深い官能を秘めた、音楽にたとえるならボサノヴァのようなタッチに肌が内側から火照り出し、冴子は全身の毛穴が開くような感覚に囚われた。だが、乳房のまるみから脇腹、内腿へと這う手のひらは、以前、このベッドで千春と身体を交えたときと同じで、なかなか肝心の部分にふれてこない。

犯罪まがいの不当な拘束や明生たちの勝手な言い草に腹を立て、千春の愛撫を拒絶しようとする一方で、冴子の肉体は持ち主の意志に逆らって、秘裂にじんわりと愛液をにじませる。すると、蜜の匂いを嗅ぎつけた蝶ちようのように、千春の手がすばやく股間に伸びてきた。手のひらに恥毛の先端だけをふれさせて、繁みをすうツと撫でてゆく。

「んんッ！」

押し殺したうめきをあげると、冴子は無意識のうちに、もつと強い愛撫を求めて恥丘を迫り出した。しかし、そうした無言の要求を無視して、千春の手は腹部から上半身のほうへと逃げてゆく。そのことに抗議して身悶えすると、拘束具から伸びるチェーンがチャリと鳴り、冴子にはそれが自分の浅ましさを嘲笑っているように聞こえた。

潤みの源だけを除いて、全身をくまなく撫でまわされることで、そこへの愛撫の欠落がより際立つてくる。

早くあそこをさわってほしい。あのとときみたいに、オ〇〇コにいっぱいやらしいことしてほしい。

淫らな期待は、リビングのソファで千春の指戯に翻弄されたときの記憶を推進剤にして際限もなくふくらんでいき、さらにはそれが現実となることを渴望かつぼうさせる。手足を戒められていたからいいようなものの、もし、そうでなければ、もどかしい愛撫に耐え切れなく

て、自分の秘裂に指を伸ばしていただろう。

一方、隣のベッドでは、中出しをせがむ妹の腰づかいに応えて、明生も腰を動かしてはじめていた。投げ出していた足を引き寄せ膝を立てると、痛いくらいに勃起したペニスで狭いスリットを突き上げる。

「あッ、あッ、あッ……」

シャフトに沿って小刻みに上下していた腰の動きが乱れた。

「だ……ダメよ、お兄ちゃん。そんなにされたら……そんなに下から突かれたら……」

「どしたんだよ、梢？　ボクをイカせてくれるんじゃないのか？」

と意地悪く言いながら、下から腰をつかう明生はまだまだ余裕の表情だ。兄の勃起に責められて今にもイキそうになるのを必死にこらえ、梢は乱れた腰の動きを立て直す。明生を射精に導くには、ここからさらに激しく腰を動かさねばならない。だがそれは、梢にとっては諸刃の剣だもろは つるぎった。なぜなら、そうした結果、自分のほうが先にイッてしまう可能性が充分にあるからだ。しかし、ほかに方法がない以上、それを覚悟で腰の動きを加速させるしかない。

梢は自分が迫りくるエクスタシーに追いつかれるのと、明生の勃起がスペルマをほとばしらせるのと、どちらが早いか競争するように小ぶりのヒップをふりたてた。眉根を寄せ、



こみ上げる悦びの声をこらえる少女の顔からは、兄のスペルマを子宮の入り口で受け止めるまでは、絶対にイカないという固い決意が見てとれる。

「梢、オ○○コの中がヒクヒクしてきたぞ。そろそろイキそうなんじゃないか？」

「まだ……まだ、イカないもん。お兄ちゃんが中に出してくれるまで、梢、絶対にイかない」

妙なところで意地を張る妹に対抗してか、明生は腹筋に力をこめて、きついぬかるみをズンズンと突き上げる。だが、梢にとって激しい抽送が諸刃の剣であるように、明生にとってもそれは同じだった。妹をイカせようとするあまり、マズイと気づいたときには、自分のほうが引き返し不能な地点にきてしまっていた。

奥歯をきつく噛み締めて、なんとか射精をこらえようとする。しかし、こみ上げてくるスペルマを、これ以上堰き止めておくことはできそうにない。どうにもダメだと判断すると、明生は自分の負けを認めて、

「梢……も、ダメ。出そう」

「イキそうなのね、お兄ちゃん。梢のオ○○コにセーシ出しちゃいそうなのね？」

待ち兼ねた膣内射精が迫っていることをたしかめるように訊く梢。しかし、もはや明生には、それに答える余裕はなかった。妹の可憐な秘裂を壊す勢いで、強烈なストレートを

叩きこむ。

「早く……早く出して。梢の中に、お兄ちゃんのセーシいっぱい出してッ！」

中出しを強く求める一方で、激しすぎる突き上げから無意識のうちに逃れようとする梢のヒップを明生は両手でつかむと、自分の股間に引き寄せた。同時に足を踏ん張って、ブリッジをするように腰を突き上げる。妹の身体を乗せた腰がわずかに浮いて、勃起が根元まで秘裂にめりこんだ。

「ひあッ！」

「はうッ！」

梢の悲鳴と明生のうめきが重なり、直後に子宮口にぶちあたった亀頭が弾けた。鈴口から女体のいちばん深いところに向けて、煮えたぎるスペルマがほとぼしる。

びゆくンッ！

スペルマの最初の一撃を子宮に浴びると同時に自分も絶頂に達した梢は、見えない手で頭をつかみあげられたように大きくのけぞった。めくるめく悦楽の中、垂直に起こした上体をピンと硬直させて、待ち焦がれた兄の精液が注がれるのを身体の奥で感じとる。

出てる。お兄ちゃんが、梢の中で射精してる。オ○○コの中でおちんちんがビクッとするたびに、熱いのがいっぱい出てくる。

激しい射精の衝撃にガクガクと腰を痙攣させて、妹の身体を揺さぶりながら、明生は両手でつかんだヒップのまるみに指を喰いこませた。少年のペニスはいきつい締めつけをふりほどこうと何度も何度もしゃくりあげ、狭いぬかるみの中にあふれるほどの白濁液をぶちまける。

勃起の脈動がおさまると、それを膣壁で感じとったのか、強ばっていた梢の全身から力が抜けた。のけ反っていた反動でガクンと前に倒れこみ、兄の胸に顔をうずめる。少女の秘裂には太い肉茎が深々とはまりこんでいて、その周囲にぴっちり巻きついた大陰唇は血の気を失うほど引き伸ばされていた。注ぎこまれた白濁液が愛液に混じって徐々ににじみ出し、少年の陰囊いんのうにまで垂れてくる。

荒かった息が静まると、明生は梢とつながったまま身体を半回転させ、下になった妹から身を離れた。仰向けになった少女の秘裂から、粘液まみれのペニスがずるりと抜ける。それは放出前とさほど変わらぬ状態を保っていて、妹の愛液に濡れた繁みから、すつくとそそり立っていた。

梢は体内に兄の精液をたっぷり注ぎこまれた満足感からか、安らかな表情で目を閉じている。薄い胸のふくらみをゆるやかに上下させているほかは、ピクリとも動かない。硬いこわばりで突き荒らされた秘裂からは、逆流したスperlマがねろねろと垂れ、なんとも

淫らな有り様だ。

明生は冴子の横たわるベッドの足元をまわって千春のところまでくると、立ったまま母親のほうにスペルマと愛液でベトベトになった勃起を突き出した。

「ね、ママ。きれいにしてよ」

そうするのはいつものことなのか、千春は明生の足元にひざまずくと、雨の日、外から帰ってきた子供の泥で汚れた足の裏をふいてやるような気軽さで、息子の牡器官に舌を伸ばした。溶けかけたアイスクャンデーにするように、シャフトの根元から先端に向けて舌を這わせて、ぬめりを舐めとってゆく。もちろん、そのついでに付属のふくろをきれいにすることも忘れない。最後の仕上げに亀頭を含み、尿道の中に残っているスペルマを吸いとってやる。

汚れを舐めとられてすっかりきれいになった勃起は、後始末のためだけとは思えない母親のていねいな舌づかいによって、放出前と変わらぬ勢いを取り戻していた。こうしてふたたび臨戦態勢が整うと、明生はベッドに上がって、チェーンと拘束具によって無理やり開かれた冴子の脚のあいだに身体を入れる。

冴子はチェーンを伸びきらせ、精一杯股を閉じようとしながら、
「ちよ、ちよっと、なにするつもりなの？」

「大丈夫、先生がいいって言うまで入れたりしないよ」

そう言うところを見ると、明生には冴子に自分の勃起をおねだりさせる自信があるようだ。ほころびかけたスリットが透明なシロップをよだれのようににじませているのを見て、口元に相手を見くびった笑みを浮かべる。明生はシートに片手について、冴子の身体にかば覆いかぶさると、もう一方の手で自分のペニスを握った。そり返ったシャフトを下に向け、亀頭を秘裂にふれさせる。

「んんッ」

接触した箇所から強い電流が走ったように、冴子が身体を震わせる。愛撫を求めて疼くところに、よりによって勃起したペニスの先でタッチされたのだから、たまったものではない。空腹のとき、鼻先に好物をぶらさげられたようなものだ。

「ね、センセ。ほんとはチンポほしくてたまないんだろ？ 我慢しないで、そう言つてよ。そしたら、すぐにコレ入れてあげるからさ」

明生は握ったシャフトを手で動かして、勃起の先端でスリットをなぞる。

「ほら、オ○○コがヒクヒクして、チンポほしいって言ってるよ」

まさにそのとおりだ。もし、冴子の秘裂がしゃべれたら、大声でわめきたてていただろう。冴子は人類の女性器に発声機能がないことを、いるかいなかかわからない造物主に感

謝した。

明生はシャフトから手を離すと、今度は腕立て伏せをするような姿勢になって、下腹に張りついた勃起を秘裂に押しつけてきた。畝うねのように盛り上がったシャフトの裏が、ぬらつくわれめに喰いこんでくる。

冴子は唇をきつく噛み締めて、はしたないおねだりが口から出そうになるのを懸命にこらえた。彼女にしてみれば、これは驚異的な克己心の発揮だった。千春たちの言い分がもう少し身勝手なものでなければ、そして明生の物言いがもう少し小憎らしくなければ、身内で渦巻く欲求に屈していたかもしれない。しかし、怒りと屈辱の大きさが、かろうじてそれを阻んでいた。

「先生、口で言うのがヤだったら、うなずくだけでもいいよ。首を立てにふつてくれたら、それでいいからさ」

しかし、それに対する冴子の返答は、首を横にふることだった。

「チエツ」

すぐにも音をあげるだろうと思っていた獲物の意外に頑かたくな態度に、明生は舌打ちすると、冴子の股間から自分の分身を離れた。だが、ホッとする間もなく、今度は冴子のみぞおちのあたりにまたがってくる。膝立ちの姿勢から腰を降ろしてきたが、体重は左右の膝

にふり分けられているようで、重いと感じるほどではない。

「わかったよ、センセ」

あきらめたように言ってから、明生は冴子の胸の谷間に勃起を挿し入れた。

「そんなにヤなら、オ〇〇コには入れないよ。でも、そのかわりおっぱいでイカせてもらうからね」

「なに勝手なことやってんのよ！ そんなのダメに決まって……」

明生は冴子の抗議を黙殺すると、両手でつかんだ左右の乳房を真ん中に寄せ、今にも跳ね上がりそうなシャフトを挟みこむ。それなりに長さのある明生の勃起も、冴子の巨乳に挟まれると、大半がやわらかなふくらみに埋没してしまう。

「ちよつと、ダメツて言ってるでしょ！ 早くやめなさいよッ！」

明生の傍若無人なふるまいを阻止しようと、冴子は身悶えするが、手足を拘束された状態ではどうにもならない。明生は冴子の声など聞こえぬもののように、腰を動かしはじめた。勃起全体に塗られた千春の唾液と、秘裂にシャフトを押しつけたとき、その裏側になすりつけられた愛液が潤滑剤となり、抽送はいたってスムーズだ。

少年が腰を前に送ると、せめぎあうふたつのまるみを押し割って、亀頭が勢いよく顔を出す。そのとき、恥毛の繁みが乳房の麓にふれるのが少しくすぐったい。突き出された亀

頭はすぐに引つこめられて、乳房のトンネルの内壁をカリが強くこする。ほかでは得られないパイズリならではの感触を愉しみながら、明生は抽送のテンポを上げていった。先端の切れこみからにじむ前ぶれのしずくが、せわしく動く亀頭で塗りひろげられ、乳房の狭間に適度なぬめりを補充する。

こわばりの持つ熱と硬さが心臓のそばで感じられ、冴子は苦しいくらい胸が昂ってきた。見る角度のせいか、胸の谷間から勃起が突き出されると、先端が口元に届きそうな気がする。乳首は今までになく硬くなり、見えない指でつまみあげられているかのようだ。牡器官から発散されるフェロモンが鼻孔をくすぐり、それに誘発されて愛液がさらに分泌される。濡れそぼつ秘裂は、ペニスを入れてほしいのは胸の谷間じゃなくてこっちよ、と言うように疼き、さっき押しつけられたこわばりに対抗して包皮の下から顔を覗かせたクリトリスは痛みを感じるほど勃起していた。

「いいよ、先生。すっげー気持ちいい」

明生はリズムカルに腰を動かしながら、横からわしづかみにした乳房を揉んで、こわばりを包むふくらみに微妙なうねりを与える。硬い勃起で谷間を貫かれると同時に、双球を強く揉みしだかれることは、千春の軽いタッチの愛撫に物足りなさを感じていた冴子の身体を狂おしいまでに火照らせた。

「やっぱ、センスのバイズリ最高だよ」

手と腰を動かしながら、明生がうわずった声で言う。すると、それまで息子のすることを黙って見ていた千春が、

「ママがしてあげるのとどっちがいい？」

「えッ？」

明生は困った顔をしたが、すぐにその場をとりつくろうように、

「どっちも最高だよ」

「まあ」

調子のいい返答をなじるように千春は明生の顔を軽く睨んだが、それ以上追及して息子を困らせることはしなかった。巨乳にしごかれて、苦しげに身悶えしている勃起に視線を落とし、スperlマがほとぼしるのを待ち受ける。

「先生、もうすぐ出そうだよ」

千春の舌と唇で充分に昂められていたせいか、放出のときはあっけないほど早く訪れた。明生の息づかいが荒くなり、腰の動きがいちだんと速くなる。

「先生の顔にセーエキいっぱい出すからね」

囚われの家庭教師の顔を見下ろしながら、明生は勃起の根元で堰き止められていた熱い

とろみを解き放った。悲痛な叫びとともに、背中を鞭で打たれたように身体を震わせる。指が乳房に喰いこみ、胸の谷間から突き出された亀頭が、ぶわツとふくらんだ。

びゅるるッ！

鈴口から飛び出たスペルマの第一弾が、白く濁った尾を曳いて宙を舞う。それは、冴子があわてて顔を背けたために強く浮き出た顎のラインに命中すると、びちゅツとつぶれて飛沫を散らし、数滴が目尻の近くにまで飛んだ。立てつづけに撃ち出される白濁液が、上気した頬から首筋、そして鎖骨のくぼみにかけて降り注ぐ。

明生は指と指のあいだから白いふくらみをはみ出させ、瘡のように身体を痙攣させていた。脈打つ勃起から、とても二度目とは思えないおびただしい量の精液が撒き散らされる。それがおさまると、少年はずっと詰めていた息を吐き、乳房をわしづかみにしていた手をゆるめた。両側から寄せた胸の谷間から肉茎をゆつくりと引き抜いて、精液を最後の一滴までしぼり出す。強くつかまれていたせいで、うつすらと手形のついた乳房から手を離すと、明生はベッドから降りた。しかし、射精直後の虚脱感で足をふらつかせ、カーペットの上にくずれるように腰を落とす。本体がその有り様なのに、股間の分身だけは二度の射精をもつとせず、先端の切れこみに白く濁った露を宿らせて硬く屹立していた。

「あらあら、大変」

スperlマまみれになった冴子の顔を見て、千春が声を張り上げる。

「明生ったら、先生のお顔をこんなに汚して」

実際、冴子の顔面は大変なことになっていた。盛大にぶちまけられたスperlマが顔の右半分をべっとりと汚し、ツヤツヤとした白濁液が鎖骨のくぼみに溜まっている。さらには、ペニスを引き抜くときに付着したものが、胸の谷間にもそれがなすりつけられていた。むせ返るような青臭い匂いが鼻腔を満たし、頬にへばりついたいちばん大きな汚れから伸びた白い触手が、すべらかな肌をのろのろと這ってゆく。

「ちよっとお待ちになってね。すぐにきれいにして差し上げますわ」

どこかしら楽しそうな響きを帯びた声音で言うと、千春は冴子の顔に自分の顔を近づけた。

えッ？ まさか……。

冴子が驚きの声をあげるより早く、千春の唇がスperlマに汚れた頬に押し当てられる。どうやら、さつき息子の勃起にしたように、舌と唇で後始末をしてくれるつもりようだ。千春は薄く開いた唇の隙間からチロリと覗かせた舌先で、白濁液を舐めとってゆく。顔半分に飛び散ったスperlマを一滴でも残してはもったいないとでもいうように、丹念に舌を這わせるそのさまは、仔猫の毛づくろいをする母猫を思わせた。



どう対応していいかわからなくて、冴子はされるがままになっていた。顔中を這う唇が口元をかすめると、ひどくドキリとしてしまう。だが、千春はそこについた白いしずくを舐めとっただけで、唇を重ねてきはしなかった。決してキスを求めていたわけではないはずなのに、はぐらかされたような気分になる。そうやって顔を舐めまわされているうちに徐々に緊張が解けてきて、胸の昂りはそのままに、冴子は不思議な陶醉感とうすいかんに囚われた。頭の中に甘い蜜を流しこまれたようになり、なにもかも千春に委ねてしまいたくなる。

撒き散らされたスpermの跡をたどって、首筋から鎖骨のくぼみに達した唇は、そこに溜まった白濁液を吸いとると、さらに進んで胸の谷間に這ってきた。千春は双球に顔をうずめると、舌尖ですくったジェル状の精液を飲み下す。息子がしかした粗相の後始末がすむと、彼女は冴子の顔に精液の匂いがする息を吹きかけながら、

「さあ、これですっかりきれいになりましたわ」

礼を言うのも妙な気がして、冴子は無言のままだった。

千春は優雅な身ごなしで立ち上がると、ベッドのそばにへたりこんでいる明生のほうを向き、

「ねえ、明生ちゃん」

「なに？」

「ママ、明生ちゃんのおちんちんがほしくなっちゃったわ」

臆面もなくそう言うのと、千春は実の息子の若い肉茎に視線をからみつかせた。

「いいよ」

梢のときと一緒に、これもいつものことなのか、明生は母親の誘いにいとも気軽に応じて立ち上がる。その態度はあっけらかんとしていて、母子相姦に対する罪の意識は微塵もないようだ。

「どんなカッコですか？」

と訊かれると、千春は明生に背中を向けて壁に手をつき、ヒップを突き出した。透き通るような肌の白さと、まるみにびったりと張りついた黒いショーツが絶妙なコントラストを成していて、たまらなく煽情的だ。千春が首をねじって、背後に立つ息子に媚を含んだ眼差しを向ける。

「今日はどうしろから入れて」

明生は誘うように突き出された千春のヒップの真うしろに立つと、左手の親指でショーツの股布を片側に寄せた。剥き出しにされた秘裂は、すでに愛液をにじませている。右手の親指を大陰唇にかけると、明生は下まぶたをひっぱるような感じでシェルピンクの粘膜を露出させた。母親の膣内が透明な蜜でぬらついているのを見ると、少年はあきれたよう

に、

「なんだ、ママ、もうグチヨグチヨじゃん」

「しょうがないじゃない。明生ったら、梢とあんなに激しくするんですもの。あれ見せられたら、誰だって濡れちゃうわ」

自分の秘部がはしたないほど濡れているのを息子に指摘され、千春は頬を朱に染めた。

「それに、明生ちゃんが先生の顔にいっぱい出したの見たら、もう我慢できなくて」
本当に我慢できないのを証明するように、膣口から淫らなシロップが垂れてくる。

「お願い。明生ちゃんのおちんちん、ママにちょうだい」

大陰唇をめくっていた右手をシャフトに添えると、明生は勃起の角度を調節し、粘膜の狭間に龟头をもぐらせた。千春はわずかなうめきを漏らし、ヒップを緊張させる。

明生は粘膜の狭間を勃起の先端でまさぐって膣口を探り当てると、

「いくよ、ママ」

と、ひと声かけてから、勢いよく腰を進めた。ほどよく熟した秘肉はとろけるようにやわらかで、肉茎は根元まで呑みこまれてしまう。

「はあぁん」

千春はなまめかしい吐息をつくと、重いものでも乗せられたように背をたわませた。ガ

「ターベルトに飾られたウエストを両手でつかむと、明生は自分の恥毛の繁みが母親の会陰部にふれるほど、ぬかるみに深く勃起を埋没させる。しばらくは膣内の感触を愉しむようにじっとしていたが、

「早く……早く、動かして」

と催促されて、抽送を開始した。ゆっくりと腰を引くにつれ、膣内の空気圧が下がり、内壁がシャフトの側面に吸いついてくる。それはまるで、せっかく啜えこんだ勃起を逃すまいとしているかのような。愛液にぬらつくシャフトは秘裂から抜けそうになったところで折り返し、ふたたび根元まで挿入される。明生の腰づかいは、冴子に見せつけるように大ぶりだった。どうやら、立ったままでの後背位という室内でするにはいささか不自然にも思える体位を選択したのは、彼女の目を意識してのことらしい。

チンポが……ビンビンのチンポが、千春さんのオ○○コに出たり入ったりしてる。

目をそらそうとしても、見えない手で頭を押さえられているように、冴子はふたりの結合部から視線を引きはがすことができなかった。背後から息子のペニスに貫かれた千春の下半身を飾る黒いショーツとガーターベルトは、母子相姦という背徳行為に相応しく、淫靡なイメージをいや増している。

「いいわ……明生ちゃんのおちんちん、とっても硬くてすてきよ」

「ママのオ○○コもすてきだよ」

明生はそのすてきなところにすてきなモノをゆつくり出し入れさせながら、

「梢のもキツキツでいいけど、ママのはチンポ動かすとヒダヒダがからみついてきてたまらないよ」

すでに二回放出したあとなので、がつつく必要もないのだろう。明生は突き入れた亀頭をさらに奥へと誘いこむ貪欲な襲の動きを味わうように、肉茎をゆるいテンポで往復させる。だが、千春のほうは、そうしたのんびりとした抽送では物足りないらしく、じれったそうにヒップをくねらせた。

「明生ちゃん、あんまりじらさないで。もつと……もつと激しくして」

明生が母親のおねだりに応えて腰の動きを速めると、少年の股間がヒップのまるみにぶつかって、手拍子のような音がした。下腹が打ちつけられるたびに、震動が上半身にも伝わって、重たげな乳房がたぶたぶ揺れる。やわらかさを誇示するような揺れに誘われて、明生は、幼いころ、ただ空腹を満たすために吸いていた乳房に右手を伸ばした。手に余るサイズの巨乳をわしづかみにし、荒々しい手つきで揉みしだく。

「あぁん」

むずかるような声をあげ、千春は淫らに身をくねらせた。責められる一方だったヒップ



が、なにかをこねるような動きを見せて、秘裂に突き入れられるシャフトを揉みねじる。ぬかるみの好色な蠢きに煽られて、明生はピストン運動を加速させた。こわばりが柔肉をえぐるたびにスリットから愛液があふれ、揉まれていないほうの乳房の揺れが激しくなる。この調子で抽送をつづければ、千春が絶頂に達するのは時間の問題だろう。だが明生は、そのままクライマックスに向かうと思わせて、不意に腰の動きをスローダウンさせた。

「んー」

千春は不服そうに鼻を鳴らすと、激しい突き入れをせがむようにヒップを押しつけてきた。それを狙いすましていたように、明生は腰の動きに勢いをつけ、秘裂の奥に強烈な力ウンターを叩きこむ。

「はひッ！」

鋭い悲鳴をあげてのけぞった千春をストレートの連打で崖^{がけ}つぷちに追い詰めると、少年はあとひと息というところで、また攻撃の手をゆるめた。抽送のテンポを女体の熱が冷めない程度に保ち、千春がじれったそうなそぶりを見せると、ふたたび腰の動きを激しくする。母親にしこまれたのか、緩急を心得た明生の腰づかいには、とても十代の少年のものとは思えない。

「もう、ダメ。立ってらんない」

せわしない息の下から言うと、千春は壁面を手のひらでこするようにして、ズルズルと腰を落としていった。明生は乳房から手を離すと、母親の膝がくずれるのに合わせて自分も膝を折る。そうしてカーペットに両膝をつくると、四つん這いになった千春のウエストをつかみ、中断していたピストン運動を再開させた。

母親の熟れた女体をいたぶるうちに明生自身もすっかり昂っていたようで、今回の抽送はそれまでと違い、やみくもに激しさを増してゆく。背後からの力強い突きに耐え切れなくなった千春の腕がくずれ、彼女は床につつぶした。頭的位置が下がったことで、高々と掲げられたヒップに、勢いのついた股間が容赦なく打ちつけられる。

しっぽを引っ張られた猫のようにカーペットに爪を立てた千春の唇からは、浅ましいあえぎがひっきりなしに漏れ、硬いこわばりで突きまくられる秘裂には、片側に寄せられたショーツの股布がよじれて斜めに喰いこんでいた。明生の腰の動きに合わせて、銚^{もり}の先端のように張り出した亀頭のエラが柔肉をえぐり、ねっとりまとわりついてくる粘膜をわれめから引きずり出そうとする。

「明生ちゃん、お願い、もうイカせて。でないと、ママ、おかしくなっちゃうわ」
「いいよ、ママ。ボクも、もうすぐイキそうだから」

ガーターベルトを着けたウエストに明生は指を喰いこませ、下半身のギアをトップに入

れた。

「すごいわ、明生ちゃん。おちんちんがママの中で暴れてて……あッ、あッ！」

「どしたの、ママ？ もう、イッちゃう？」

「もう……もう、イクわ。だから……だから、明生ちゃんも一緒に」

「あッ、ママッ！」

明生は千春の言葉を遮ると、かつて自分を宿していた子宮に向けて、煮えたぎるスペルマを放った。同時に絶頂に達した千春のぬかるみが、根元まで挿入された肉茎を強い力で締め上げる。暴れる勃起のおのきを膣壁で感じながら、彼女は爆発的な悦楽に身を震わせた。膣内粘膜に包まれたペニスがしゃくりあげるたび、パンパンにふくれた亀頭から熱い精液がほとばしり、それが子宮を満たす。

ひととき大きく身を震わせて、最後の一滴を母親の体内に注ぎこむと、明生はエクスタシーのひくつきがおさまらない膣腔からペニスを引き抜き、床に尻餅しりもちをつく。スペルマをほとばしらせたばかりのこわばりは、湯気を立てそうなほど真っ赤になっていた。秘裂から肉の楔くさびが抜かれると、今までそれを支えにしていたのか、突き出された千春のヒップが横倒しになる。腿を揃えて「く」の字に折った脚のつけ根で息づく秘裂から、愛液まじりの白濁液がねろねろと垂れてきた。今日はこれで三度目の射精だというのに、ほとんど濃

度は減じてないようだ。

実の親子のセックスを間近で見せつけられた冴子は、千春のぬかるみから逆流してきたスペルマに、異常なほどの渴望を覚えていた。腿を伝う白濁液を舐めとり、息子のこわばりに突き荒らされた秘裂に口をつけて、中に溜まっているのを吸い出したいという変態的な欲求に駆られる。

セックスしたい。チンポがほしい。噴き出す精液を、オ○コの中に注がれたい。

冴子の中に高々と積み上げられた欲望という名の建造物は、いまや落成を告げるテープカットを待つだけになっていた。

「ねえ、お兄ちゃん」

さすがに間を置かないでの三連射はこたえたのか、床にへたりこんだままの明生のそばに、ベッドを降りた梢がすり寄ってくる。兄の隣に腰を降ろし、愛液でぬめる肉茎に指をからめると、餌をねだる仔猫のように甘ったれた声で、

「次はわたしにちょうだい」

明生はそれには返事をしないで、冴子のほうに物問いたげな視線を投げた。このとき、すでに情欲の虜となった冴子は、本当なら自分の中に注がれるはずの精液を、千春や梢に横どりされたような気になっていた。そして今また、目の前で同じことがくり返されよう

としている。

明生の目が冴子を見ているのに気づいた梢は、兄の勃起をもてあそびながら、「先生のことば、もう、あきらめたほうがいいんじゃない？ あんなにヤダって言うてんだから、どんなに誘っても無駄よ。それより、わたしと……」

いくらやりたい盛りの年頃とはいえ、すでに三回も放出しているのだ。ひよつとすると次が最後のチャンスかもしれない。そう思うと、冴子は矢も楯もた^たまらず、制止の声をあげていた。

「ま……待ってッ！」

大声にびつくりして、ゆるゆるとシャフトをしごいていた梢の手が止まる。

「どしたの、センセ？」

「ほ……ほしいの。言うこと聞くから……仲間になるから、お願い、入れて」

「なによ、今さら。そんなこと言っただって、もう遅いんだからね」

憎々しげに言うのと、梢は兄のペニスにからめた指に力を入れて、とり上げられまいとしっかりと握る。しかし、明生はその手を振りほどいて立ち上がった。

「わかったよ、センセ。センセのオ○○コに、チンポ入れてあげるよ」

「えーッ！」

と非難の声をあげ、頬をふくらませた妹を尻目に、明生はベッドに上がる。鎖で戒められた以上に大きく開かれた冴子の脚のあいだに身体を入れると、右手で勃起の角度を調節し、先端を疼く秘裂にくぐらせた。

「早く……早く入れて。オ○○コにチンポ突っこんでえー」

冴子は人としてのプライドもなにもかなぐり捨てて、浅ましいおねだりをする。明生は勝利の笑みを浮かべると、シャフトから手を離し、腰を沈めた。きばりきった勃起が吸いこまれるように、根元まで秘裂に突き入れられる。

「あぁッ！」

歓喜の叫びを放つとともに冴子はのけぞり、気を失った。どれほどのあいだそうしていたのか、気がつくと、手足の戒めがほどかれていた。ペニス挿入されたままで、明生が顔を覗きこんでいる。どうやら失神していたのは、ほんのわずかなあいだだったようだ。

「入っただけでイッちゃうなんて、よっぽどチンポがほしかつたんだね」

からかうように言う明生の首に、冴子は下から伸ばした腕をまわして引き寄せた。

「わッ！」

驚きの声をあげる少年の唇に、自分の唇を押しつける。

「んんッ！」

突然のキスにとまどう明生の口の中に、有無を言わせず舌が入ってくる。冴子は二本の腕で少年の頭を抱きかかえ、貪るように舌をからませた。そうして明生と抱き合ったまま、身体を転がし、上体を起こしてマウント・ポジションをとる。

「ちよ、ちよつと、センセ……」

顔をひきつらせた明生を鋭い視線で射^い竦^{すく}めると、冴子は鎖から解き放たれた牝獣のように猛然と腰を動かしはじめた。張りのある巨乳を揺らし、飢えた秘裂でしつかりと咥えこんだ肉茎をしごきたてる。それは鬼気迫るほどのがつつきぶりで、腰の動きが速度を落とすのは、多すぎる愛液のせいでスリットからペニスが抜けそうになるときだけだ。

さっきまでの勝ち誇った態度はどこへやら、明生はなすすべもなく犯されながら、「センセ、ちよつとタンマ。もう少しゆっくりやって」

冴子はそんな訴えも耳に入らぬのか、ひたすら腰の動きをヒートアップさせてゆく。

「せ……センセ、マジで、もう……」

馬乗りになつての激しい責めに耐え切れず、明生はついに音をあげた。

「まだ……まだ、イッちゃダメ！ あたしがイクまで我慢して」

「そんなこと言われても、もう我慢できな……ああッ！」

明生の腰がビクツと跳ねて、鈴口から熱いスペルマが噴きこぼれる。それは、射精した

というよりは、無理やりしぼりとられたかのようなのだ。

「ああん、まだダメッて言ってるのにいゝ」

不満げに言いながら、冴子は深く腰を沈めると、おののく勃起をきつく締め上げた。明生は両手でシーツをつかみ、こわばりから白濁液を撃ち出すたびに全身を震わせる。ベッドのそばで冴子の暴走ぶりを見ていた梢は、あつけにとられて目を見開いていた。

快楽の嵐が通りすぎると、明生は夏バテした犬のようにぐったりとなる。冴子は、虚ろな目で天井を見上げる少年の腰にまたがって、体内に放出されたスperlマの熱さと量を膣壁で味わっていた。

「さ、先生。次はわたしの番でしてよ」

声のしたほうを向いた冴子は、ベッドとベッドのあいだに立つ千春の姿に息を呑む。なぜなら彼女は、胸の巨乳と対を成すように股間から人工の巨根をそそり立たせていたからだ。長さがゆうに二十センチはあるデイルドは太さも指がまわりきらないほどで、腰と腿のつけ根に巻きついた革のベルトが、牡器官のある位置にそれを固定している。デイルドは根元の部分が蛇腹じゃばらになっていて、自由に角度を調節できるようだ。革ベルトの隙間から覗くスリットは大きく押し割られており、おそらく股間から突き出ているのと同じものが、体内に埋めこまれているのだろう。アンドロギュヌスのような妖しい美しさに満ちた彼女

の足元には、息子の精液で汚れた黒いシルクのショーツが脱ぎ捨てられていた。

黒光りする巨根を屹立させた千春は、冴子をいざなうように隣のベッドで仰向けになる。冴子は明生の上から腰を上げると、見えない力に引き寄せられるように隣のベッドに近づいた。男性器のフォルムを模したデイルドに粘っこい視線を注いでから、膝立ちで千春の腰にまたがる。千春の《勃起》はたくましく、ともすればその状態で先端が冴子の秘裂にふれそうだった。

冴子はふだん自分が愛用している極太バイブレーターより、さらにひとまわり大きなデイルドを前にして、わずかなためらいを見せた。だが、それをふり切って腰を落とすと、本物よりも硬い亀頭が柔肉を貫き、子宮口にぶちあたる。

「んふあッ！」

冴子は大きな悲鳴とともに、巨乳を突き出し背筋をそり返らせた。膣内を満たす黒いシリコンに居場所を奪われて、先ほど、奥にぶちまけられたばかりの白濁液が秘裂からあふれる。冴子が腰を落とし切っても、スリットからはシャフトの根元が数センチほどはみ出していた。千春は腰を突き上げて、それを強引にねじこむと、

「先生、わたしのおちんちんの味はいかが？」

「あ……あ……あ……」



あきらかな容量オーバーを招いた挿入に、冴子は声も出せないようだ。

「どうやら、お気に召していただけたみたいですわね」

千春は返事がないのを勝手に解釈すると、

「それじゃあ、もっとよくしてさしあげますわ」

と言うなり、自分の腰にまたがった冴子の身体を激しく揺すり上げた。膣腔を限界まで押しひろげたデイルドの先端が、子宮口を突き上げる。たまらず逃げようとする冴子のヒップを両手でつかむと、千春は自分のほうに引き寄せた。見せびらかすように突き出された女子大生の巨乳と、仰向けになったせいで、側面に豊かなまるみをはみ出させた人妻のそれとが同じテンポで揺れる。ほどなくして冴子は、非常識なサイズのこわばりで犯される苦痛と紙一重の快感で、上体を立てていられなくなった。身体を前に倒し、弾力のあるふくらみを、よりやわらかな千春のそれに押しつける。

千春と冴子のレズプレイが佳境に入ると、それを見ていた梢が、ふたりが身体を交えているベッドに足元のほうから上がってきた。彼女もまた、母親が着けているのと同じものを装着し、股間から偽りの勃起をそり立たせている。ただ、革のベルトで固定されたデイルドは母親のよりずっと小さく、亀頭のエラを模したでっぱりもないスリムなものだった。サイドテーブルの下の抽出が開いているところを見ると、それは千春が装着している

ものと一緒に、そこにしまわれていたようだ。

冴子の背後で膝立ちになった梢は、極太のデイルドが秘裂に出入りするさまに熱い視線を注ぐ。レイプまがいのやり方で、なけなしのスペルマをしぼりとられた明生は、疲れた顔で隣のベッドのできごとを眺めていたが、妹がなにをしようとしているのか悟ると、

「梢、センセのうしろに入れるんだったら、ちゃんとローション使えよ」
「うん」

梢は素直にうなずくと、片手に持っていたプラスチック製の小さなボトルを兄に向かってふつてみせた。少女はボトルのキャップをとると、透明なローションを上下に揺れる冴子のヒップの谷間に、とろりと垂らす。

「ひゃッ！」

冷たい感触に、冴子がかわいい悲鳴をあげた。腰の動きを止めて、知らぬ間に背後に忍び寄っていた梢のほうを向く。

「なにをする気なの？」

「心配しなくても、大丈夫ですわ」

と千春が答え、ヒップのまるみをつかんだ手で谷間を大きく割り開く。

「そうよ、気持ちいいことするだけだから……」

梢はデリケートな部位に垂らされたローションを指で塗りひろげ、股間に生やした勃起にもそれをまわりつかせた。最初は冷たく感じられたローションが塗りひろげられると、すばまりが熱くなってくる。どうやらこの粘液には、血管を拡張させ粘膜を敏感にする成分が含まれているようだ。こうした作業のあいだも、千春はぬかるみに深く打ちこまれた太い楔をうねらせて、痺れるような快感で冴子を惑乱させる。

やがて、準備がすっかり整うと、梢は膝を前ににじらせて、デイルドの先端をすばまりの中心にあてがった。

えッ！ まさか？

冴子が梢の意図を察した瞬間、少女の腰が前に送られて、細身のデイルドがアヌスを貫く。

「はひッ！」

ローションのおかげで、細身のデイルドの挿入は拍子抜けするほどスムーズだった。だが、挿入に慣れていないアヌスには、実際の体積より、はるかに大きなモノが入ってきたような感覚があった。背後から突き入れられたデイルドが直腸の中に根元まで埋没すると、冴子は息が止まりそうになる。

いっぱい……いっぱいになってる。おしりもオ○○コも、すごいのでいっぱいになっ



ちやつてる。

冴子に対しては嗜虐的しぎやくてきな性癖を剥き出しにする少女は、最初から容赦ない腰づかいでバ
ージンを破られたばかりのアヌスを責め立てた。だが、貪欲な女体は苦悶しながらも、初
めの肛虐こうぎやくから果敢に快楽を貪ろうとする。最初のうちこそ、三人の腰の動きはバラバラ
でなかなか噛み合わなかった。だが、しばらくすると、本能の導きへだによるものか、ずっと
練習を重ねてきたように巧みなものになってくる。膣腔と直腸を隔てる薄い肉の壁を通し
て大小二本のデイルドがこすれあい、前後のホールを同時に貫かれる快感に我を忘れた冴
子が獣じみたあえぎをあげる。

一見すると、冴子だけが一方的に責められているようだが、実際は彼女の秘裂を侵して
いるのと同じモノが千春と梢の体内にも深くうずめられていて、それが腰の動きに合わせ
てぬかるみの奥を強く突いていた。だから、冴子を責めれば責めるほど、同じだけの快感
が自分自身に返ってくる。冴子はもちろん、千春と梢も頬を火照らせて、はしたない声を
半開きの唇からひっきりなしに漏らしていた。このままだと二本の双頭デイルドで連結さ
れた三人が、揃って絶頂に達するのもそう遠くないことのように思われる。

最初、明生は隣のベッドの3Pを興味深げに見ていた。だが、しばらくすると、ひとり
だけ仲間外れにされているのに耐えられなくなり、ベッドから降りてそちらに近寄って行

く。母と妹と家庭教師が交わる姿に刺激されたのか、それとも、こんな変則的なプレイに参加するチャンスはめったにないと思ったせいなのか、少年のペニスは驚異的な回復力でふたたび力を漲^{みなぎ}らせていた。明生はベッドに上がると、千春の顔を膝立ちでまたぎ、あえぐ冴子の口元に自分の勃起を突きつける。

「センセ、しゃぶって」

明生の言葉が終わるか終わらないうちに、冴子は鼻先にソーセージをぶらさげられた野良犬のように、若い肉茎にむしゃぶりついた。本当に食べてしまうのではないかというほどの勢いで、乾いた愛液をこびりつかせた勃起を舐めしゃぶる。

冴子の激しいフェラチオに負けまいと、千春は息子の太腿に手をかけて頭を起こすと、鼻先にぶらさがる陰囊に吸いついた。ふくろの上から片方の睪丸を頬ばると、こつてりとした舌づかいで舐め転がす。ペニスと付属のふくろを同時に責められて、明生は喉の奥で快樂のうめきをあげた。

各々がたがいに煽られるように女たちの腰の動きが激しさを増し、ただでさえ過重積載のベッドがきしむ。千春と冴子の口が塞がれたせいで、梢のかわいい嬌声がひととき目立つようになり、澄んだソプラノがセックスの匂いが充満する部屋の空気を震わせた。

「こんなのって……こんなのって、すごすぎ……。なんか気持ちよすぎて、おかしくなっ

ちやうよお」

ベッドの周囲に張りめぐらされた淫らな磁場にとりこまれた少女は、もはや自分では腰の動きを止められないらしい。なにかに憑かれたように、冴子のアヌスと自分の秘裂を同時に突きまくる。

「センセ、ボクも……ボクも、もうイクよ。センセの口ン中に出しちゃうよ」

大好きなお兄ちゃんがイクとわかって我慢の糸が切れたのか、まずは梢が絶頂に達し、つづいて明生が冴子の口中で亀頭を弾けさせた。それは、まさしく最後の力をふりしぼつての射精で、どこにこれだけの精液が残っていたのかと不思議に思うほどの量が鈴口からほとばしる。熱いスペルマを喉の奥に受けたのを引鉄に、冴子も梢と明生のあとを追ひ、同時に千春も意識を天に駆け昇らせた。連鎖的に引き起こされた四つのエクスタシーが、複雑な形で繋がった四人の男女の頭の中を真っ白にする。

「ん……んッ……んくッ……」

冴子はめくるめく悦楽の中、今日のクライマックスが、これからはじまる爛れた日々の幕開けであることを予感しながら、口中にぶちまけられたスペルマを必死に飲み下していた。



Epilogue

トゥルルルル・トゥルルルル・トゥルルルル……。

ふたつのベッドに挟まれたサイドテーブルに置かれた電話の呼び出し音が、寝室の中に鳴り響く。ヘッドボードに背を預け、両足をだらしなく投げ出していた明生が物憂げに手を伸ばして、受話器をとった。

「ハイ、高瀬です」

他所行きに作った声が、受話器から出た相手の声を聞いたとたんに砕けた調子になる。

「なんだパパか」

電話の相手は単身赴任で仙台にいる父親の慎一しんいちだった。

「え、ママ？」

明生はいったん言葉を切って、隣のベッドに目をやった。そこでは、母親の千春と妹の梢が全裸でからみあっている。千春は明生が受話器をとるなり、電話の相手にこの部屋でなにが行われているのかを悟らせないよう、それまでずっと甲高いあえぎを漏らしていた梢の口を自分の唇で塞いでいた。しかし、そうする一方で、スリルあるこの状況を愉しんでいるのか、楽器を奏でるような巧みな指づかいで娘の秘裂をまさぐるのをやめようとはしない。

明生は千春が愛撫の手を止めそうにないのを見てとると、

「ママは、ちょっと今、手が離せないみたい」

夕食の用意で鍋を火にかけてでもいると思っただのか、なにも知らない慎一は妻を電話口
に呼ぶのをあきらめて、今度は目の中に入れても痛くないほど溺愛^{できあい}している娘のことを訊
いた。

「梢は……」

明生が妹が電話に出られない理由を考えていると、母親の指技に酔わせられた梢が、ピ
ーンと四肢を突っ張らせた。どうやら、絶頂に達してしまったようだ。

「梢はさっきまでいたんだけど、どつかにイツちゃった」

電話なのをいいことに、明生の口元には噛み殺し損ねた笑みが浮かんでいる。

「うん……うん……大丈夫だよ、ちゃんとやってるってば」

みんな元気かとか、ちゃんと勉強してるのかといった毎度おなじみの質問に、明生は内
心うんざりしつつも、それを気取られないよう適当な返事をする。

「え、家庭教師の先生？ それなら、六月ぐらいから来てもらってるよ。うん、そう……
そんぐらいのころ。やだなあ、別に困らせてなんかないよ。ホントだってば。うん……う
ん……榊原さんっていつて、熱心で、とってもいい先生だよ」

と言いながら、明生はTシャツ一枚の自分の股間に顔をうずめて、熱心に勃起をしゃぶ

りたてている全裸の冴子に目をやった。それから、なおも二言三言、父親と言葉を交わしている、冴子がペニスを咥えたまま、上目づかいで少年の顔を見る。明生はそれにウィンクしてみせながら、

「だいじょーぶ、パパはなんにも心配しなくていいよ。みんなうまくやってるからさ」

へおわり



本書は『キャンディータム』（辰巳出版刊）掲載の作品を一部加筆・修正したものです。
また、イラストは本書のためにすべて新規に描き下ろしました。

あとがき

やっと出た……。

今の感情を一言で表すと、こうなるでしょうか。

ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、本作品は、辰巳出版の美少女コミック誌『キャンディータイム』に、一九九九年から二〇〇〇年にかけて連載されたものに多少の修正を加えたものです。本来は版元の辰巳出版で単行本化する予定だったのですが、いろいろな大人の事情があつて、今回、ようやくケイエスエスから刊行の運びとなりました。思えば、ここに至るまでは紆余曲折があり、語り尽くせぬ思い出が……つて、こんなことは読者の方には関係のないことですね。ただ、一時は出版をあきらめたこともある作品だけに、作者としては喜びもひとしおです。

エロは濃いけど、エグかつたりひどかつたりしない。奇を衒^{てふ}わない展開で、エロの描写に磨きをかける。本作品はこの二点に留意して執筆したのですが、雑誌連載という発表形態を考慮したためか、私の作品にしてはめずらしく（笑）、全編にエロシーンがまんべなく含まれていて、けつこく、使い勝手のいいものになっていいるのではないかと思えます。

本作品が気に入った方は、私の他の作品も、ぜひ……と言いたいところですが、一昨年の夏に『アマガジン』から出た『だいすき』（前後編）（イラスト・佐野タカシ）を除いて、既刊の作品はまったく書店にないのが現状です。たぶん、この本が出る頃には、前述の『だいすき』も姿を消していることでしょう。それでもめげずに、私の過去の作品を読んでやろうという奇特な方は、We

り上にある電子書店パピレスを覗いてみてください。作者のネオノベルズ時代作品（『ゆんゆん☆パラダイス（前後編）』『少年注意報（前後編）』『ときめきLesson』『おませでゴメン』『彼女が髪を切った理由（前後編）』『シンデレラ狂想曲』『Cinder pay』『C ha i n d』が有料でダウンロードできます。 <http://www.papy.co.jp/>にアクセスして、アダルトフロアで作者名の検索をしていただければ、すぐに見つかると思います。あと、最近の仕事としては、富士見ミステリー文庫で、『なばかり少年探偵団』という非成年の健全な学園ラブコメを書いていきます。現在、『やぐらの季節』『雨のちカゼ』とシリーズ第二弾までが刊行中で、こちらも見ただけでとうれしいです。

最後になりましたが、拙作にすてきなイラストを添えてくださったA10さん、畑違いの仕事で汗を流してくださったMさん、Tさんをはじめとするケイエスエスのみなさん、連載時にイラストを描いていただいたMEEくん先生、そのときの担当だったコミックハウスのKさんら、本書の成立に尽力してくださったすべての方に心より感謝します。

『スウィート・ドリームス・アゲイン／ボーダーライン』を聴きながら――。

雑破業